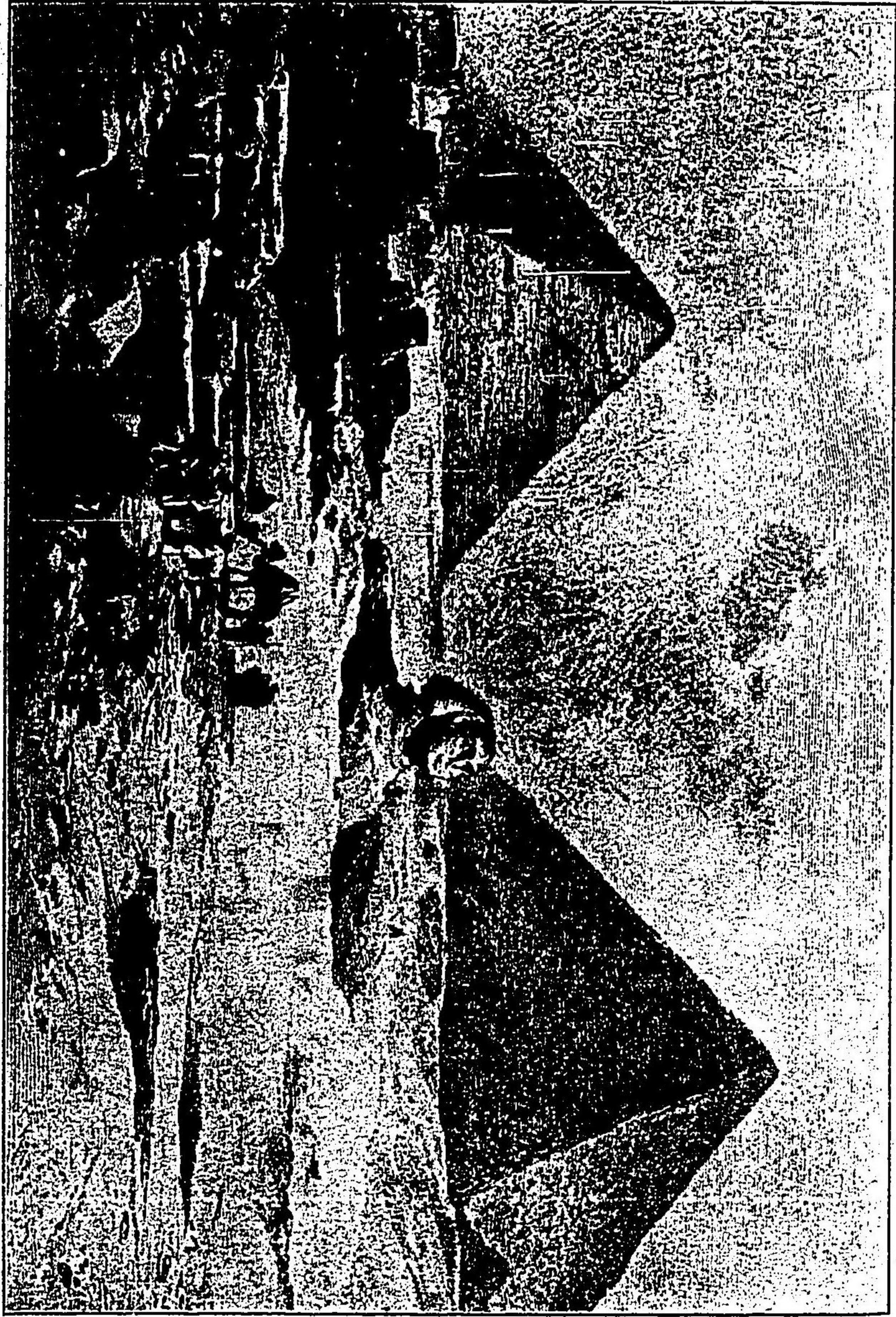


古代希臘の諸彫刻(神像)

アルテミス アポロ
アフロディテ アフロディテ



エジプトのピラミッド及びその周辺の景況





ツヴァンケリ
(スウェーデンの宗教改革者)



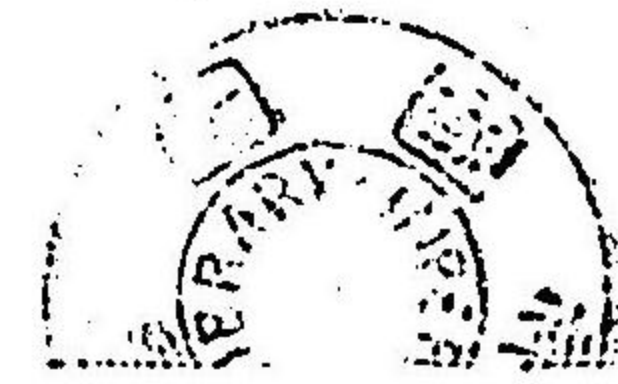
ルーテロ
(宗教改革の本尊)

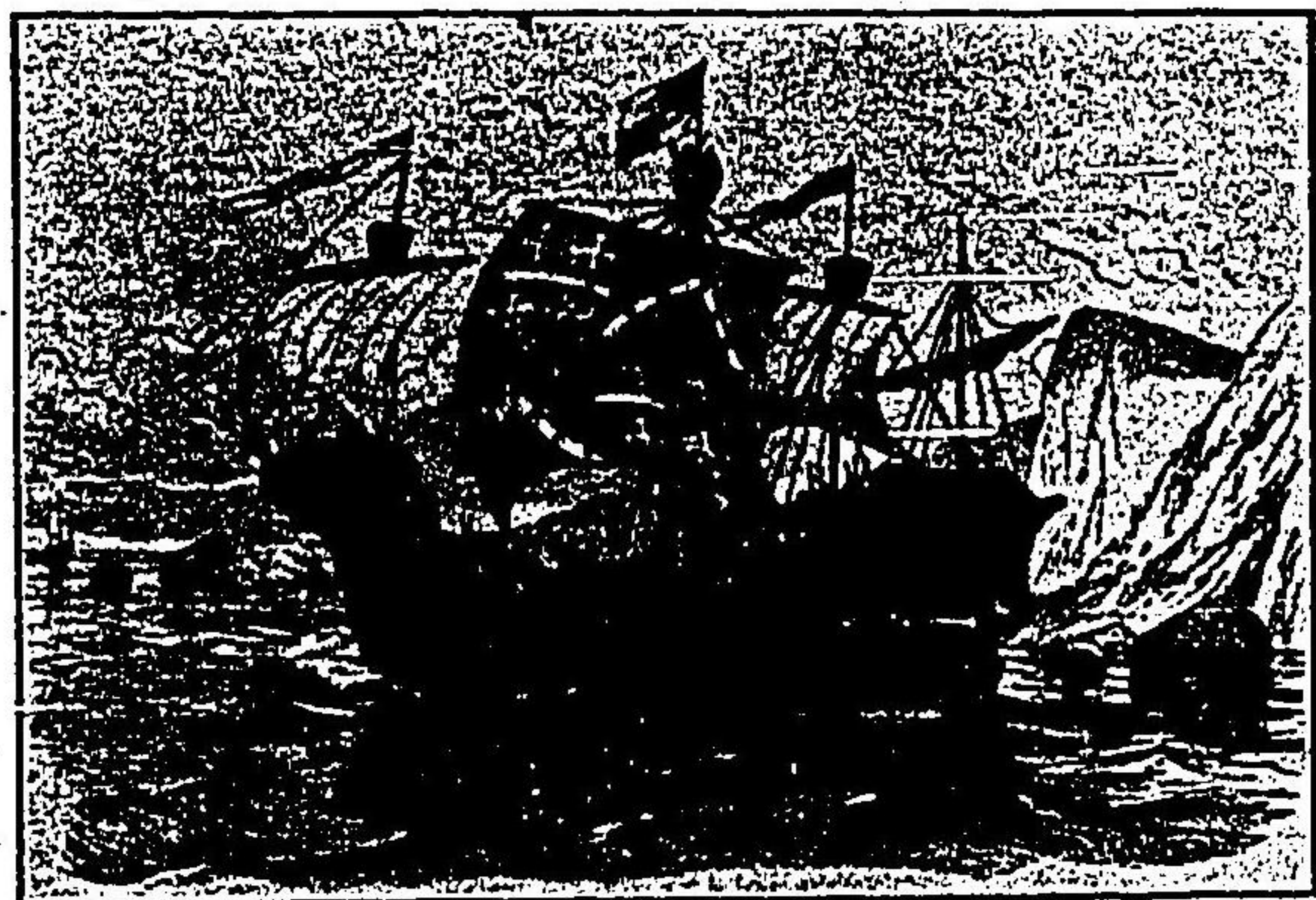


メランヒトン
(宗教改革者の一人)



ザクソン公 フレデリック

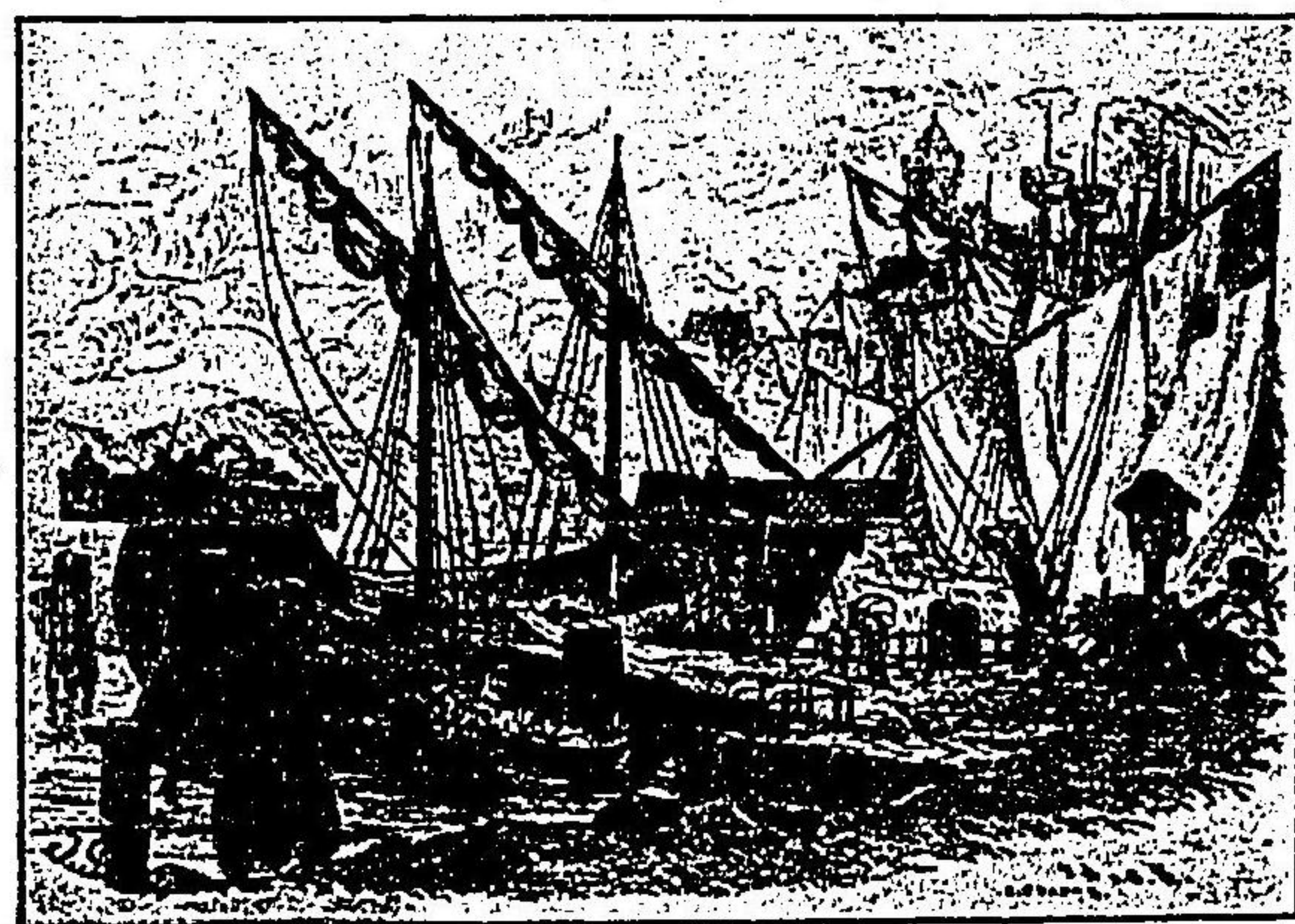




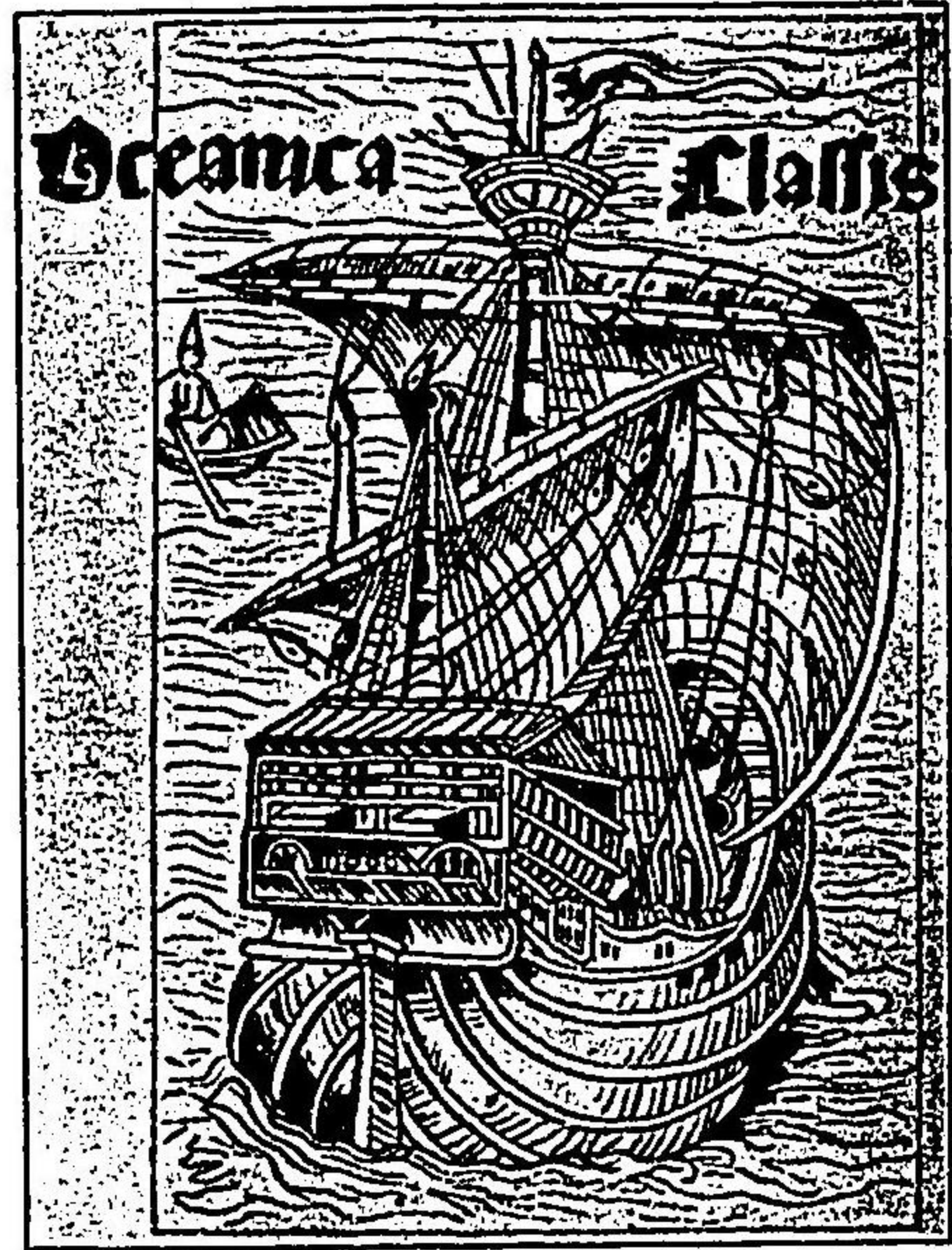
十二世紀に於けるノルマンの戦艦



中世時代の騎士



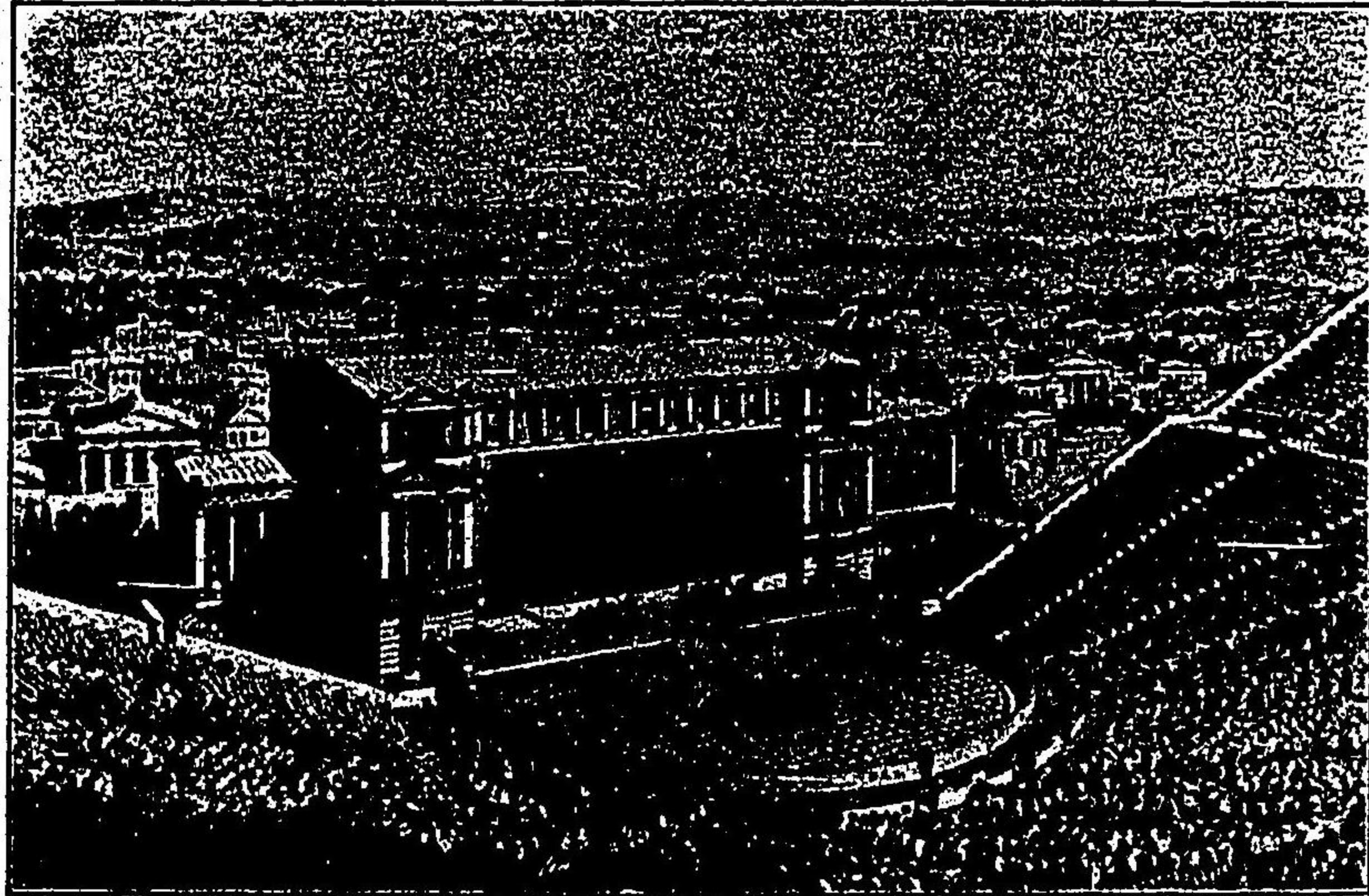
十四世紀に於けるハンブルク市府の戦艦



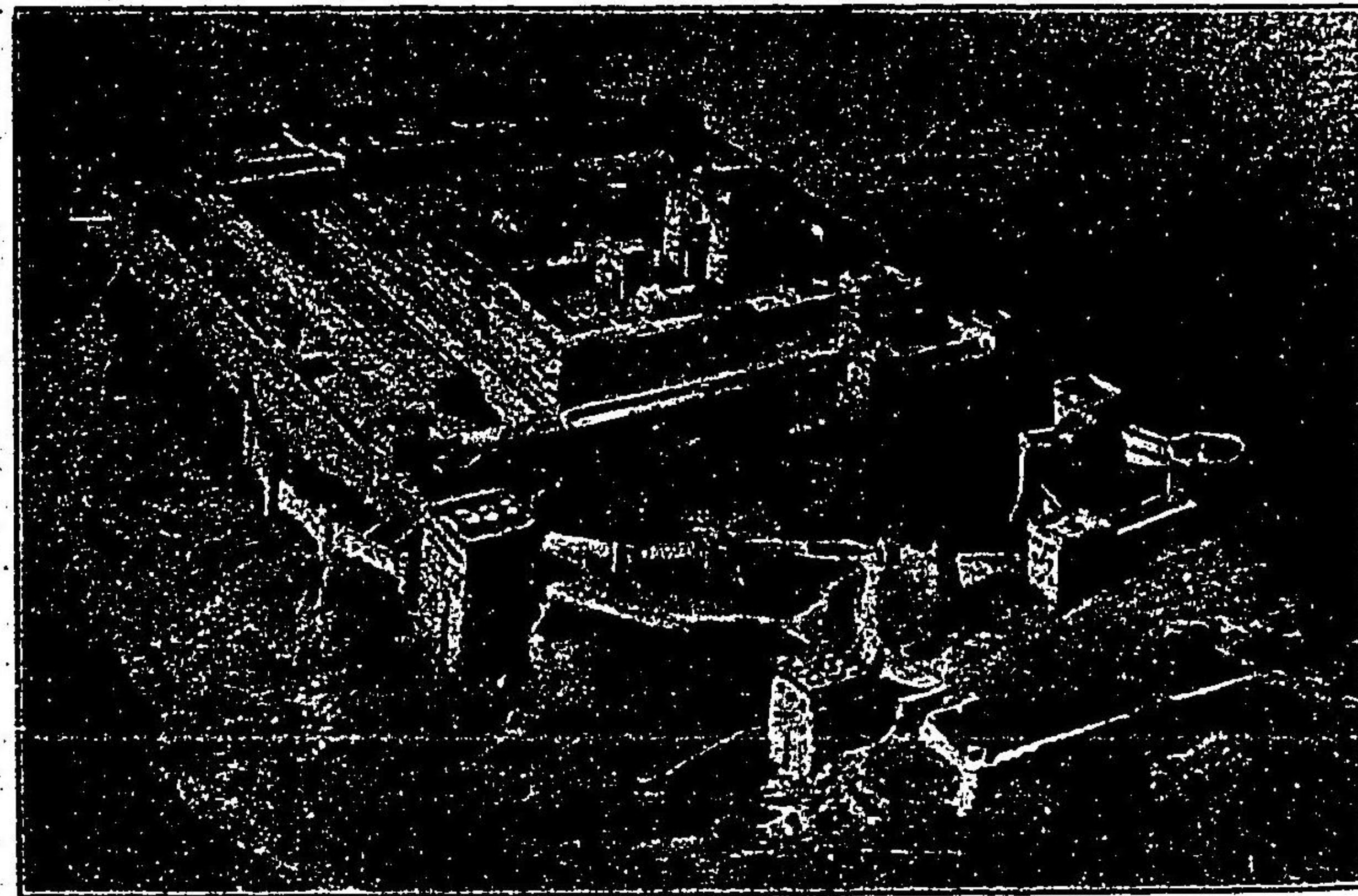
米國發見當時の西班牙船



十五世紀に於ける生活の状況



アモン府のダニスス劇場

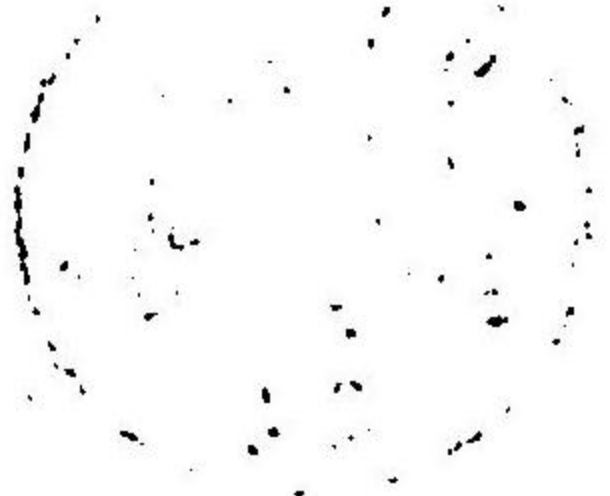


エルサレム府の寺院

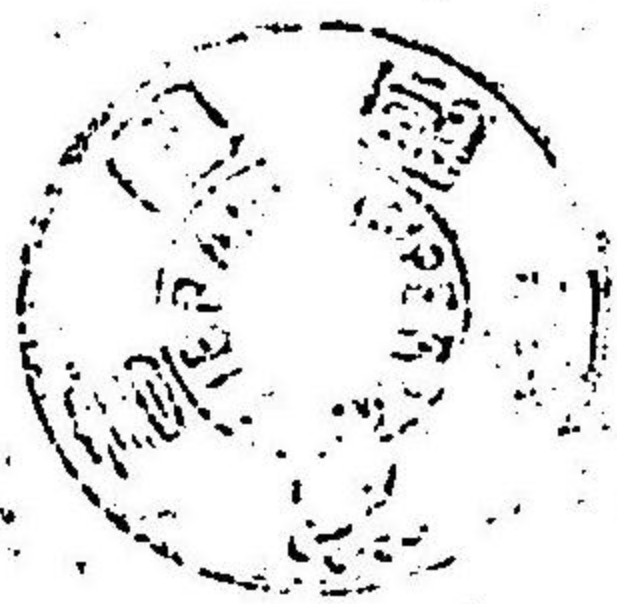
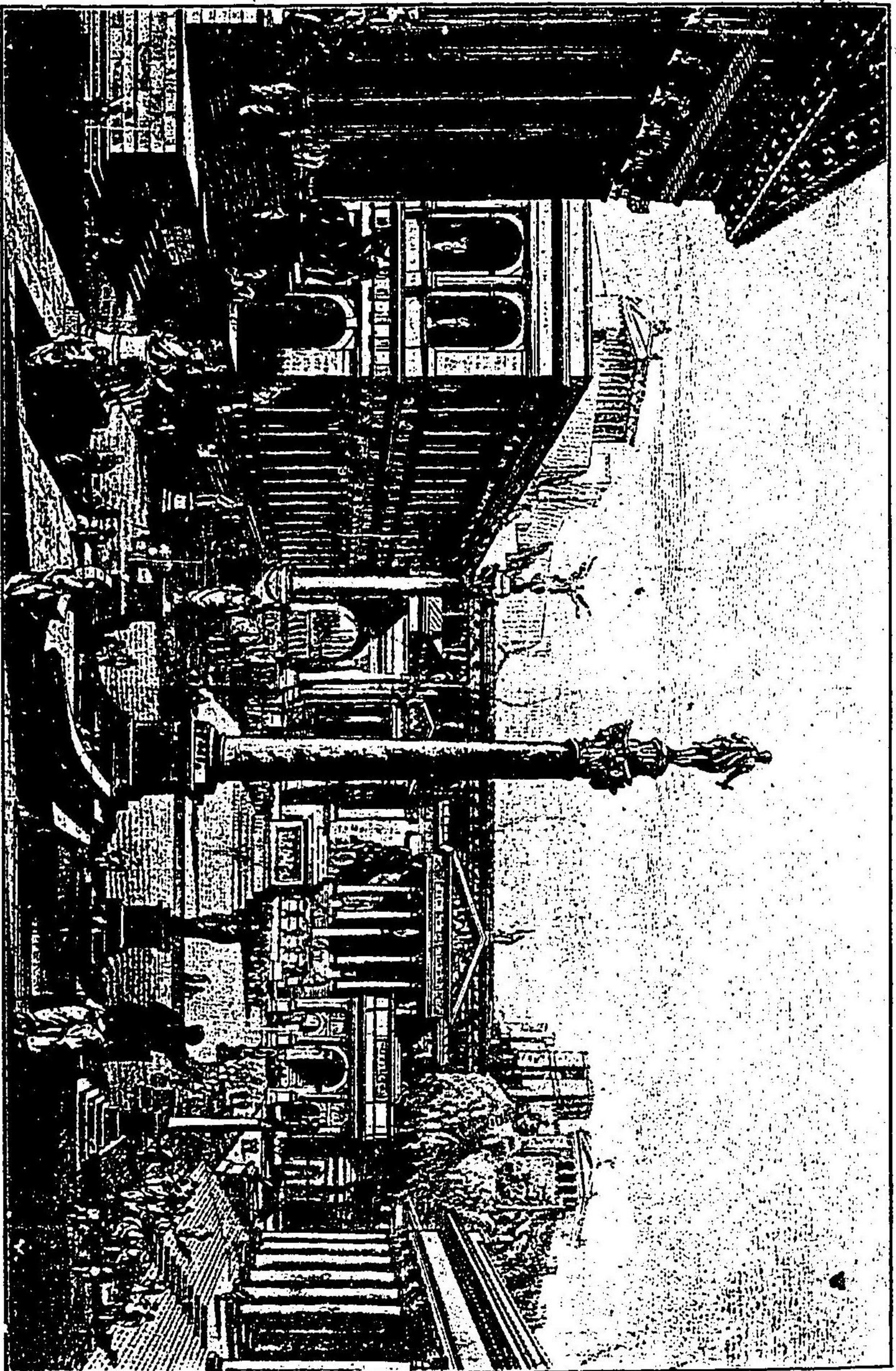




アセソフ府のアカホリ入城

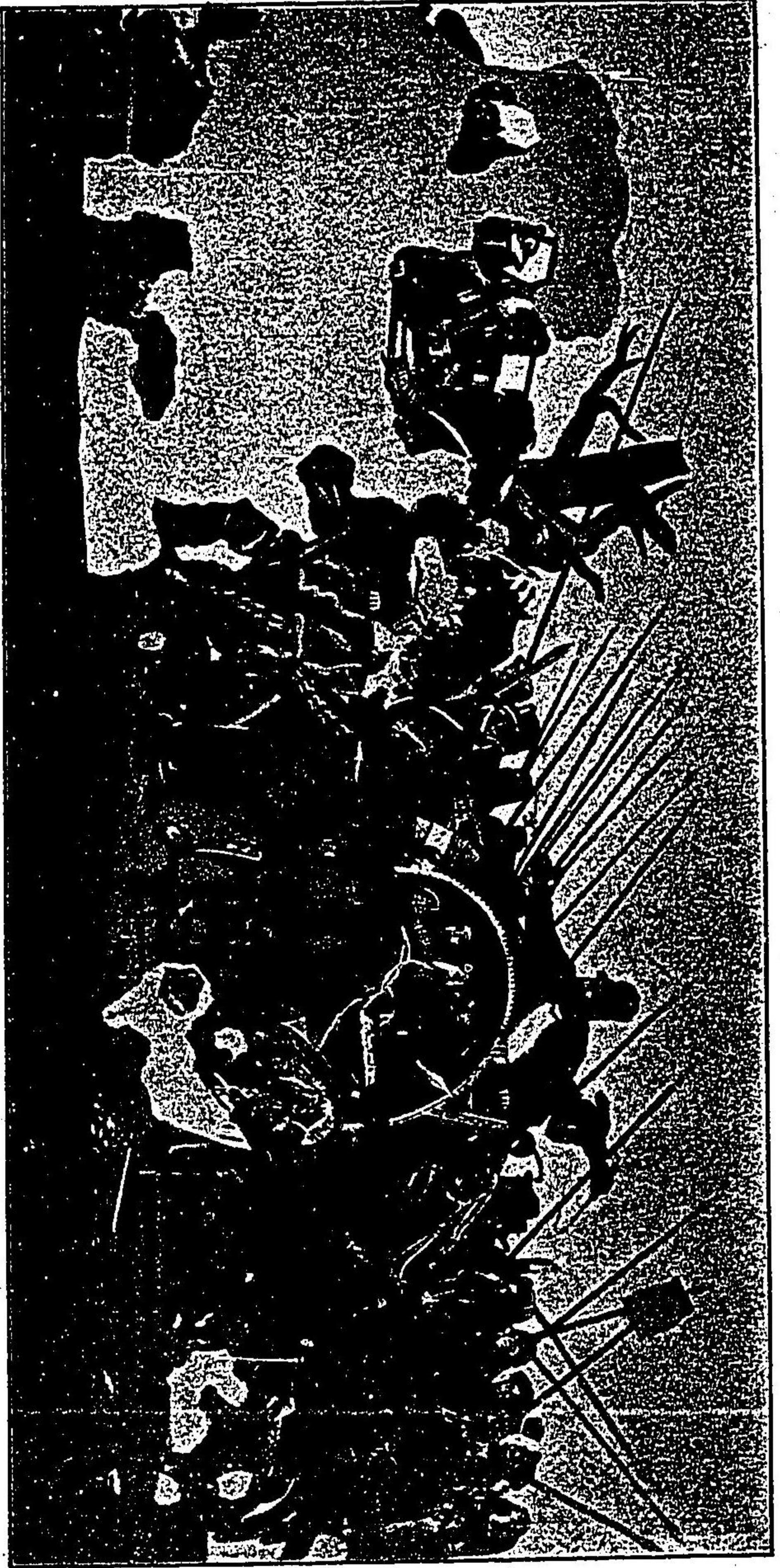


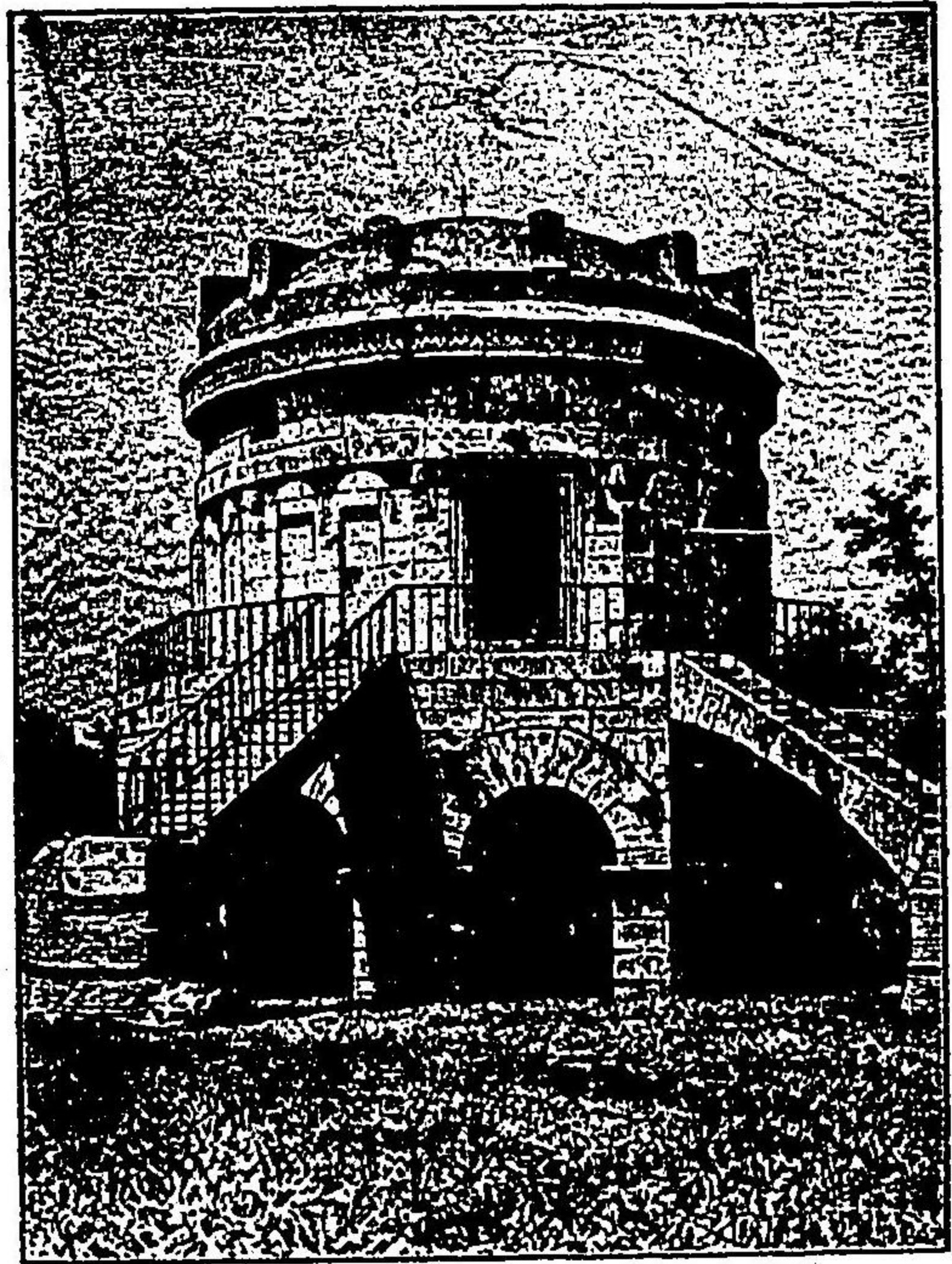
羅馬城内の状況



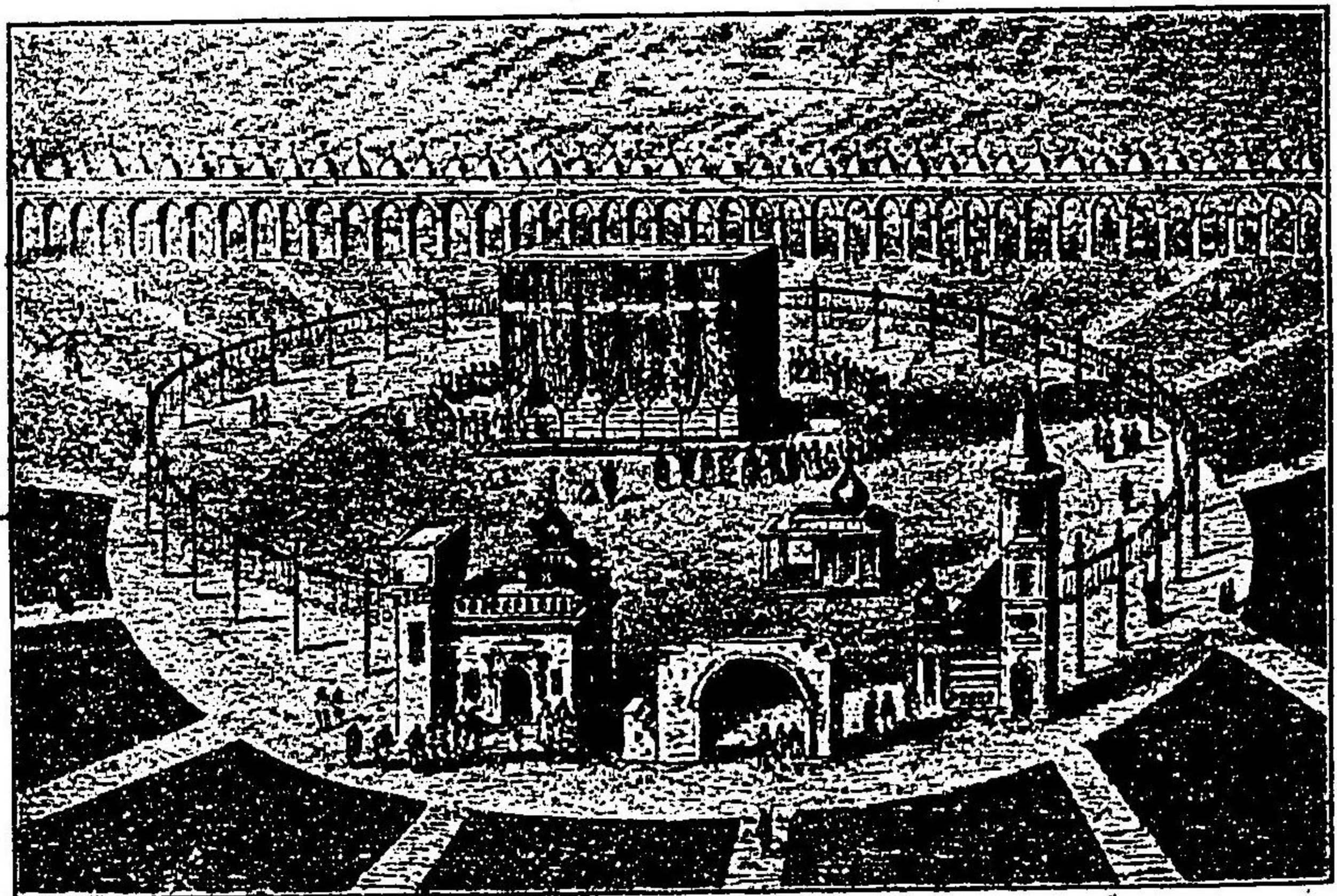
UNIVERSITY OF TORONTO

アレキサンダー大王の観光





ラヴェンナ府に於けるセオドリック王の墓



メッカ府に於ける回々教の聖場



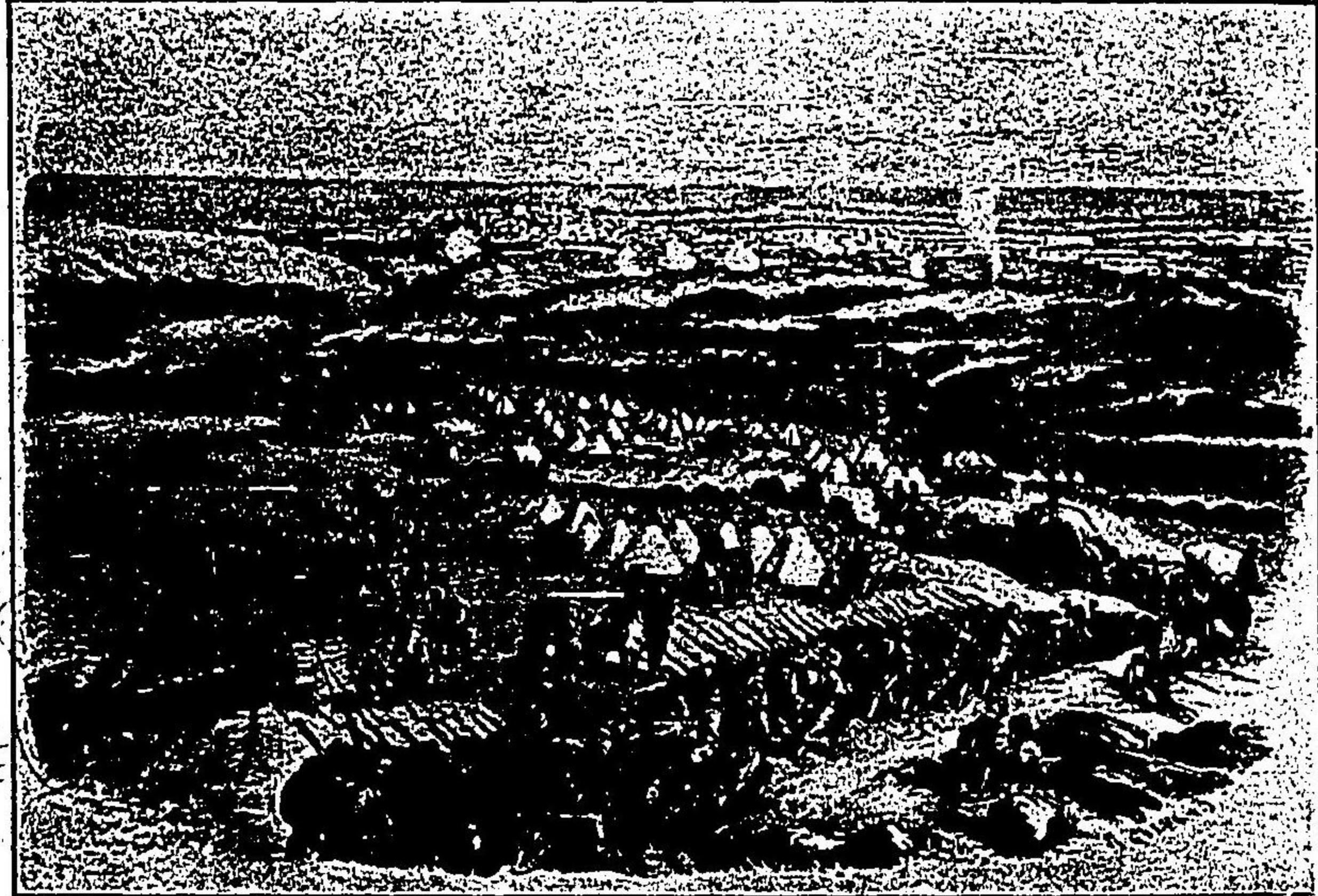


ウェリントン将軍

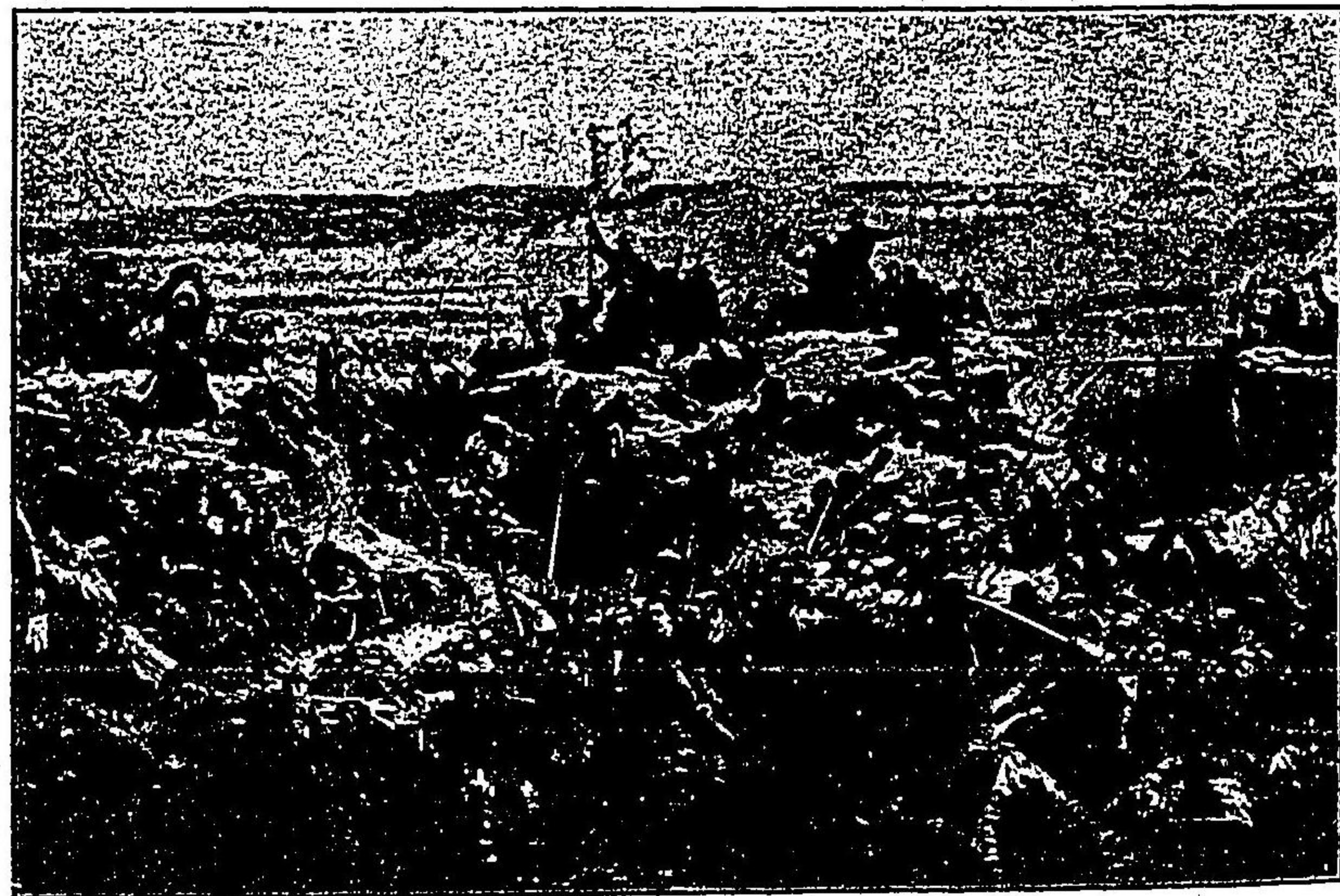


ワーテルールの決戦





セバストポルの圍み (1855)



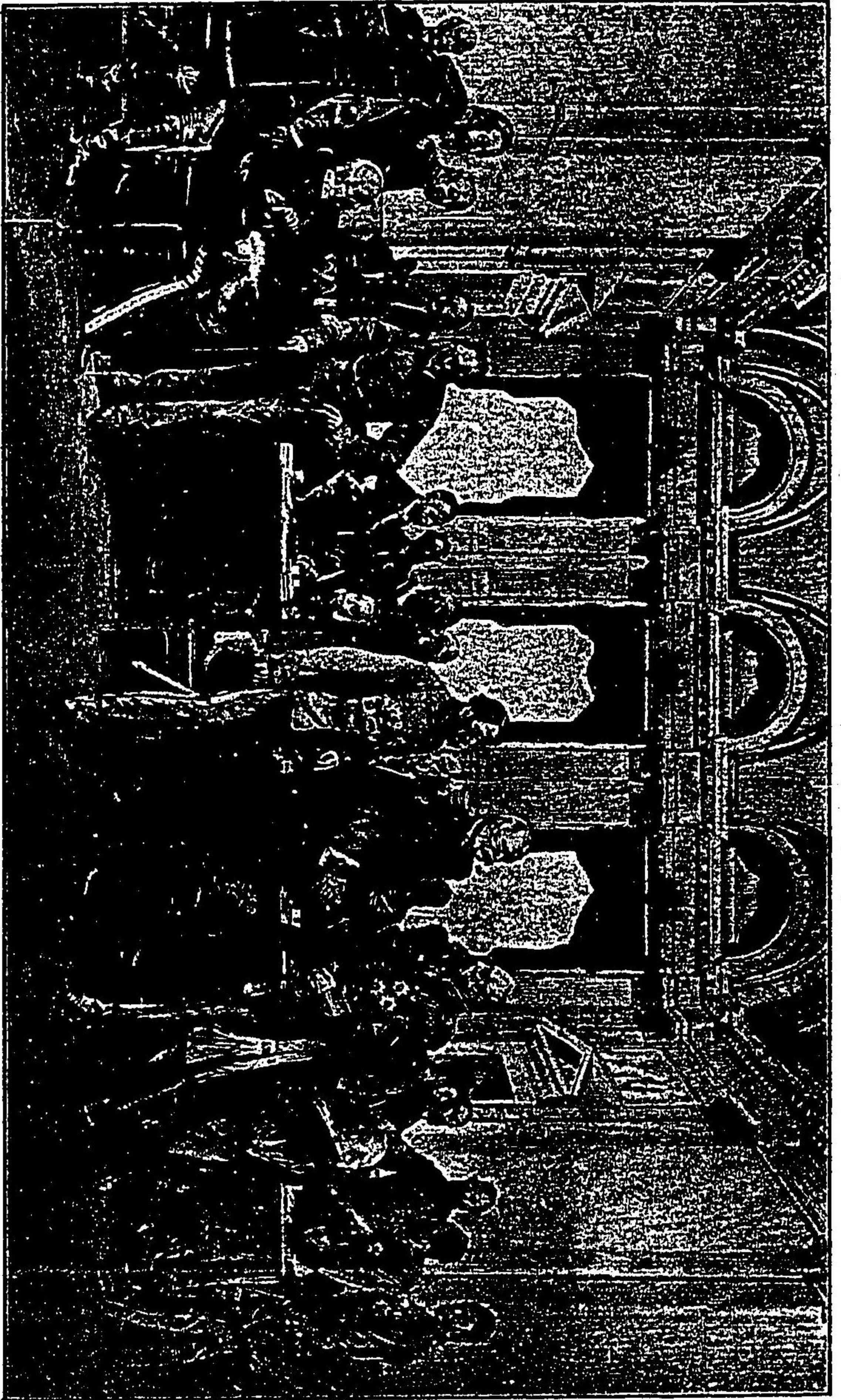
マラコフ砲臺の攻撃 (1855)

ロンドン

イギリスの歴史

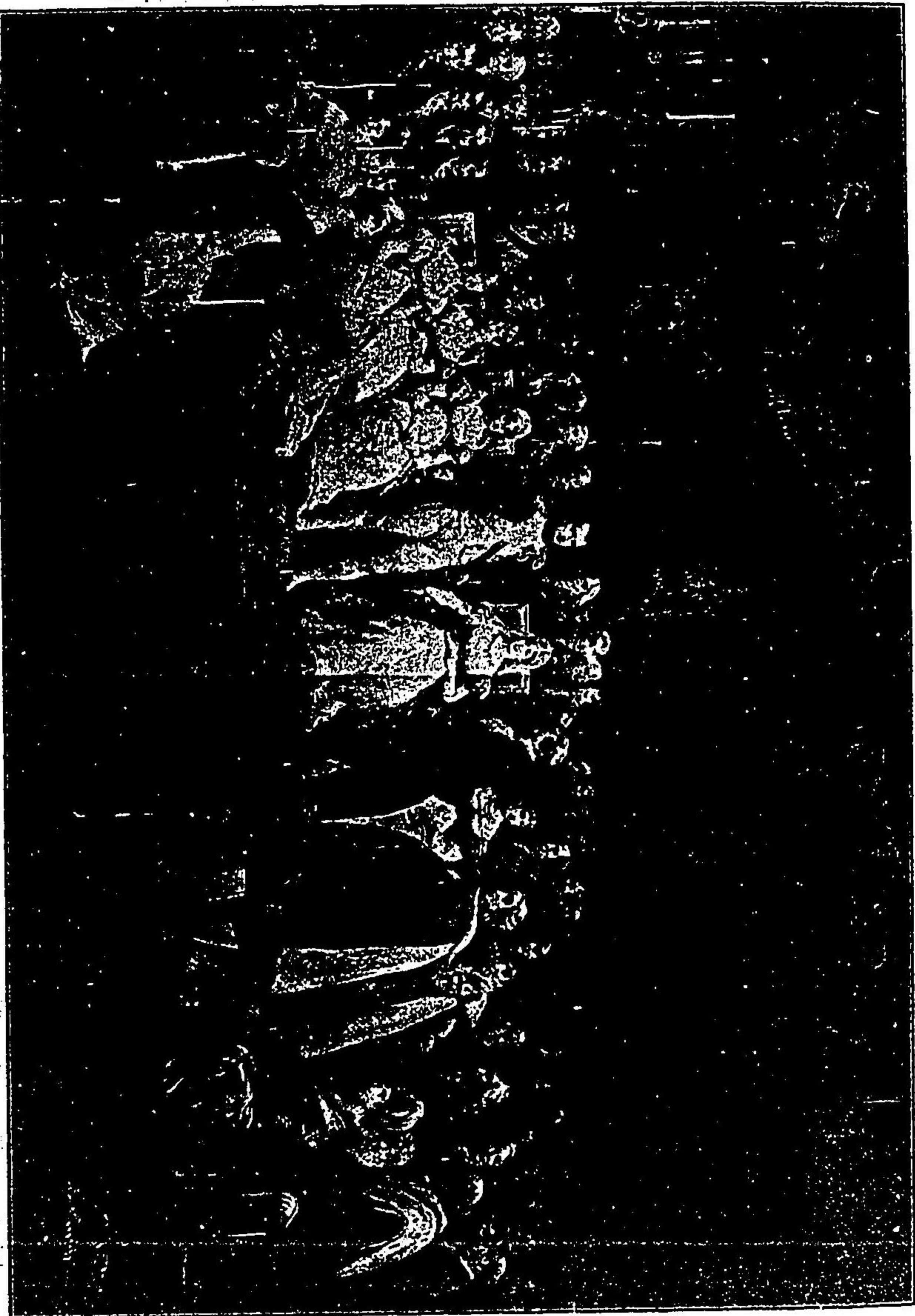
1777





メソポタミアの書庫 (1878)





ナポレオン一世の朝延

[Faint, illegible text on the right page, possibly bleed-through or a very light print.]

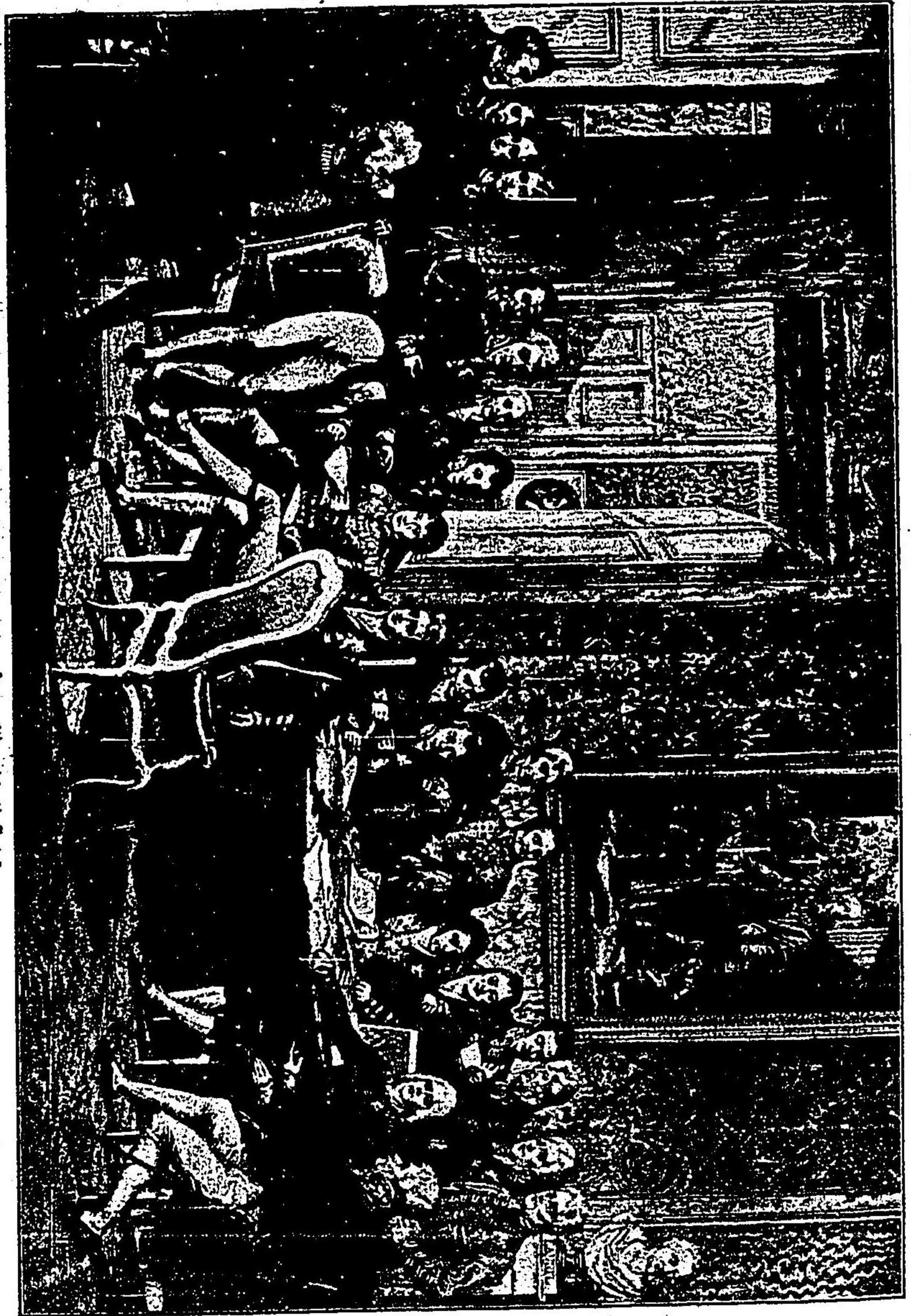


モスコウ府に於けるナポレオン一世
(魯西亞征伐の時)

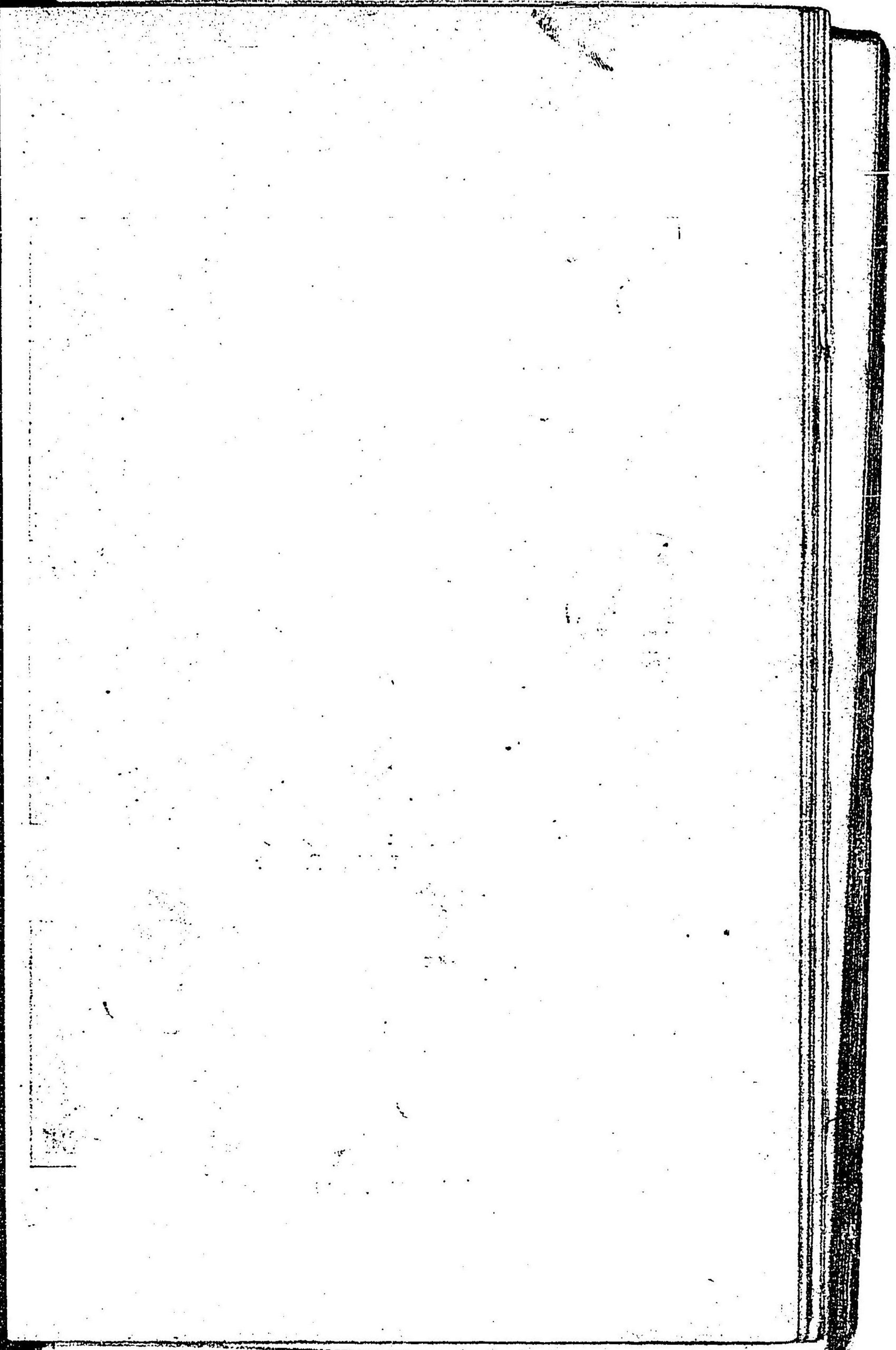


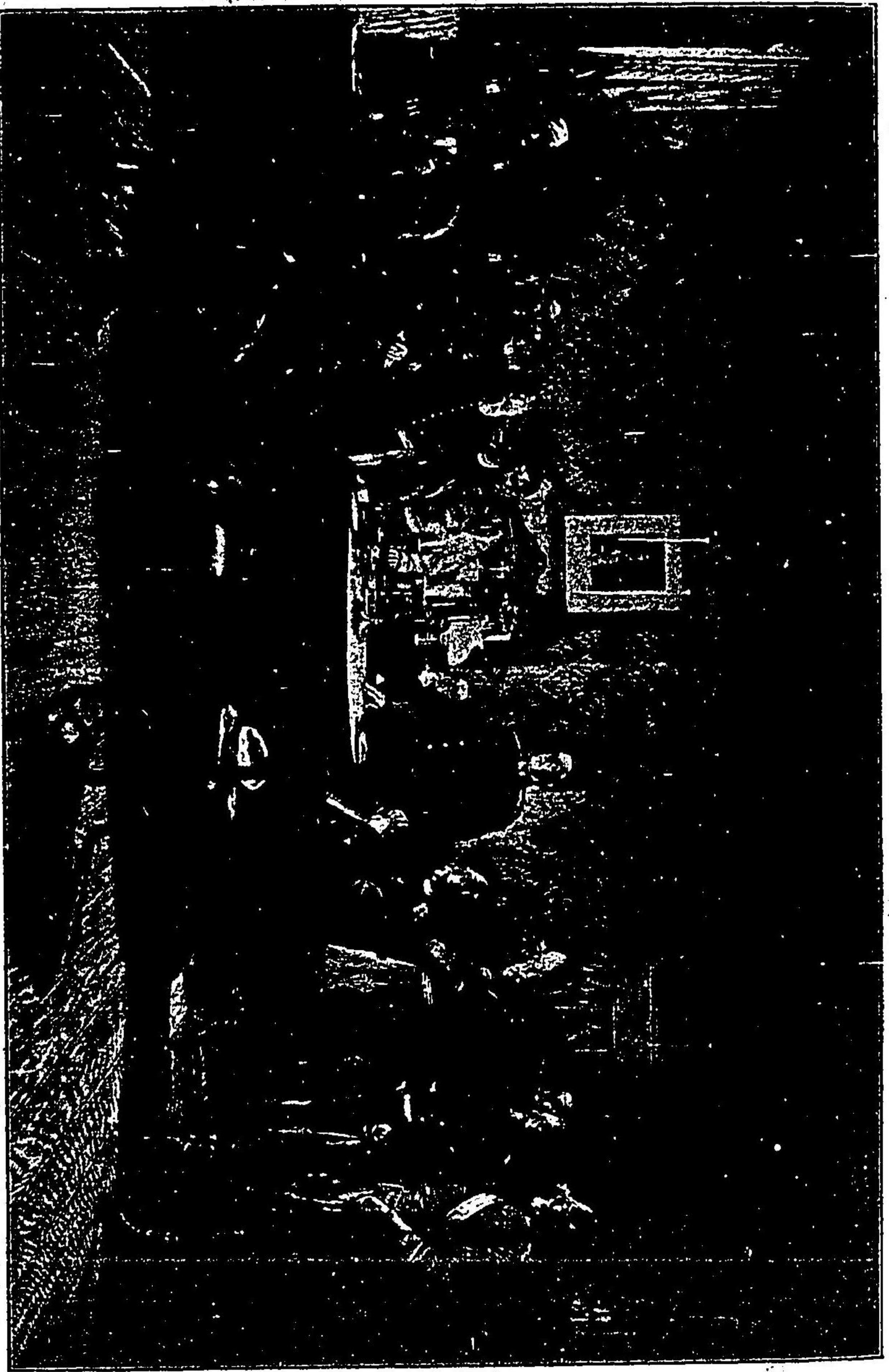
魯西亞出征の佛軍遠陣の状況



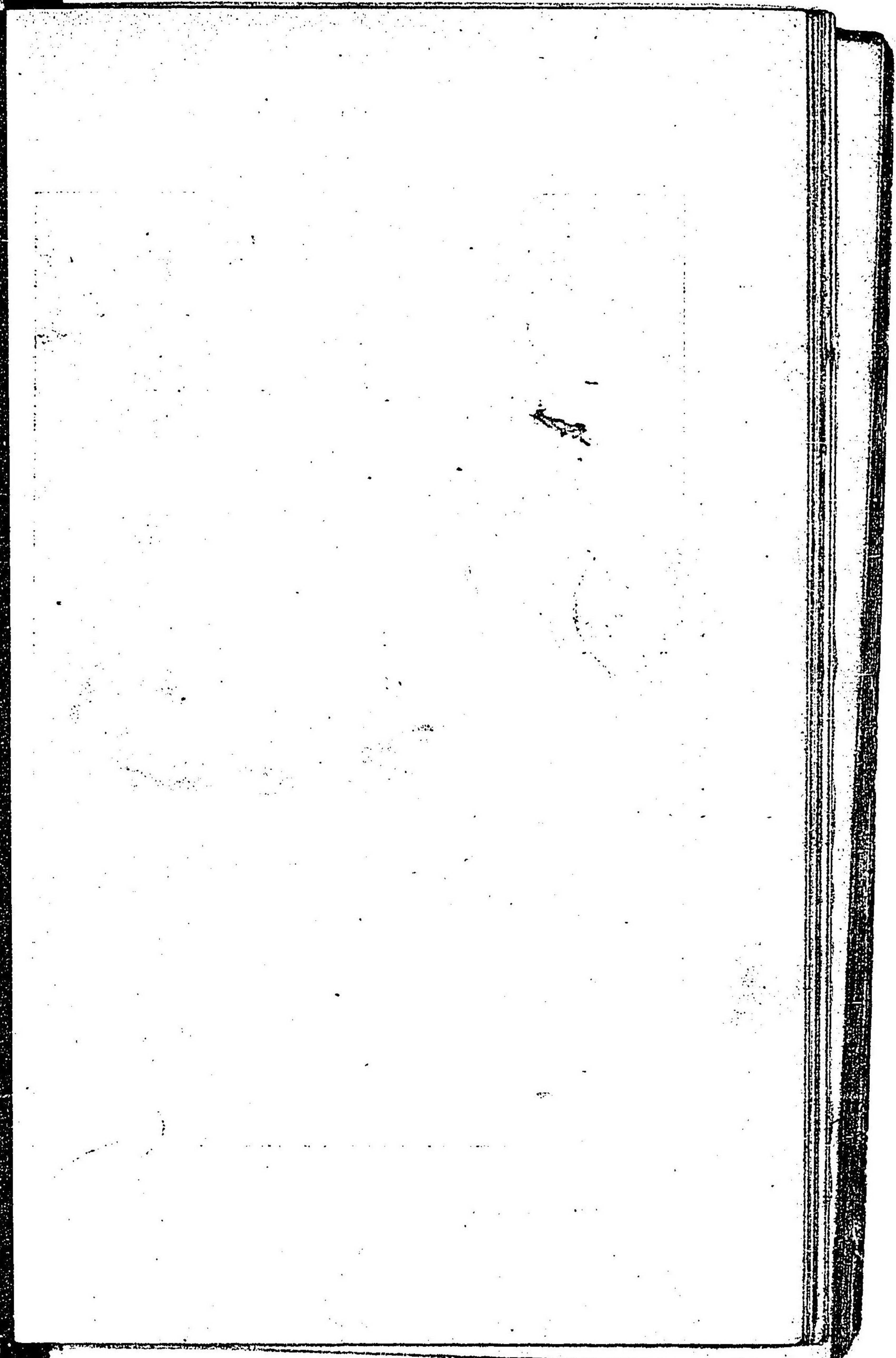


會膳 (1879)





普佛戦争に於て佛軍降参の談判(1870年九月二日)



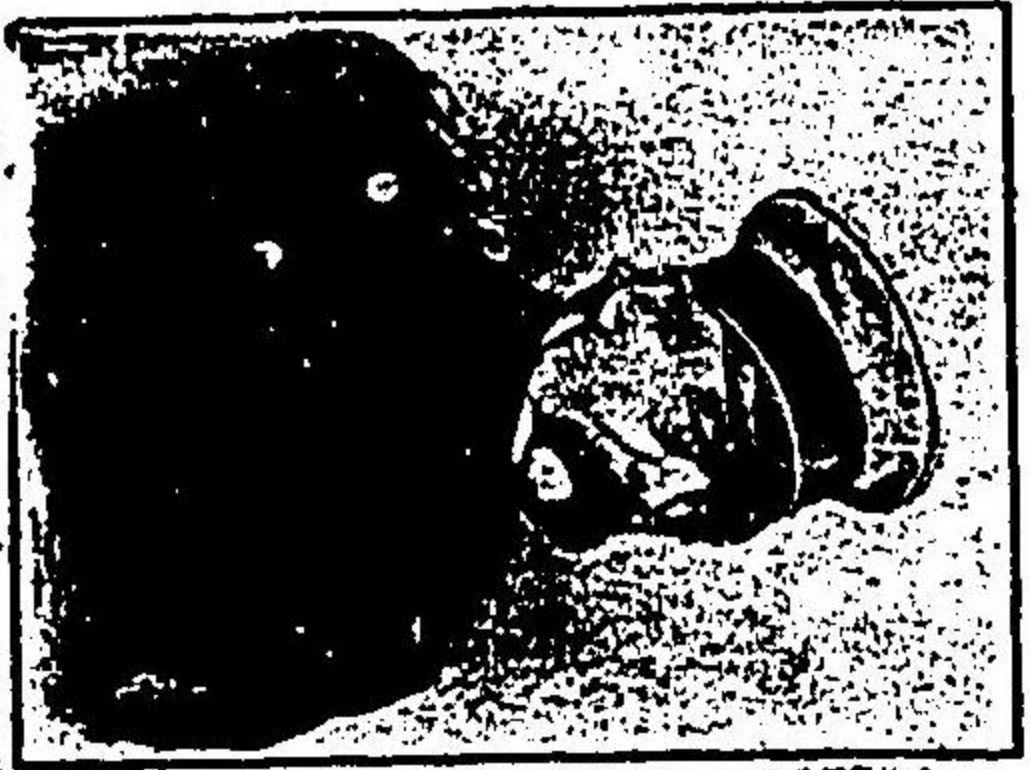


聖母マリアの皇太子ニコラウスの襲撃に相出會す

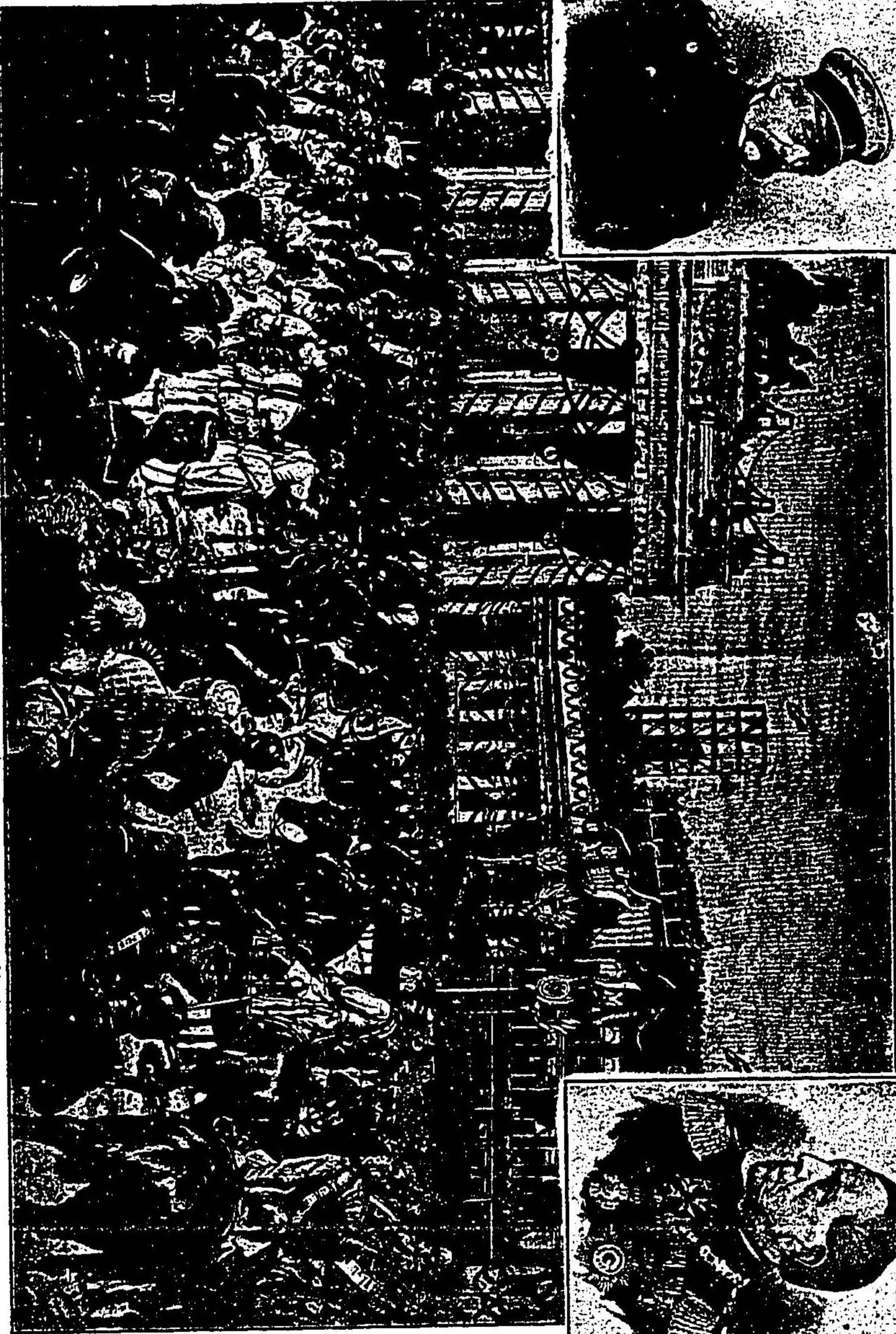




ビスマルク宰相



モルトン將軍



獨逸のボニーアム諸侯國等に勝ちてベルリン府に凱旋す

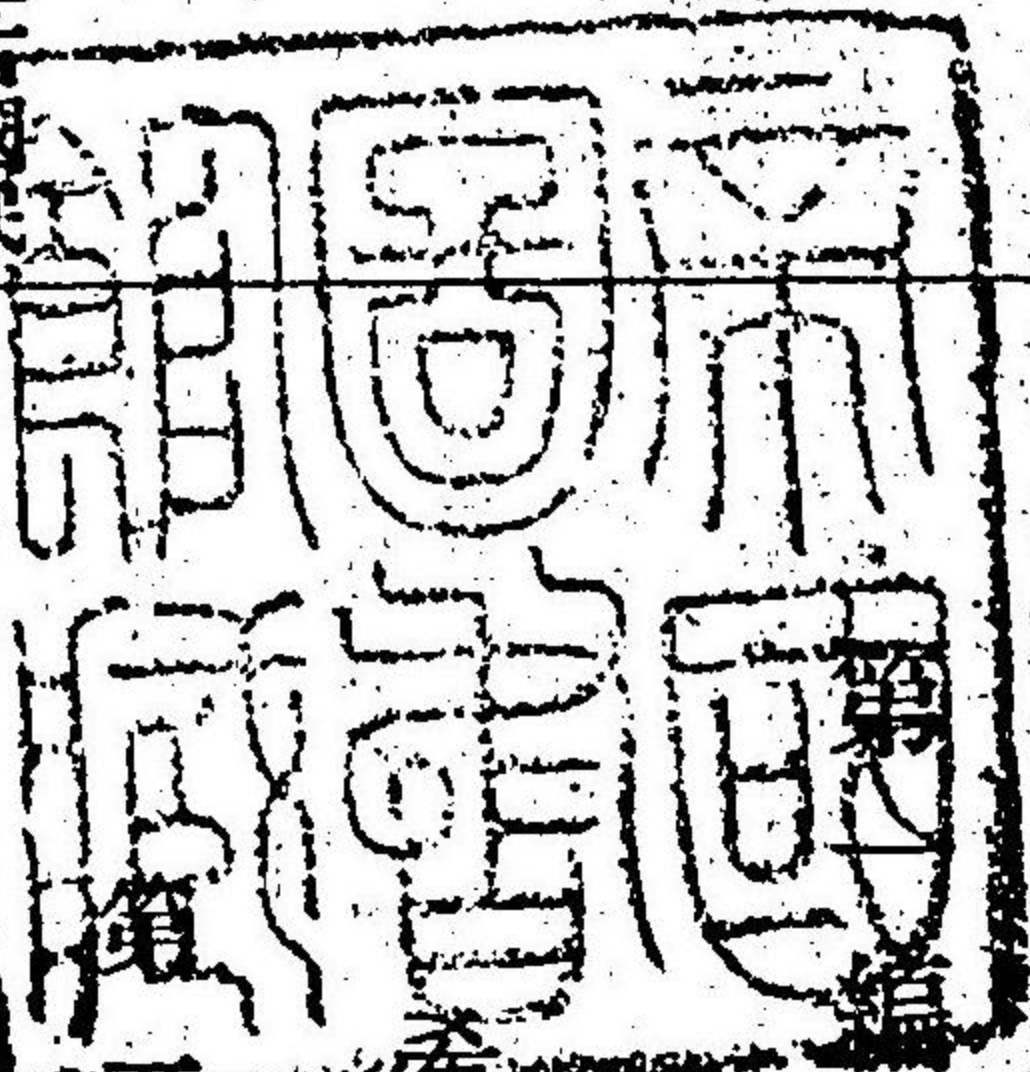
西洋史

文學士 吉國藤吉 編著

上古史太古より紀元四七六年
に至る

希臘羅馬の二國民社會を左右せし時代

第一章 上古の國民と其地理



上古國民
發達の理
由

歴史草創の時に當て東洋の支那印度地方及び西洋の埃及
メソポタミア地方に人文夙に發達す、是れ蓋し此等の地方
mesopotamia
に存せる天然の狀況の致せる所にして温暖なる氣候は自
ら土地の膏腴を來し耕さずして穰々たる産物を生じ、加之

上古の主なる國

上古諸國の状況

川流國內を貫通して交易運輸の便を與へ、朦昧ある人民をして漸次文化の域に向ふに適せしめたり、故を以て太古此等の地方に國を成せる者數十に下らずと雖も西洋史上に關する主なる者を舉ぐれば北部亞弗利加の埃及、西南亞細亞のアルメニア、メソポタミア、バビロニア、アスシリア、シリア、Armenia Mesopotamia Babylonia Assyria Syriaア、フェニシア、パレスタイン、メデア、波斯等なりとす、而して稍々後れて發達したるを希臘及伊太利民族なりとす、埃及にはナイルの大河ありて自ら國內を上下の二部に區分せり、此國素と荒漠たる砂地に過ぎざれどもナイル河が年々一定の時期に氾濫して土地を豊饒ならしむるを以て夙に民族の繁殖を來せり、西南亞細亞地方にはテグリス及
Euphrates Tigrisびユーフラタスの二大流波斯灣に注ぎ、西に地中海東に裏

上古國民の生活思想

海ありて山水の便共に備はり幾多の國民を土着せしめたり、希臘、羅馬の二國は内地に山岳、多く三方海に面して交通に適せるを以て他國民の移住を促し、諸州競争の結果、著しき文化の發達を見るに至れり、
Greece Rome此等の地方に國を成したる上古國民の主なる者は埃及人、バビロニア人、アスシリア人、フェニシア人、ヘブルー人、波斯人、
Hebrew等なり、此等國民の生活は事理の常として其初め狩獵を業としたりしが灌漑の便を知るに及びて漸次に農業の發達あるに至れり、又其思想の如きも概ね粗大にして自然力に司配せられ、從て宗教の如きも日月及び天然物の崇拜を普通ありとす、只埃及人が靈魂不滅を信じ又ヘブルー人が一神教を信したるは稍々進歩したる者と謂ふべし、

第二章 埃及並に西南亞細亞諸國民の盛衰

埃及

埃及は最古開明の國に於て人民概して平和を愛し自國を尙ふの餘り久しく外國との交通を爲さざりき紀元前三千餘年既に歴然たる王朝の存せるありて世々メムフスに都せり紀元前二一〇〇年の頃亞細亞地方の遊牧人種ヒクソスなる者襲來して埃及を征略し之を領すること五百年に及びたりしが偶々南方シーブスの人民起りて叛し遂にヒクソスを國外に追放して新王朝を創設したり爾來明君位を繼ぎ力を四方の經略に用ひしかば領土の擴張都府の壯觀頗る見るに足るものあり然れども紀元前六世紀に及びて國勢頓に衰頹し終に外敵の滅ぼす所となりぬ

ア
フ
ヒ
ニ
シ

是より先き西南亞細亞地方に起れる國民の變遷ありフヒニア人は地中海沿岸に住せるを以て太初より航海の術に長し山野の良材は自ら造船の業を發達せしめたり故を以て商工業は殆ど此國民の專有する所にして沿岸幾多の市港は爲に富裕を極め殊にシドン、チラスの兩港夙に其名高し然れども國內小邦に分れて全國の統一無かりしが紀元前一〇〇〇年の頃チラス王ヒラム大志を懷きて全國を風靡し隣邦ヒパル國王ソロモンと好を通して紅海を越へて印度交通の路を開きたり印度の豐饒なる物産は益々フヒニア國を富ませり王は加之機に乗して地中海上到處の沿岸諸島に殖民地を創設し一時海上の全權を握り亞弗利加北岸の有名なるカーセーシ市は實に其一なり然れど

も後に本國衰へて殖民地の隆盛を來し加ふるに鄰邦の國民勃興するに及び終に滅ぶ、

ア
バビロニ

隣邦に起れるはバビロニア及びアスシリア國民なり、バビロニア人は農工を以て國を建てバビロン府に都し諸國と交易して頗る隆盛を極めたりしに紀元前一五〇〇年の頃

Babylon

ヒブルー

其北部殖民地なるアスシリアが漸次獨立して一大帝國を創設するに至りて隣邦と共に滅ぶ、當時ユーフラテース河の西パレスタイン地方にはヒブルー人(一名イスラエル人)住し國王

Israel

ダヴ^ダ及びソロモン等の治績に因て國勢大に張りゼルサ

David

Solomon

Jerusalem

レムの都府壯觀を呈したり、然れどもソロモン殂して國內

イスラエル及び猶太の二王國に分離し互に干戈を交ゆるに至りし以來國勢大に疲弊し遂に兩國共にアスシリアの

Israel

Judaea

滅ぼす所とありぬ、

ア
アスシリ

アスシリア人は素と争鬪を業とせる蠻民なりしが獨立して後勢ひ一變し、紀元前十三世紀にバビロン府を陥れ、ニホ

Nineveh

グエを首府として大に鄰邦の攻略に力を注ぎ紀元前八世

Tiglath-Pileser

紀の中葉チグラスピレザ^二二世の時にバビロニアを始め

シリア、パレスタイン、フェニシア等を占領し尋て埃及をも征

新バビロ
ニア

し、當時アスシリアの勢四隣に轟けり、然るに幾何も無くしてバビロン府知事ナボポラスサ^一叛を謀り紀元前六〇六年ニホヅエ府を撃ちて終にアスシリア帝國を滅ぼし宏大

Nabopolassar

なる領土は新バビロニア帝國の有に歸せり、爾來バビロン

城は舊觀に復しネブカドネザ^一王の時に國勢頂點に達し

Nebuchadnezzar

たれども王の死後忽ち衰へ遂に外邦の侵す所となりて滅

亡せり、

第三章 波斯國と上古國民の文化

メディア

裏海の南方イラン高原にメディア及び波斯の二國起れり、紀元前八世紀の頃アスシリアの勢盛なりし時に當ては兩國共に其羈絆を受けたりしが幾何も無くメディア國民叛し、
フオルテス王の時獨立して國家の統一を完ふし、波斯を服
し其子シアキサレスの世にアスシリアを滅ぼし一時メディアの勢大に振ひしに紀元前六世紀の中葉波斯の勃興するに至りて忽ち衰頽せり、

波斯

波斯建國の主をサイラスとす王メディアを略しバビロニアを服して王國の基礎を固ふせり其子カムビセスの代に埃

希臘殖民地と波斯

及を殉へ、ダリアス一世の時に軍道を開き運河を通し全王國を二十州に區劃し各州に知事(サトラップ)を置きて之を統御せしめ、王自ら全國を總攬したり、當時西方には既に希臘國發達して小亞細亞沿岸に殖民地を設けたりしにサイラス王の時此殖民地を波斯に併したり、然るにダリアス王の代に希臘殖民地に叛乱起り、此に東方の波斯王國と西方の希臘國と始めて交渉の端緒を開けり、

埃及の文化

波斯の勃興と共に往時の埃及並に西南亞細亞諸國は悉く其配下に屬し波斯は一大帝國に變したり、此等上古の國民は文化著しく發達したる者にして治國の綱領より交通貿易農工等に至るまで頗る進歩し世界の文明に貢獻する所尠からず埃及人が階級の制を設けて貴賤尊卑の別を嚴に

し以て社會の安寧を維持したるは政治思想の進歩せるを
 示し、今日に遺れる金字塔ピラミッド（王の墳墓を）方尖碑、螺旋堂、獅身女
 面像の如き千古の壯觀を一瞥せば埃及國民の工藝技術の
 如何に宏壯巨大なりしかを知るに足る、殊に象形文字ヒエログリフを發
 明して石に刻み或は紙パピルスに書き、屍体防腐の術を知り、又太陽
 曆を發見して年時を算するの法を傳へたるは世界文化の
 上に著しき影響を及ぼせり、

フェニシ
アの文化

フェニシア人は航海に長するの故を以て交通貿易の發達を
 促し地中海沿岸より遠く印度、ブリテンに達して各地の産
 物を運搬し自國の發明製造に成れる硝子、布類、金屬細工業
 の染料等と共に上古國民の間に販賣せり、又音韻文字を發
 明して今日歐米言語の根源を作れり、此他バビロニアには

バビロニ
アの文化

夙に度量衡の制備はり楔形文字を使用し瓦の製造、水道の
 術等大に發達せり以て知る今日世界文化の淵源多くは上
 古の當時に存せることを、

第四章 希臘國民の勃興

希臘の地
勢

希臘は國內山岳多く地勢自ら三部に區分せらるゝと雖も
 沿岸は屈曲甚しくして良港灣に富めり、從て内地に於ては
 夥多の小國民互に割據せるの傾きあるに反して沿海の住
 民は夙に航海に熟し隣邦との交通を營み、各地に殖民し、文
 化の發達に頗る便益を有したり、希臘國民は自ら、ヘレンス
 と唱へ素と亞細亞地方より移住し來り土着人を排斥して
 全國に繁殖したるものなるべく其主なる種族をドリアン、
 Dorian

國民

希臘政体の種類

及びアイオニアンの二派なりとす、南部希臘(一名ペロポネネス)の
Ionian ラニア州スパルタ府はドリアン種族の本據にして中部
Laconia Sparta 希臘のアッナカ州アゼン府はアイオニアン種族の中心たり、
Attica Athens 國內割據の住民は其初め各獨立の王を戴き漸次進歩して
 貴族政治に移り更に共和の組織に傾けるもあり又時に潜
主主と稱して勇者一時國權を弄するもあり然れども言語風
Tyrant 俗宗教等の一致せるありて全國民は他國に對して團結す
 るの情甚だ強し希臘人は人性を具備する諸神宇宙に存在
 せる者と爲しオリムプス山に住する十二神を以て特に尊
Olympus しとなす又深く神託を信じデルフイに於けるアポロ神の
Delphi Apollo 託宣特に有名あり此神秘を保護せんが爲めにアムフクナ
Amphictyony オニと稱する宗教會議起り各州の委員年々デルフイの神

希臘人の宗教

希臘の太古

殿に會合するの例を作り、五年毎にオリムプス神の大祭を
 執行し盛大なる競技を催ふすを常とせり、孰れも皆全國民
 の集合を促すを以て割據の國民を結合するには與て力あ
 りあるものなり、(紀元前七七六年をオリムプス祭の始とし之を希臘正史の初年とす)
 希臘の創世は茫として知るべからず、雖も察するに太初
 より埃及並に西南亞細亞地方の先進國と交通したるや疑
 ひ無し、又ヘラクレス及びセシアスの二大英雄を以て希
Heracles Theseus 臘固有の文化を創立せし者と爲し、アルゴ―艦の遠征、若く
Troy Argonautis はトロイ戦争の如き偉業の口碑に傳はれるを見れば希臘
 國民が太初の當時王の下に外敵を退け以て國本を確定す
 るに至りしこと察するに足るべし然れども希臘正史の起
 源は實にスパルタ及びアゼン二府の發達ありとす、

スパルタの發達

スパルタは素に北部に住したるドリアン種族がペロポネサス州に南下して創建したる都府にして舊來の土民は悉く其征服する所となり或は商工農に變じて兵役の義務を負ひ或は全く奴隸に貶せらるゝありと雖も其數は遙かにスパルタ府民に勝れり故を以てスパルタには夙にライカルガスの制定せりと唱へる憲法ありて一は治國の綱領を示し一は多數の被征服者を鎮制するの策として國民教育を嚴にせり即ち上に二人の王ありて政教軍事の大權を掌握すこ雖も下に元老院及び市民の公會ありて國家の大事を議し王の罪を彈劾するを得るの權を有せり國民の教育は身体の訓練に重きを置き男子の生るゝや前途の健全なるや否やを檢し羸弱なるは山間に棄てゝ顧みず健全な

ライカルガス憲法 政府の組織

國民教育

アゼンの發達

るは七歳より父母の膝下を離れて國府に於て教育し始めは全く体育の修練を旨とし後は兵士としく公共の生活を爲さしめ結婚若くは財産の如きは政府總て之を監督し務めて剛勇不羈の性を養はしめたり此憲法の結果スパルタは勇武を以て四隣を驚かし遂に南部希臘の強國となれり、

之に反してアゼンは初め王を戴きたりしがドリアン人南下の影響を受けたる以來共和政に改め統領(Archon)を撰きて國政を委ねたり後に統領の數を増して九人となせしも皆私利を貪りて庶民を虐け特に其一人なるドラコ(Dracon)が峻嚴なる法典を制して人民を苦めしかば國民大に憤り遂に之を廢して當時賢明の聞へあるソロンを擧げて國政の改

ソロンの改革

ピシスト
ラタス

クリスセ
キス

革を委任したり、ソロン職に登りて力を民事に注ぎ、民權の自由を主張し、更に憲法を改正し、人民の等級を明かにして、負ふ所の義務に輕重あらしめ、又國民をして法律の發布、統領の選舉に干涉し得るの權を有せしむるに至れり、ソロン功成りてアゼンを去るや、貴族平民の軋轢甚しく、遂に平民党勝を制し、首領ピシストラタス國權を握り、ソロンの憲法を擁護して、開明進歩の方針を執り、大にアゼンの隆盛を來せり、然るに其子ヒッピアス職を襲きて、政嚴に過ぎしかば、遂に貴族の逐ふ所となれり、此に於てクリスセホス立ちて、社會大改革を勵行し、全然共和の策を執り、全國を十區に分ち、各區より五十人の代議員を出して、公會を組織し、以て國事を決し、又秘密投票の法(オストラシズムと稱す) Ostracism を設けて、非違を國外

波斯侵襲
を企てた
る由來

に追放し、以て社會の安寧を保持したり、爾來アゼン民族は進取の氣象に富み、其發達頗る著しく、中央希臘皆其威風を仰ぐの有様となれり、

第五章 希臘國威の發揮

希臘國が内に漸く發達するの時に當て、測らずも外に向て國威を宣揚するの現象起れり、即ち波斯との交戦是なり、曩に小亞細亞沿岸の希臘殖民地が波斯に併せらるゝや、殖民地の住民は毫も波斯の政に服せず、紀元前五〇〇年機に乗して、叛したれば、本國アゼンの人民進んで之を援けたり、波斯王は直に兵を發して之を鎮定し、更に復讐を名として希臘侵襲を企てたり、

マラソンの戦

ゼルキセス自テ希臘に向ふ

紀元前四九二年波斯王大流士はマルドニアス將軍を遣はし海陸兩道より希臘を攻む、事大に敗る、王再び大軍を整へ紀元前四九〇年アゼン府の北東マラソンの野に上陸せしめたれどもアゼンの勇將ミルチアデスの爲めに全軍悉く敗る、王之を聞きて大に怒り更に大軍を集めて自ら希臘を侵撃せんとし中途にして崩せしかば其子ゼルキセス父の志を繼ぎ二百万の大軍を率ゐてヘレスポントの海峡より直に希臘に向ひたり、是より先きアゼンの名士セミストクルスは國防の必要を認め衆議を排して海軍を擴張したり、今や波斯軍は雲霞の勢を以て北方より攻め入らんとするに當り希臘諸州はデルファイに會議を凝らし遂にスパルタは陸兵を以て國險を守り、アゼンは海軍を以て敵を防ぐ

セルモピリーの戦

サラミスの戦

ここに一決したり、此に於てスパルタ王レオニダスは直に精兵三百を率ひてセルモピリーの難關を守りたれども敵兵間道より進み來るに際して衆寡敵せずレオニダスは士卒と共に枕を列ぬて國難に殉せり、國防の術此に盡きしかばセミストクルスは今や一舉にして敵を破るに加かざるを知りアゼンの老幼婦女を南方ペロポネサスに送り、血氣の士卒を船中に集めサラミス灣に據る、波斯王勝に乗じて戦艦を以て直に之を侵撃せしめたるに測らずも大敗し、王惶惶爲すに所無く、忽ち本軍を率ひて陸路波斯に歸れり、時に紀元前四八〇年なり、波斯の軍將マルドニアスは退軍の途中にて翌年戦没し、スパルタの將パウサニアス及びアゼシの將アリスチデスの指揮せる追撃兵は波斯の殘兵を

プラテアの戦

プラテアの野に撃ちて大に之を破り、又海軍はミカレ岬に
Plataea Mycale
波斯艦隊を剿滅し、波斯の大計畫は此に全く水泡に歸し去
れり、

戦後の希臘

アゼンの方針

ペリクルス時代の状況

戦後希臘は國威大に張り、波斯軍の爲めに一たび灰燼に歸
したるアゼン府は城廓宮殿再び成りて壯觀舊に倍し、且つ
軍港を増設したるは益々アゼンの海軍力を増し、加之新進
の氣象に富める民政は時勢に適してアゼンの勢は自らス
バルタを壓するに至りぬ、特にアゼンが沿岸諸州を糾合し
てデロス島に同盟を結び、隠然海上權を專にするの策に出
てたるは深くスバルタの恨を招けり、此時に當てアゼンの
名門にペリクルスあり、非凡の英才を懷きてアゼン府民の
先導者となり、文武の政に參與し、力を民政に盡せること前

後三十餘年の久しきに及べり、(紀元前四六四—四二九)此時代にアゼ
ン府は只に政事軍備に於て希臘の牛耳を握るのみにあら
ずして實に文學技術工藝貿易の中心たり、千古の偉觀と稱
せらるる希臘古代の文化多くは此時代に發するを以て見
ればアゼン當時の隆盛察するに餘ありと謂ふべし、

第六章 希臘の内訌と隣邦

アゼン、スバルタ不和の原因

アゼンの隆盛日に昇り希臘全國を睥睨するの傾きあるを
見、スバルタ府は大に快からず、アゼン、スバルタの間自ら内
に相對峙するの勢を呈せり、偶々コリンズ州が其殖民地な
るコルシラ嶋Corcyraと紛紜を生せるに當り、アゼンはコルシラに
與し、スバルタはコリンズを援け、此に公然兩者の間に敵意

ペロポ
ネサス戦
争

アゼン城
内の疫病
ペリクル
スを斃す

シシリイ
遠征

を表するに至り、其結果遂にペロポネサス戦争となりて希臘國勢の衰頹を以て終りぬ、
戦の起るやスパルタは直にアゼンを攻めて之を圍む、アゼンは堅牢なる城壁と盛大なる海軍を揃へし艦隊を派遣してペロポネサス沿岸を襲はしめ、陸兵悉く籠城せり、然るに城内に疫病起りペリクルスを始め幾多の將士之が爲めに斃るゝの秋に際してスパルタ軍の侵撃愈々急なりしかばアゼンは遂に止む無く五十年間の休戦を約したり、然るにアゼンの策士アルシビアデスは譽を一身に集めんを欲し、アゼン府民を煽動して休戦の約を破り、遠くシシリイ遠征を企てスパルタの殖民地なるシラクサスを撃つ、事成らずしてアゼン艦隊はエーゴスポタミの戦にスパルタの將

Aegospotami

Syracuse

Sicily

アゼン降
て希臘の
覇權スパ
ルタに移
る

波斯再び
小亞細亞
を併す

波期
の策
畧

ライサンダーの破る所となり、同時にアゼン城の重圍遂に陥り、アゼンは降て和を講じ全府舉てスパルタの左右する所となれり、時運一轉處を異にし希臘の覇權はアゼンを去てスパルタの掌中に歸するに至りぬ、
希臘の内訌に乗じて東方の波斯は再び小亞細亞を略し、王大リアス二世は次子サイラスをして之が太守たらしむ、然るに王没してサイラスは兄アルタゼルキセスと位を争ひ兵を募りて事を擧げたるに果さずして死す、此に於てナスサフェルネス小亞細亞の太守となり、曾てサイラスに屬したるアイオニア人の都府を併せんとす、アイオニア人乃ち救をスパルタに請ふ、スパルタ王アゲシラウス兵を以て小亞細亞を攻め大に波斯軍を破る、然るに波斯は希臘のシーア

Lysander

希臘の内訌に乗じて東方の波斯は再び小亞細亞を略し、王

ダリアス二世は次子

Cyrus

るに王没してサイラスは兄アルタゼルキセスと位を争ひ

Artaxerxes

兵を募りて事を擧げたるに果さずして死す、此に於てナス

サフェルネス小亞細亞の太守となり、曾てサイラスに屬した

Lissaphernes

るアイオニア人の都府を併せんとす、アイオニア人乃ち救

Ionia

をスパルタに請ふ、スパルタ王アゲシラウス兵を以て小亞

Agessilaus

細亞を攻め大に波斯軍を破る、然るに波斯は希臘のシーア

Thibes

スバルタ
遂に敗れ
て波斯に
護る

シープス
州勃興し
て遂に希
臘の覇握
を握る

ペロピダ
ス

エパミノ
ンダス

ス、コリンズ、アルゴスの三州がスバルタの聲威を嫉むを察し、アゼンと共に三州を誘ふてスバルタに抗せしむ、爾來スバルタ軍は四面敵を受けて屢々敗れ、終に紀元前三八七年アンタルシダスに和議を結び小亞細亞殖民地とサイプラス嶋を波斯に割譲したり、又希臘諸州の獨立を認め、スバルタの覇權此に全く地に墜ちたり、

當時北部の一州シープスは漸く勢を高め偶々スバルタの

軍將フビダスがシープスの貴族黨と與してカドミア城を

陥れたるの事よりスバルタと戰端を開き、共和黨の名士ペ

ロピダス兵を以てスバルタ人をカドミア城外に退けたり、

スバルタ王は再び兵を擧げてシープスを攻めたるに愛國の志士エパミノンダスの爲めに紀元前三七一年リュエーク

トラの野に敗れ、シープスは一躍して希臘の覇權を掌握せり、然るにペロピダス前にセスサリイに戰没し尋てペロポ
ンネサス征服の時エパミノンダスもマンチニアの戰に斃
れしかばシープスは國家の二柱石を失ひて國勢頓に消沈
し、遂に隣邦マセドニア王國の侵す所となれり、

第七章 マセドニア王國の顛末

マセドニ
ア王國の
勃興
フヒリッ
プ王の事
業

ペロポネサス戰爭以來希臘の諸州が互に猜忌の念に富
むに至りしは自ら希臘の衰頹を招き、氣風を素たし、遂に北
方のマセドニア國をして其隙を伺ふの機を得せしめたり、
マセドニアは希臘の壇外に位し、人民は希臘人と蠻族との
混淆にあて從來爲す所無かりしがフヒリッパ王位に登るに

至りて形勢一變せり、フリップスの未だ王位に登らざるヤシ
 ーブスに遊び、多年業をエバミノンダスに受け大に得ル所
 あり、王となるや自らフランクウスPhalanxと稱する軍隊を組織し、近
 方の蠻族ヲ征して領土を廣め、偶々希臘のフォーシス人Phocisシ
 ブスの羈絆を脱せんと欲し、デルファイに於けるアポロ神の
 殿堂を掠奪して紛擾を起すに際し、此に希臘の内政に干渉
 するの端を開けり、

フリップスはフォーシス人を討するを名として直に神聖軍を
 興して希臘に侵入す、時にアゼンの名士デモスセネスDemosthenesあり
 夙にフリップスの大志あるを察し、熱血滔々雄辨を奮つて諸
 州を遊説し、アゼン及びシーブスの同盟軍を募りてフリップ
 プに抗したり、然るに紀元前三三八年ケロニアの大戦に同
 戦Chaeronea

フリップス
 プ遂に希
 臘の覇權
 を握る

フリップス
 プ大將帥
 となり波
 斯遠征を
 企て果さ
 すして卒
 す

アレキサンダーの
 遠征

盟軍敗績し、希臘は遂にフリップスの左右する所となれり、フ
 リップ即ち希臘の民心を得んが爲めに南方コリントCorinthに列
 國會議を開きて希臘諸州の自治制を許し、自ら希臘の大將
 帥と號し、此機に乗じて波斯遠征を企てんことを令したり、
 不幸にして中途に弒せられ、其子アレキサンダーAlexander立て職を
 繼ぎ列國に推されて將帥となれり、

紀元前三三四年アレキサンダー大軍を率ゐて波斯遠征に
 向ふ、當時波斯は國勢衰運に傾き亦昔時の餘威無し、此歳グ
 ラニカスの一戦に波斯の大軍を破りて小亞細亞を服し、直
 ちに波斯の中心を衝かんことす、波斯王大リアス三世之をイヌ
 サスIssusに防く、王大に敗れ波斯の命運將さけ危し、アレキサン
 ダー軍を南に轉じ、シリア及びフェニシア地方を略し、埃及に
 進Syria Phoenicia

アレキサンダー印
度に至る

アレキサンダーの
治國策

進んでアレキサンダーリア府を創設し、更に東方チグリス河
 畔に向ひ紀元前三三一年アルベラの大戦にダリアスの軍
 を殲し遂に波斯全國を滅亡したり、アレキサンダー即ち首
 府バビロン城に入りて暫らく兵を憩ひ、此に東方の極端に
 達せんこの志を起し、新たに兵を組織して紀元前三二七年
 印度に向ひ、途に嶮岳激流を跋渉して遙かにインダス河畔
 に達したり、此時士卒の勇氣既に沮喪し更に不毛の地に進
 むを欲せず遂にアレキサンダーに迫りて海路波斯に歸り、
 アレキサンダーも止むなく殘兵を率ゐて陸路バビロン府
 に着したり、
 アレキサンダー此に於て遠征の素志を翻して國內平和の
 策を講じ、バビロン府を以て東西兩洋に跨かる大帝國の首

東西兩國
民の融合

アレキサンダー病
死す
大帝死後
の状況

府と爲し、國道を開き、水利を設け、堤防を築き、沼澤を埋め、着
 々國益を増進するに共に力を東西兩國民の融化に注ぎ、親
 ら波斯王の女を娶りて皇后と爲し、盛に希臘の文化を東方
 に輸入し、以て一統の政を施さんことを務めたり、之を以て
 希臘の言語風俗は一時全帝國內に普く行はれ、又東西の士
 卒を混入し附與するに同權を以てせしかば兩國民の混化
 大に進めり、然るに天此人に年を借さず紀元前三二三年ア
 レキサンダーは春秋を重ねる僅かに三十二にして終にバ
 ビロン城に病死したり、短年月の間此の如きの偉業を企
 て、永遠の大業中途にして滅ぶと雖も後世アレキサンダー
 を大帝と稱するは蓋し其名に愧ちずと謂ふべし、
 アレキサンダー殂するや其子幼にして業を繼ぐに足らず、

アレキサンダー大帝の分

之を以て希臘のアセン先づ叛を謀りたれども忽ち鎮定せられたり、然れども帝國の各地を領せるアレキサンダーの將士は幾何も無くして紛擾を來し、殘忍なる戦争となり、爲めにアレキサンダーの一族悉く害せられたり、紀元前三〇一年イプサスの戦に因りて紛紜一決し廣大なるマセドニア帝國は左の如くに分立せり、

シリア帝國

(一)シリア帝國、セリユトカス家を領し、主に故マセド

ニア帝國の亞細亞領より成り、セリユトシア及びアンチ

オトキアの二都府あり、然れども此帝國も漸次に瓦解し、

Antiochia Parthia Antiochus III.

細亞を羅馬に譲り、帝國の疆域後にはシリア一國に止まるに至り遂に羅馬の屬領となる。

埃及

(二)埃及、

トレミイ家の領にしてアレキサンドリ

アを首府とし、世界商業の中心となり、希臘文學の叢淵となり、後同じく羅馬に屬するに至る。

マセドニア及び希臘

(三)マセドニア及び希臘、永年の戦争を経てアンチゴナ

ス家マセドニア王國を領するに至り、希臘は臨時の施政なりしが、マセドニア王國と共に、羅馬に併せらる。

第八章 希臘の文化

希臘の文化發達の因由

上古の希臘が其名千古に朽ちざる所以の者は啻に史上夙開の國たるを以ての故に非ずして實に此地に發達したる工藝美術並に文物が絶妙を極めて他に其類を見ざるを以ての故なり、蓋し希臘の風光其宜しきを得、國民の生活簡に

建築及彫刻

して自ら智能的に發達するの餘裕ありしこ、各地互に競争心に富みしとの致す所なり、希臘人の手に成れる工藝美術は精巧眞に迫り、其思想の現れたる文學は深遠蘊奥を極め、後世人をして賞歎措く能はざらしむ。

工藝技術の絶妙に達せるを建築及び彫刻なりとす、而して其最も隆盛を極めたるはアゼンに於けるペリクルスの時代なりとす、固より従前絶妙を極めたる者にして建築には太古よりドリアン風Ionian、ドリアン風の二様ありしが後にマセドニア王朝の時にコリンシオン風起れり、三者共に圓柱を用る其上下の端に於ける裝飾に差違あるのみ、ペリクルス時代の建築を代表せるはアゼンのアクロポリス城Acropolisにしてプロピリアの城門及び左右に並立せるエレクセイ

アム、バルセノンの両神殿は實に千古の美觀なりと云ふ、又殿内神像の彫刻はフヂアスの手に成り其精巧古今に冠たり、

ホーマー
文學は太古既に詩聖ホーマー出て、イリアッド及びオヂスセイの二大名篇を後世に傳ふ、然れども其最も隆盛を極めたるはペリクルスの代に在りて哲學、史學、美文の三者特に著し、哲學は初め小亞細亞に起りソクラテスに至りて眞正

史學
の二大哲學者相前後して出て遂に希臘哲學を完ふし、今日科學の淵源となれり、史家には史祖ヘロドトスを始めズ

美文
一シゲデス、ゼノフオン等の名家あり、又美文は叙事詩、叙情詩の二者夙に發達し、アゼン全盛の頃には戯曲其妙に達し、エ

アンキサ
ンドリア
に於ける
科學の發
達

アスキラス、ソフクルス、ユーリピデス、アリストトフネス等の
Aeschylus Sophocles Euripides Aristophanes
名士輩出したり、又文學旺盛の餘り辯説の術頗る發達し、演
戯も大に行はる、後ちマセドニア時代に至りて埃及のアレ
キサンドリア府に科學大に起り特に文典、數學は著しく發
達せり、數學の名士として其名後世に轟ろけるユークリッド
及びアルキメデスの二人は實に此時に出てたるなり、
Archimedes Euclid

第九章 伊太利民族の發達

伊太利の
諸種族と
其地理

希臘衰へて伊太利民族之に代りて歐州社會を統御するに
至れり、伊太利は地勢自ら上中下の三部に分れ、太古より夥
多の民族割據せり、北部一圓にはエトラスカン種族住した
りしが紀元前五世紀の頃北方よりケルト種族のゴウル人
Etruscan Celt Gaul

羅馬府の
起源

羅馬王政
の組織

侵入してポー河畔一面を占領し、エトラスカン族は爲めに
其南方エトルリア地方に追はれたり、中部には伊太利民族
Etruria
繁殖し、其主なるをラチン、及びサビニ種とし、南部並にシン
Iatin Sabini Sicily
リイ島には希臘の殖民多く住せり、ラチン、サビニの兩種族
がエトラスカン族と混淆してタイバー河畔に居を定めた
Tiber
る者は即ち後に伊太利半嶋の大都會たる羅馬府の起源
Rome
あり、伊太利民族の初め此の如く微々たる者なりと雖も一
變して大帝國を創設し、法政の純然たる發達を遂げ、後世の
模範たるに足る者尠からず、
伊太利民族は自尊の念強く羅馬貴族(パトリシアン)と稱し
Patrician
て王を撰舉し之に終身政權を附與し、王は三百人より成れ
る元老院を組織し以て國事を議するの顧問たらしめたり、

タリアス
王の改革

貴族は兵役に従事し、征服せられたる外人は悉く之を平民
(プレベヤン)と稱し、毫も政府の職に就くを得ざらしむ、然る
に多年星霜を経るに従ひ平民の數著しく増加して貴族を
壓倒するの勢に至りしかば紀元前五七〇年の頃の王セ
ルヴァス、タリアスは平民を慰撫して國安を保つ必要な
るを察し、憲法を改正し、貴族平民を均しく階級に分ち、兵員
會を設けて貴族平民共に兵事を議するの制を立てたり、然
れども王の後を繼ぎて暴主君臨せしかば國民此に王を廢
して共和政となし、大權を二人の執政官に委ぬるの制に變
したり、

貴族平民
の對抗

此政變に際して貴族は再び全權を握りて平民の境遇舊に
復せんことす、此に於て平民は公然貴族に對抗し、紀元前五世

ゴウル人
の侵入

紀以來羅馬と隣邦との戰端屢々起るに乗じて平民は貴族
に逼りて其特權の伸張を計り、遂に護民官を設け、平民議會
を組織するの權を得、又政府の要職に容喙するの道を開け
り、偶々紀元前四世紀の初め佛國の邊りに住したるゴウル
人南進して上伊太利を侵し、更に中部伊太利に入り、遂に羅
馬府を襲ひて之を占領したり、羅馬府民如何ともする能は
ず漸く重幣を以てゴウル人を去らしむるを得たり、爾來羅
馬府民は内に相鬩くの不利なるを感じ、護民官リシニアス
の時貴族平民共に同權なるを一定したるより兩者永年の
軋轢此に氷解し、國內始めて安堵の思を爲すに至れり、

リシニア
スの改革
貴族平民
の争全く
止む

第十章 羅馬國勢の發展

サムナイ
ト戦争

國內の紛擾一たび輟みて國民の一致團結成るや羅馬の勢
 頓に國外に發展するに至れり、羅馬人は爾來外戦に従事す
 ること五十餘年、遂に中部伊太利を平け、南部伊太利を併し、
 羅馬の一都府變じて全伊太利の大都と化するに至る、蓋し
 當時羅馬の東方にはサムナイトの蠻族あり、南方には希臘
 の殖民ありて共に羅馬の強敵たり、紀元前三四三年羅馬は
 サムナイト種族と戦端を關き、前後三回の決戦を経て遂に
 全種族を服し、中部伊太利の地を悉く平定したり、時に南方
 希臘殖民地の本據たるタレントム府に於て羅馬の船舶府
 民の難に遭ふ、羅馬即ち其罪を鳴らし兵を發して之を責む、
 タレントム救を本國のエピラスに請ふ、エピラス王ピラス
 直に伊太利に出陣して羅馬軍を討す、希臘の精兵並に象軍

希臘殖民
地との戦
争

希臘殖民
地滅ぶ

ビューニッ
ク戦争の
原因

の勢頗る猖獗にして羅馬軍屢々敗績したりしが紀元前二
 七五年ベネヴェンタムの大戦に羅馬軍大に勝ちてピラス王
 本國に逃れ歸れり、此に於てか希臘殖民地全く羅馬の滅ほ
 す所となり、伊太利半島殆ど平定したり、
 當時シシリイ島は希臘の殖民地なるシラクユースと亞弗利
 加のカーセーシとの間に分立し、兩者久しく島内に争へり、
 カーセーシは古來フェニシアの殖民地にして航海貿易の中
 心となり頗る熾んなりに反し、シラクユースは漸次本國と
 共に衰頹するの色あり、偶々シシリイ島にマメルタンと稱
 する海賊の寇するありて羅馬は海賊を援け此にカーセー
 シと交戦の端緒を開けり、世に之をビューニック戦争と稱し、百
 餘年の久しきに亘れり、

第一ピニク戦争
カーセー
ジ敗れて
和を講ず

紀元前二六四年、一ピニク戦争起る、羅馬は海軍の遙かにカーセーに劣る所あるを以て急に戦艦を造り、將士を遣はしてカーセーの海軍と交戦すること數回、紀元前二四一年エガチアン群島の海戦に於てカーセー軍大に敗れて和議を結び、羅馬は償金と共にシシリ島を占領したり、此損耗を償はんが爲めにカーセーの軍將ハミルカル、バルカスは遠く西班牙を征して遂に之を服したり、ハミルカル殂して其子ハンニバル職を継ぎ、大軍を率ゐて羅馬遠征を國中に令す、第二ピニク戦争此に始まる、紀元前二一八年ハンニバルは六万の兵を指揮して西班牙を發し、南方ゴウルの地を過ぎてアルプス山を踰へ、直に伊太利に進入す、沿道の市民皆震慄してハンニバルに降り、羅馬の諸將悉

第二ピニク戦争

ハンニバル冬陣を構へ形勢一變す
ハンニバル、ノラに敗る

ハンニバル本國に召還せらる

く北伊太利に敗る、紀元前二一六年カンノーの大戦は殆ど羅馬軍を鑿にし、羅馬の命運旦夕に逼る、府民今や老幼を問はず劍を肩にして國事に殉せんとするの秋に際しハンニバルが急に羅馬府を襲はずしてカプアに冬陣を構へ暫らく兵を憩ひしの一事は大に彼我の形勢を一變し、ファビウス、グラッパス、マーセラス等羅馬の諸將は三軍を整へてハンニバルを襲撃して大に之をノラの野に破れり、ハンニバルは勢屈し本國より後援の到らんことを望むこと切なりした、偶々羅馬の勇將Cornelius Scipioハシドバルの軍を破りて伊太利への連絡を杜絶し、伊太利に凱旋して直に亞弗利加大陸に軍を向け、カーセーを圍む、此に於てハンニバル遂に素志を伊太

利に果たさずして本國に召還せられ、紀元前二〇二年ザマの戦にハンニバル大に敗れて和を講じ、約するに亞弗利加 Nama 以外の領地を全軍艦並に莫大の償金を羅馬に讓るを以てし、又羅馬の許可無くば軍を動す無きを誓ひ、漸く局を結びたり、カーセーシの形勢此に至て全く消沈せり、

羅馬が着々西方の大權を握るに當て東方マセドニア國王 Philip III フリッパ三世大に跋扈を極む、此に於て羅馬の勇將 Familius ニナスはフリッパを攻めて之をシノスセフルーに破り、マセドニアの勢を挫く、偶々シリヤ王アンチオカス三世は曩 Cynosephale Antiochus III にザマの戦に敗走したるハンニバルを容れて大に爲す所

あらんとす、羅馬の將 Scipio シピオ (ハンニバルを破るの弟) 討ちて之を平け、尋てマセドニア王 Persesus パーセアス (三世の子) 再び兵を擧ぐるに

第三回

カーセーシ戦争

際し、遂に羅馬の滅ほす所とある、此時希臘も同じく羅馬の屬領と化しぬ、

紀元前一四九年カーセーシは和議に背きて羅馬の同盟國なるヌミディア Numidia と干戈を交ゆ、羅馬乃ち兵を出して其罪を責め、カーセーシ城を羅馬に明け渡さんことを求む、カーセーシ市民大に之を憤り必死となりて羅馬軍に抗す、之を第三

回 Carthage カーセーシ戦争とす、然れども紀元前一四六年カーセーシは遂に征服せられ城廓悉く破壊せられて羅馬の屬領に編入せらる、此に至りて羅馬は歐州の三大半島を始め遠く亞弗利加に其威を振ひ、國勢の發展此に極まれりと謂ふべし、

第十一章、羅馬内訌の發端

羅馬府民の腐敗

グラッカ
を弑せらる
ヌミヂア
との交戦

羅馬が海外征服を完ふして國勢を伸張するや内既に紛擾の兆あり、蓋し希臘の如き文明國の征服は自ら其文化を羅馬に輸入し、幾多の文人技術家陸續として羅馬に來り以て文化を誘導し、加ふるに諸處の屬領より納むる貢物は著しく羅馬の富源を増加し自ら府民をして奢侈に流れしめたり、故を以て羅馬の顯官若くは屬領の太守は富力を兼有するに反して小民の状態日に非なり、昔時の貴族平民は今や一變して貧富の懸隔とはなれり、此に於て時の護民官ナベリウス、グラッカス及び其弟カイアス、グラッカスは土地制度を發布して大に小民の境遇を高めんことを謀りしに惜ひ哉、貴族の憎む所となり兩人相前後して弑せらる、此時に當て羅馬はヌミヂア國と戦端を開き、貧民黨の領袖

マリウス、
ストラの兩
雄互に功
を奏して
相競ふ

ミスリダ
テスの役

マリウス及び貴族黨の首領ストラの二名將出て、ヌミヂアを滅ぼす、是より先き獨乙種族北方より南下して伊太利に侵入せし時執政官マリウス撃ちて之をアクエ・セキスナエに破り威名甚た高し、偶々此機に際して羅馬府外の人民羅馬の公民權を得んことを迫りて叛す、ストラ即ち酷虐なる策を用ゐて漸く之を鎮定したり、斯く兩黨の首領各其功を奏するの曉には互に相競ふの傾きを呈するは自然の勢にして遂に之が爲めに羅馬の内乱を惹起すに至れり、其端緒は實にミスリダテスの役なりとす、ミスリダテスは東方ポニクス國王にして羅馬の多事なるに乗じて東方に於ける羅馬の勢を殺かんことを欲し兵を出して小亞細亞を占領し進んで希臘に入り勢頗る猖獗なり、此に於て羅馬の元老院は

マリウス、
スラ兩人
の争

時の執政官スラを征討總督に任したるに貧民黨大に激昂して元老院に迫り、終にスラの任命を没収してマリウスに委ねしむ、スラ即ち軍を率ゐて羅馬に入り、マリウスを討ちて之を亞弗利加に追ひ、直に東方ポシタスに向ひ大にミスリダテスを破る、此隙に乗じてマリウスは執政官シンナに誘はれて羅馬に歸りスラ黨を殘遇す、然れども幾何も無くしてマリウス没し、シンナ其後を繼きたれどもスラが東征を完ふして羅馬に凱旋するに當てシンナは直に逃れ、スラ羅馬の全權を握りてマリウスの殘黨を戮せり其酷虐を極めたる古來稀なりしと云ふ、スラ國政を弄する久しからずして紀元前七八年遂に没す、

羅馬の慘
狀

第十二章 シーザルと羅馬共和政の末路

ポムペイ
の業

スラの軍將にポムペイあり非凡の勇才を懷き出て、亞弗利加にマリウスの殘黨を平け、西班牙に渡りて同じく貧民黨サトリアスの軍を破り、當時武器格闘を以て娛樂せせる奴隸の一團隊相結びて一揆を企てたるを剿滅し、地中海を横行せる海賊を鎮定し、更に東方ポシタス國の叛を討ちて悉く之を略し、進んでシリア、パレスティン地方を殉へ、之が爲めに西南亞細亞の領土多くは羅馬領に化せり、此時羅馬にスラの舊將カチリンなる者ありて非違を謀らんこせしに執政官シセロの看破する所となりて果さず、却て貧民黨の領袖ジュリアス、シーザルの威名漸く熾ならんこするの

カチリン
叛を謀り
て果さず

Julius Caesar

Cicero

Catiline

シーザル
起る

勢あり、

第一三頭
同盟

シーザル
のゴウル
鎮定と其
治蹟

シーザルは紀元前百年貴族の門に生る、然れども故マリアスの姻戚たる故を以て貧民黨に入り、久しく職を西班牙に奉し漸次民心を収攬したり、紀元前六〇年羅馬の柱石たらんとの大志を懷き、當時威望赫々たるポムペイ及び富豪クラサスの兩人と結托して第一三頭同盟を組織し、シーザルは執政官に撰はれしも人民の輿望を容れて任滿つるの後ゴウルの太守たらんことを約し、紀元前五八年羅馬の國政をポムペイ、クラサスの兩人に委ね、自らゴウル地方に出陣したり、當時ゴウル地方には夥多の蠻族住し性嫖婢にして容易に服せず、シーザル不世出の勇略を奮て之が鎮定に従事すること數年、其間遠くブリテン島をも征し、終に能

Britain

くゴウル地方を平定し英邁果斷の才を用ゐて之を統御すること前後九年に及び、彼がゴウルの蠻民に羅馬の文化を注入すると共に北邊の國防を嚴にし歐洲中部の蠻地に羅馬文化の根本を創設したるは其偉蹟實に千古に朽ちざる者と謂ふべし、

シーザル
羅馬に歸
り遂に大
權を掌握
す

シーザルの威名北方に轟くを見、ポムペイは私に之を嫉み遂に元老院に迫りてシーザルの職を免せしむ、シーザル大に憤り直に大軍を率ゐて羅馬に歸る、ポムペイ恐れて元老院議員を伴ひ希臘に逃る、此に於てか伊太利の全土忽ちシーザルの掌中に歸せり、シーザル即ち西班牙のポムペイ黨を平けて更にポムペイを希臘に追撃し遂に之をフローサラスの野に破る、ポムペイ逃れて埃及に走り、埃及王の爲め

Pharsalus

羅馬始めて
靜謐に
歸す
シーザル
王國を建
てんとし
て終に弑
せらる

に弑せらる、シーザル依て埃及に上陸して遂に之を滅ぼす、
廣大なる羅馬の版圖始めて此に靜謐に歸しぬ、

シーザルは夙に王政の必要を察し自らイムペレーター(皇帝)

の稱して政教文武の大權を掌握し、以て完全なる王國の

組織を設けんとせしに不幸にして共和國民の怨を招き、紀

元前四四年ブルータス及びカスシアス等の爲めに元老院

に弑せらる、然れどもシーザルが眞に國家を思ふの深かり

しとは彼の死後大に國民の感ずる所となりしかばシーザ

ルの甥なるオクタヴアスと武臣アントニー及びレピダス

の三人は此氣運を利用して第二三頭同盟を結び以て國內

の統御を謀れり、三人此に於てブルータス及びカスシアス

の兩人をフィリッピーに破り、後ち互に羅馬領の分轄を始めた

第二三頭
同盟

Philippi

オクタ
ヴアス
とアント
ニー雄を
争ふ

りしが幾何も無くしてレピダスはオクタヴアスに降り、ア

ントニー獨り埃及に據りてオクタヴアスに對抗せり、偶々

アントニー羅馬の國憲に背きて領土を埃及の女王クレオ

パトラに割譲せしかばオクタヴアス之を名こして埃及を

征し、紀元前三一年アクチアムの海戦にアントニー大敗し

て自刎じ埃及は遂にオクタヴアスの左右する所となりぬ、

今やオクタヴアスは全國の主權を一身に集め、他に雌雄を

争ふの勇者出でざるに乗じ、故シーザルの素志を繼ぎて帝

政を創設したり、羅馬の政体此に至て一變せり、

第十三章 羅馬帝政時代の狀況

オクタヴアスは紀元前三一年東西兩洋に跨かる羅馬大帝

オクタ
ヴアス
の方針

帝政を創
設す、

全權を握
りて遂に

オクタ
ヴアス

帝國の基礎成る
羅馬文化の發達

國の君王となり、元老院をしてオーガスタス(尊稱)の尊號を上らしめ、政教の大權を總攬し、宣戰媾和の大任を司り、元老院、民會等をして一に皇帝の鼻息を伺はしむ、万民自ら其德を頌し、海内亦寂として、劔戟の聲を聞かず、帝聰明睿智にして在位四十三年帝國の憲法を制定して治民國防の策を講じたれば、羅馬大帝國の基礎全くオーガスタスの一代に成りぬ、
帝亦深く文化の増進を獎勵せしかば、希臘より傳はりて漸次發達の域に向ひたる羅馬の文化は此に一時に勃興して、羅馬文化の精華を來し、國內夥多の人種概ね帝の施政に安んじ、甘んじて其文化に浸染したるを以て海内到處政治文化の統一を見ざる無きに至れり、故を以て聖代の餘德自

基督の降誕

羅馬帝國と境外の蠻族

ら文學美術の發達を促かし、Vergil、Horace、Ovid等の詩人、Livy、Tacitus等の史家皆此時に出で、羅馬文學を後世に代表し、又寺院、戲場、大會堂、宮殿等の建築一として善美を盡さざるは莫し、此盛大なる時に當て、Jesus Christ地方に耶蘇基督の降誕ありて、宗教社會に一新時期を與へたり、

羅馬大帝國の隆盛夫れ此の如し、雖も國境外には當時幾多の蠻族は漸く勃興して四方に割據せり、特に歐州中部の獨乙種族は其勢頗る勇猛なり、Orologusは此等の蠻族を征服するの策を執らずして境上に其侵入を防ぐの方針を執れり、然るに帝の庶子Drusus、Teutoburgを一時其領土を略せしことありしも、忽ち叛し、

ルグの決戦に因りて全く羅馬の覇絆を脱したり、爾來羅馬は防禦の位置に立ち獨乙種族は益々跋扈を極む、此の如く羅馬帝國は其壯觀を極むると同時に外患の頗る大なる者あるを忘る可らず、

第十四章 歴代の諸帝と耶蘇教の興隆

オーガス
タス以後
國勢日に
沮喪す
耶蘇教の
起源

紀元一四年オーガス殂してより三世紀の末葉に至るまで夥多の帝王羅馬を領したり、其間王朝幾度も變遷して宮廷穩かならず、爲めに國勢は日に漸く沮喪せり、此時代に耶蘇教起りて漸次其基礎を固くせり、
耶蘇教は初めパレスタインに起る、當時パレスタインは羅馬に屬し古來一神教を奉したる猶太人は羅馬の苛政に沈

Jews

耶蘇教興
隆の原因

淪するの餘り神使の下降して猶太王國を復興するの機あるべしこの妄想を懐けるに際し、基督出て之を利用し、遂に宗教を説き始めたり、然れども其初め微々として振はず、加ふるに歴代の羅馬諸帝耶蘇教を虐待すること甚しく、偶々一身を神に捧げる高僧等の盡力に因りて漸く諸方に行はれんとするも忽ち政府の虐遇に遭ひて一頓挫を來せること多し然れども畢竟耶蘇教の有せる世界的の精神が羅馬の如き一大帝國の統一に適したること、其高僧信者の忍耐力は遂に此宗旨の興隆を來すに至りたる原動力なりとす、

十二徒弟
の盡力

基督に十二人の徒弟あり、基督が政府の罪する所となりて磔刑に處せらるゝや、徒弟は身命を賭して教理を保護し、各

耶蘇教會の組織

地に遊説して大に盡す所ありき、特にセント、パウルはシリ
アのアンチオキアを本據として異教者の改宗に力を注
き、ピーターはパレスマインの猶太人に教義を傳ふるを務
めたり、耶蘇教が世界的の傾向を有するに至りたるはパウ
ルの力多きに居るなり、斯くて設けられたる耶蘇教寺院の
組織は極めて簡にして全教會の總領をアポストル使徒と稱し
て宗務を總轄し、又各地の教會に長老なるものあり、後にア
ンチオキア、アレキサンドリア、羅馬の三長老は最も勢力を
得るに至り、特に羅馬は全耶蘇教の本據たるの有様を呈す
るに至りぬ、

デオクレ
シアン帝
の改革

紀元三世紀の末デオクレシアン帝位に登りて政府の組織
を一變して専制君主政治と爲し、帝國內を四區に分ち各區

Dioecelian

コンスタ
ンチン大
帝立ちて
都を遷す

耶蘇教國
教となる

ニケーア
の宗教大
會

に王を置き帝親ら全國を總攬し、羅馬古來の異教を復興し
て大に耶蘇教を虐待したり、然れども帝の位を去るや國內
忽ち乱れて帝位を争ふ者六人の多きに及びたりしが紀元
三一四年コンスタンチン遂に勝を制して帝權を掌握する
に至れり、コンスタンチンは後に大帝と稱し、君主專制政治
を勵行してデオクレシアンの遺業ヲ大成し、都をビザンチ
アム故希臘王のコンスタンチノブルに遷る、耶蘇教を國教
と定めたるは帝の治世中著しき現象なりとす、紀元三二五
年ニケーアに始めて宗教大會を開き、當時基督の一身に就
て起りし異説を一決し、基督即ち神なりとの決議を爲した
り、爾來耶蘇教は其根據を固め、終に歐州の一大勢力となる
に至れり、

Constantine

Constantinople

Nicaea

Byzantium

第十五章 羅馬帝國の分立と西羅馬帝國の滅亡

セオドシ
アス帝耶
蘇教の法
王制を定
む、

コンスタンチン帝歿して三子互に帝國を分轄したりしが忽ち又統一に歸し、^{Julian}ジュリアン帝の時異教を復興せんと謀りしに當時既に耶蘇教の隆盛を動すこと能はざりき、紀元四世紀の末^{Valens}ワレンス帝の代に北方獨乙種族の大移動起り、羅馬領に侵入し來れる^{Goth}ゴス種族を酷遇せしかば^{Adrianople}アドリアノブルに討ちて之を弑せり、^{Theodosius}セオドシアス帝立ちて全國を一統し、異教を嚴禁して悉く耶蘇教に歸依せしめたり、此に於てか長老の職權大に張り、羅馬、アレキサンドリア、^{Antiochia}アンチオキアの三大長老は^{Rome}ローマ、^{Alexan-}アレキサンドリア、^{Constantinople}コンスタンチノ

東西羅馬
帝國の分
立

ブル及び^{Jerusalem}ゼルサレムArchbishopの二長老と共に五大法教師長と稱せられ、羅馬府の師長を特に^{Pope}法王と號して最上の法職を帯はしむるの制を定めたり、^{Seodis}セオドシアス帝の死後紀元三九五年全帝國を二分して二子に分轄せしめたり、長子^{Arcadius}アルカヂアスは東部を領し、次子^{Honorius}ホノリアスは西部を保ち、茲に東西羅馬帝國は永く分立するの基を開きぬ、兩帝國は其初め極めて親密の關係を保ちし、雖も漸次に相反目するの傾きを生じたり、爾來西羅馬帝國には明君賢主出て、國政を振興する者無く、分立以後國勢日に衰ふ、是より先き羅馬の領内には既に蠻族侵入して帝國の邊境に鞏固ある根據を設け、羅馬の國力弱きに乘して頻りに之を襲へり、彼等は素と矇昧なる蠻族なりしも

西羅馬の
國勢大に
衰ふ

諸蠻族
馬を侵す
西羅馬帝
國の滅亡

羅馬人に接するの餘り自ら其文化に浸染し、後には羅馬の
 雇兵となりて兵馬の權を握れり、東方のゴス、北方のアレマ
 ン、フランク、南方亞弗利加のワシタル等の種族は共に西羅
 馬の國勢に著しき影響を及ぼせり、
 西羅馬が伊太利以外の領土を蠻族の有に歸せしめ、朝廷紛
 擾を極むるの時に當てワシタル族は海軍を以てシシリイ、
 サルヂニア、ユルシカ等の諸島を占領し、終に羅馬府に闖入
 して掠奪に及ぶる莫し、爾來帝王は獨乙種族雇兵の左右す
 る所となり、終に紀元四七六年其軍將オドアサー羅馬の幼
 帝ロムルス、オーガスチヌスを廢して自ら伊太利の王權を
 握れり、西羅馬帝國此に於て滅ぶ、

第貳篇 中世史 (紀元四一七六年に至る)

獨乙種族、社會の中心點たる時代

第一章 獨乙種族の大移動と諸王國の形成

中世の初
めに於け
る獨乙種
族

紀元四世紀の末より歐州中部の獨乙種族は諸方割據の勢
 漸く成り、南魯及び黑海の邊りにはゴス種族國を成して東
 西に分れ、北海の濱にはフリシアン族あり、ライン下流にサ
 クソン族あり、中部獨乙にチーリンゲン族あり、ライン上
 流の地にアレンマン族あり、ライン中流附近にフランク及び
 ブルガンゲン族あり、此等の種族が其繁殖に伴ふて新領
 地を得るの必要起るに當て中央亞細亞の匈奴族歐州に侵
 入して東ゴス族の領地を襲ひしかば此に種族の大移動を

匈奴の酋
長アチラ
諸方を侵
す

惹起せり、此に於て東ゴス種族は西ゴス種族の地を奪ひ、西
 ゴスは終に羅馬領に侵入したり、匈奴の酋長アチラはダニ
 ーブ河畔の地を殉へ進んでゴウルを襲ひたるにゴス種族
 の爲めにシヤロン附近に敗れ、尋てアチラはアルプス山を
 踰へて伊太利を侵したれども羅馬人の諭す所となりてダ
 ニーブ河畔に退陣したり、アチラ殂して匈奴の領土は忽ち
 Danube
 瓦解し、東ゴス族は再び舊に復するを得たり、
 是より先き西ゴス王アラリックは伊太利に侵入したりしが
 西羅馬の攝政スナリコの破る所となりて退く、然るにスナ
 リコ死してアラリック再び現はれて羅馬府を襲ひ、之を荒ら
 せり、アラリック殂してアサアルフ其後を繼ぎ西羅馬帝の妹
 Athaulf
 を娶りてゴウルを領し、西班牙をも併して此に西ゴス王國

西ゴス王
國

東ゴス王
國

を建設したり、尋て東ゴス王セオドリックは伊太利を侵して
 Theodoric
 オドアサーを攻めて之を殺し、ラヴェンナを首府として東ゴ
 Odacer
 ス王國を建てたり、セオドリック王聰明にして外交の策に長
 し大に羅馬の文化を獎勵せしかば東ゴス王國は忽ち隆盛
 に赴きたり、

フランク
王國

又北方に於てフランク族は五世紀の中葉より漸次近隣を
 Frank
 略し、メロヴンギアン家のクローヴス此種族を統一して王國
 Merovingian
 を創設し、紀元四八六年ソアソンの戦に羅馬の太守サイア
 Soissons
 グリアスを破りてゴウル地方を占領シ、アレマニ族を撃ち
 Gaill
 て之を退け、フランク王國の勢頗る強大なり、此頃北海の沿
 Alemanni
 岸に住したるアングルス及びサクソンの二種族は海を踰
 Angles
 へてブリテン嶋に渡り、ケルト種のブリトン族を撃ちて之
 Britain
 Celt
 Britons

ブリテン
王國

ワンダ
ル王國
チュ
ーリン
ヂ
アン
王國
ロム
バル
ド
王國

を退け東岸一圓の地を占領して之を七州に分てり、紀元八二七年ウェセックス州の太守エグバート七州を統一し、全種族をアングル、サクソンと稱し、此にブリテン王國の基を開けり、此他亞弗利加にはヴァンダル王國成り、中部獨乙にはテューリシアン王國、東方獨乙にはロムバード王國起れり、此等の諸王國は皆獨乙種族大移動の結果にして實に中古史を形成するに至れる發端の狀況なりとす、

第二章 東羅馬帝國と獨乙種族

コン
スタ
ンチ
ン
大
帝
以
後
東
羅
馬
の
狀
況

東羅馬帝國は又ビザンチン帝國と稱し、コンスタンチン大帝以來久しく無事にして獨乙種族大移住の時に匈奴、ゴス等の侵入を國外に防きたりと雖も内部は黨争甚たしく爲

ジヤ
スチ
ニ
ア
ン
帝
波
斯
と
の
交
戦

めに風俗の頽廢を來し國力日に衰ふるの傾きありしが六世紀の中葉に賢明の聞へ高きジヤスチニアン帝即位するに及びて國勢を挽回したり、帝文武の才を兼有し、當時東方波斯國が新王朝ササニド家の配下に國勢熾んなるに當て帝は其將ベリサリアスを遣はして波斯と兵を交ゆること數回、全く之を征服するに至らざりしも之に對する防備を完成し、尋てベリサリアスを亞弗利加に派してヴァンダル王國を討し、紀元五三四年終に之を滅ほし、ベリサリアスは勝に乗じて伊太利の東ゴス王國に侵入して羅馬府を陥れ、進んで首府ラヴェンナを降して東ゴス王を虜にす、偶々ベリサリアス本國に召還せられ、ゴス種族は新たに王を立てたれども再び東羅馬の將ナルセスの破る所となりて終に其

東
ゴ
ス
王
國
は
知
る
東
羅
馬
に
滅

屬領となり、西班牙の南部又帝國の有に歸し東羅馬大に振ふ、

ジヤスチニアン帝の偉績

ジヤスチニアン帝は莫大の資を投じて首府を始め帝國の邊境に城壁を築き、又廣大壯麗なるセント、ソフピアの寺院を

St. Sophia

コンスタンチノブルに建立し大に帝都の壯觀を高め、印度支那との交通行はるゝに乗じて僧侶を支那に遣はし、以て

養蠶の術を歐州に傳へたる等偉績尠からず、帝特に意を法令に注ぎ當時の法律家を集めて古代羅馬以來の律令を蒐

成 法令の大

輯し、インスナチューツ、パンデクツ、コード、の三部に整理して

Institutes

Pandects

Code

之を大成し、後世民法の淵源を創始したるは其功千古に輝く者と謂ふべし、

然れどもジヤスチニアン帝歿して宮廷再び亂れ、恰も此機

東羅馬の國勢大に衰ふ

羅馬、獨乙兩種族の混化

に際して北方のアワール及びロムバルダの兩種族は漸く跋扈して東羅馬領に侵入し、ロムバルダは進んで北部伊太利を占領して此に儼然たる王國を建て、又西班牙は西ゴスの復する所となりて東羅馬の國力頓に衰へたり、獨乙種族は羅馬人と接するに至りても其初め相混化すること難かりしが年次を経るに従て自ら両者の雜婚を來し、加ふるに獨乙種族は羅馬の文明に慣れてジヤスチニアン法典をも採用するに至り、後に此雜種族は史上に著しき影響を及ぼせり、

第三章 サラセン人の勃興

Saracen

紀元六世紀の頃波斯の威風を受けたる亞刺比亞にサラセ

Arabia

サラセン
國の起原

モハメツ
ドの勃興

回々教遂
に其基を
完ふす

ン國起れり、其建國の祖をモハメツドMohammedと爲す、亞刺比亞は地勢
 荒漠にして人民頗る嫖婢なり、宗教は多神教にして偶像を
 崇拜す、モハメツドは紀元五七〇年メツカMeccaに生れ、シリアSyria、パレ
 スタイン等を巡遊して夙に猶太教及び耶蘇教を究め大に
 得る所あり、亞刺比亞に歸りて自ら神使なりと高言して説
 く、イスラム教Islam（回々教）を以てしたり、メツカの政府之を肯
 んせず、紀元六二二年モハメツドをメヂナMedinaに追ふ、此歳をイス
 ラム教の紀元とす、然れども其説く所亞刺比亞人の性情に
 適したるを以て忽ち衆望を得、モハメツドは其信者を率ゐて
 メツカ府を襲ひて之を陥れ、偶像教を打破して亞刺比亞人
 の統一を謀り、此にサラセン王國の基を完ふしたり、イスラ
 ム教の起原此に存し、其教義をコーランCoranと唱へ信者を總て

カリフ歴
代四方の
攻略に従
ふ

西南亞細
亞並に埃
及其よカ
リフの有
に歸す

モスレムMoslemと稱す、
 モハメツドは政教の大權を掌握し、死後カリフCaliph（繼嗣者）をして
 之を襲かしむ、カリフは即ち王公となりて國民を統治する
 と共に回々教の長官となり、且つ軍事上の大權をも左右せ
 り、故を以て歴代のカリフは争鬪に渴せる亞刺比亞人を指
 揮して四方の攻略に従事し、被征服者にしてイスラム教を
 奉するか若くは朝貢を肯んするに非らずんば悉く之を劔
 に掛くるの方針を執り、先づ波斯を征し、第二代カリフOmar、オー
 マルの時に東羅馬の領地なるシリア、パレスタインを滅ぼ
 してゼルサレムJerusalem、アンテオキアAntiochia等の舊都を悉く占領したり、
 尋て埃及も其有に歸し、オムミヤドOmmiad家カリフの全權を握る
 に至りて亞弗利加の遠征を完ふし、紀元七一七年時のカリ

サラセン人
歐洲に侵入し
西班牙を占領す

サラセン人
フランス國王に破らる

フ、ソリーリマンは海陸兩軍を率ゐてコンスタンチノブルを圍みたれども城堅くして終に果さずして止む。

是より先き西班牙の西ゴス王國は漸く衰運に傾きしかば此機に際してサラセン人はジブラルタルの海峽を越へて西班牙に入り、紀元七一年セレス、ヅラ、フロンテラの戦に西ゴスの軍を破り、爾來サラセン人は西班牙征略に従事する。こご八年に及びて遂に西ゴス王國を滅ぼして之を占領したり。此に於てサラセン人はピレニース山脉を踰へて東方遙かに歐洲中部に寇せんごしたりしが時のフランク國王ナヤールレス、マーテルの破る所となりて軍を退け、依然西班牙を保てり。

オムミアド家のカリフは都をダマスカス府に定めたりし

Osmiad

Damascus

コルドワのカリフ
獨立す
カリフ統治の全盛時代

カロロウ
フンシア
ン家の勃興

が八世紀の中葉にアバシッド家起りてオムミアド家を攻めしかばオムミアド家は逃れてユルドワに獨立し、アバシッド家全權を握りて都をバグダッドに奠む。爾來バグダッド府は東西交通の焦點となりて頗る隆盛を極めたり。特に八世紀の末ハルーン、アル、ラシッドの時代はカリフ統治の全盛時代に於て其朝廷の驕奢を極めたる古今其類稀なり。ラシッド又大に學藝を奨励せしかば亞刺比亞文學の精華多く此時に發達せりと云ふ。

Abassides

Cordova

Bagdad

Haroun-al-Raschid

第四章 フランク國王と耶蘇教

Frank

フランク王國のメロヴンシアン王朝漸く衰へて其重臣カロロウ、フンシアン家之に代りて大に王國の振興を來せり。是

Merovingian

Carolingian

第四章 フランク王國と耶蘇教

イコノク
ラストの
亂

東西兩教
の分立

フランク
王国勃興
の端緒

ビビン、
ロムバー
デー王国
を征す

より先き八世紀の初め東羅馬帝國に、イコノクラストの亂
あり、蓋し耶蘇教徒が畫像崇拜の弊に陥りしを以て東羅馬
帝相次きて之が禁止の令を發したるに基くなり、然るに西
羅馬の法王は此處置を肯んせずして遂に東羅馬と分離し
たり、後世の所謂希臘教Latinとラテン教一名カソとの分立實に
此時に胚胎す、當時羅馬の法王領は北方Catholicロムバーデー王国
の頻りに脅かす所となり防禦に苦シしかば時の法王ステ
ーファン三世は救をフランク王ピピンに請ふ、ピピン即ち其
請を容れ遂にフランク王国勃興の端緒を開けり、
ピピンは曩にサラセン人を破りたるチャールレス、マーテル
の子にして法王よりフランク皇帝の稱號を受け、紀元七五
四年アルプス山を踰へてロムバーデー王国を討して之を

チャール
ス王位に
登る

チャーレ
ス獨乙種
族の統一
を謀り大
帝國を創
立す

破り、ラヴェンナ附近の領地を奪ひて之を法王領に編入した
り、ピピン歿して長子チャールレス位を継ぎ、剛勇果斷文武に
長し遂にフランク王国の基礎を大成したり、
チャールレスは全獨乙種族を一大帝國の下に統一せんご欲
し、力を隣邦種族の攻略に盡し、前後數十戰遂にサクソン、デ
ーン、バワリアン、スラヴス、アワール等の豪族を平け、西班牙
Dane Bavarian Slavs Avar
に進んでサラセン人を討して其北部を略し、更に伊太利に
轉してロムバーデー王国を滅ほし、歐州西部の一圓悉く平
定したり、チャールレスは此大帝國の君主として傍ら耶蘇教
を保護せしかば法王との關係極めて親密にして紀元八〇
〇年法王レオ三世はチャールレスに奉るに羅馬皇帝の尊號
を以てせり、此に至てフランク王国の勢は恰も昔時の羅馬

帝國に於ける觀あり、

チャール
スの施政

チャールスは宏大なる帝國を夥多の州と邊境とに區劃し、各州に太守Graefを置きて政治を司らしめ、特に重きを邊境に置き、邊境太守を派して之を守らしめ、又王領にはパルスグラMarkgrafーフを置き、常に勅使を巡行せしめて各州施政の狀況を視察せしめ、帝親ら時々巡遊して監督を怠らず、又年に一回太守僧侶等を集めて大會を開き、以て全國の法律を議せしむ、帝深く學問を獎勵し、アイクスAixスの宮殿に碩學老儒を集めて親しく文學を講じたれば、帝國の文教大に張れり、又寺院を増建して耶蘇教の普及を謀り、傍ら農工商を勸誘せしを以て帝國の富強日に進歩の域に向ひぬ、後世稱してチャールス大帝と號する亦故無きにあらず、

フランク
王國の隆
盛

第五章 フランク王國の瓦解とノルマンの侵寇

Norman

チャール
ス帝死後
のフラン
ク王國

チャールス大帝歿して、季子ルイLouis王國を襲きたれども、統御の力無く、在位中王國をロタルLothar、ピピンPipin、ルイLouisの三子に分つ、偶々四子チャールスCharles生るゝに及びて、新たに領土分轄を始めしかば、長子ロタルLothar怒りて亂を起し、遂に捕はる、然るに次子ピピン天死せしを以て、長子の罪を赦し、再ひ三子に王國を分與したり、ルイ王の死後、三子互に權を争ひしが、紀元八四三年ヴェルダンVerdun條約に因りて、三子の領分一定したり、一、ロタルは帝號を繼ぎ、伊太利とローレン州Lorraineを得、二、ルイは東部フランク即ち獨乙地方を得、

フランク
王國三分
せらる

獨、佛二ヶ國の起原

其發達の差違

ノルマン人の起原

ノルマン人の跋扈

三、チャールレスは西部フランク即ち佛國地方を得、後にローレン州は獨乙に併せられ、此にアルプス山以北に獨、佛の二國相分立するを見るに至れり、爾來獨乙は純然たる一種族の團隊として固有の言語風俗を發達せしめ、佛國は羅馬獨乙兩種族の混淆として羅馬的文化を増進し、遂に此兩國は爾後再び相合すること無くして全く異なりたる國力の發達を成すに至れり、

是より先き歐洲の北岸にノルマン人種起れり、後にデンマ

ルク、ノルウェイ、スウェーデン等の王國を形成するに至りしと雖

も其初め極めて嫖奸なる種族にして航海に長し、到る處に

掠奪を事とし、フランク王國を侵して之が衰頽の原因とあ

り、遂にノルマンダイの地を奪ひて之を領せり、九世紀の末

Normandy

ノルマン英國を征服す

ノルマン氷嶋を發見し北米に到る

ノルマン

魯國王室の基を開く

英國に寇し、時の英王アルフレッド大に畏れ與ふるに東方の

土地を以てし、十一世紀の初めに至りて其酋長カヌート全

英國を征服して其王となり、尋てノルウェイ、スウェーデン、デンマ

ルク、三國の王を兼ね、其威勢頗る鋭く、當時ノルマンの跋扈

其極に達したり、ノルマンは啻に英國を征したるのみならず、

遠く北海を縦横馳驅してアイスランド島を發見し、更に

北米のグリーンランドに到着して十世紀の末此に殖民地

を設けたり、彼等は進んで北米大陸にも足跡を印したるや

推して知るべし、彼等は又東方魯西亞に侵入し、酋長ルーリッ

クは此に魯國王室の基を開きぬ、

佛國北部のノルマンダイの酋長は公爵の稱を唱へて漸く

隆盛となり、偶々英國に王位繼承の紛紜起るに當て紀元一

ノルマン
ダイ公ウ
井リアム
英國を征
して王朝
を開く

伊太利南
部に一王
國を設く

ノルマン
の末路

○六六年ノルマンダイ公ウリアムは英國を征して王位を奪ひ、數年を出てすして全英國を統一し、現今英國王朝の祖となり、英國をして歐洲大陸との關係益々密ならしめたり。又ノルマンダイの武士は十一世紀に伊太利南部を漂掠し、從來シシリイ島及び佛國南部に殖民したるサラセン人を破りて之を滅ほし、シシリイ島及びネーポリスを占領して此に一王國を建設したり、此の如くノルマンは諸方を跋渉し、諸處に王國を設け其偉蹟見るに足る者あり、雖も彼等は概ね被征服者の風俗習慣に浸染するの餘り遂に其固有の特性を失し、ノルマンの足跡は爲めに久しからずして世上に消失するに至りぬ。

第六章 神聖羅馬帝國と法王權の發達

獨乙のカ
ーロツ井
ンシアン
家

フランコ
ニア公コ
ンラッド
獨乙王位
に登る

獨乙に於けるカーロツンシアン王朝は分立以來治平を保ちたりしがルイの代に至り東にスラヴァニア種族の寇するあり、北方にはノルマンの侵入ありて久しく之を退くる能はず、アルヌルフの代に至りて漸くノルマンを破り、進んで伊太利をも服して其王となれり、其子ルイの時にハンガリーのマジヤール種族新たに獨乙を侵し一時國內を騒かしたり、ルイ歿してカーロツンシアン家滅絶し、當時既にフランコニア、サクソン、シュワビア、バワリア、ローレーンの五諸侯は獨乙國を左右するの勢あり、紀元九一一年フランチニア公コンラッド撰はれて獨乙王に登りし以來獨乙王位は永

オットー一世獨乙王とありて大に内治外交に力を用ゆ

く撰擧法に依りて決せらるゝの例を開きぬ、
コンラッド王位に登りしも事意の如くおらず死するに蒞み
遺言してサクソン公を王たらしむ、サクソン公ヘンリー一世
世立てサクソン王朝の祖となり、諸侯を統御して國力を養
ひ、國防を嚴にし、遂にマシヤール族を退けたり、其子オットー
一世撰はれて父の後を繼ぎ、治國の才に長し、務めて諸侯の
勢を制じ、Bavaria Franconiaの二公が叛せるに當て其
領地を没収し、之を王の一族に與へ、寺院を優遇して陰かに
宗教の大權を左右したり、王又外征に力を用ゐ、マシヤール
族を全く退けて永年の外患を除き、Bohemia Slavonian
族を撃ちて之を朝勤せしめ、Poland Denmark等又其
威風を仰くに至れり、王更に南下して伊太利に入り、當時伊

オットー神聖羅馬帝國を組織す

サクソン王朝絶へフランコニア王朝再ひ起る

コンラッド二世

太利の國內紊亂せるに乗じて難無く之を鎮定し、紀元九六
二年羅馬府に於て法王より伊太利の王冠を得たり、オットー
は獨乙伊太利の両王國を合一して名くるにHoly Roman Empire
の稱を以てしたり、蓋し政教相一致して大帝國を統御する
の意に出でたり、雖も其實獨乙王が両國の主權を掌握す
るに過ぎざるのこゝ

然れどもオットー一世の子孫相繼ぎて此茫漠たる觀念を懷
き、力を伊太利に注きたれども要するにオットー一世に次く
の武略無く、希臘殖民、サラセン人、ノルマン等相前後して伊
太利の南部を領せるを遂に平定すること能はずして止み、
尋てサクソン王朝絶へて再ひフランコニア王朝之に代れり、
フランコニア王コンラッド二世ブルガンヂアン王國を併し

Conrad II Burgundian

ヘンリー三世大に獨乙の國境を廣む

て國力の増長を圖り、其子ヘンリー三世勇略父に勝りて諸侯を悉く服従せしめ、法王の位を左右し、ハンガリー地方をも其威を仰くに至らしめしかば、獨乙帝國の疆域此時代に最も大あり、然るに王殂して其子ヘンリー四世幼にして位を継ぎ、母后其政を攝したれば、自ら僧侶の干涉する所となり、獨乙帝國に於ける宗教社會の威權漸く熾んなるの勢を呈したり、此時に際し法王グレゴリー七世出て、遂に法王權の伸張を完成したり、

Gregory VII

グレゴリー七世

グレゴリーは微賤より起りて法王の顧問となり、宗教社會の改革を促すに共に之を獨立せしめ、宗教界をして須らく俗界を主宰するに至らしむべしとの方針を執り、自ら法王の職に登るや、直ちに之が實行に着手したり、即ち從來の慣

ヘンリー四世と法王との軋轢

例たる寺領賣買を禁じ、僧侶の獨身制度を施行し、以て時の皇室をして法王の命に服せしめんことを圖れり、此に於てか法王と皇帝との軋轢を來し議論頗る紛々たりしが、紀元一〇七五年羅馬の宗教會議に於てグレゴリーはヘンリー四世の顧問官五人を破問したり、ヘンリー四世大に之を憤り、グレゴリーの職を褫ひしかば、グレゴリー即ち帝を破問し、之を國民に訴へたりしに、平生帝に對して快からざる獨乙諸侯は此機に乗じて法王に與し、アウグスブルグに大會を開き、帝を廢せんことを議決したり、此に於てヘンリー即ち罪を法王に謝し、漸く其破問を解かるゝや、慙愧の怒りに堪へず、ロムバードイ種族の援を借りて、再ひ法王の職を褫へり、然るに諸侯は此時新王を撰ひたりしに、帝之を意こせ

Augsburg

Lombardy

ずして再び伊太利に侵入し、グレゴリイを捕へて獄に下し、新たに法王を立てたり、紀元一〇八五年グレゴリイ遂に獄中に死す、ヘンリイ四世則ち獨乙に還りて王となり、其子へ
 ヘンリイ五世の時ウォルムスに宗教會議を開き僧正等の任命
 Henry V. Worms
 は法王之を行ひ王前に其任官の禮を擧ぐることを定めた
 王、ヘンリイ五世歿してサクソンのロタール王に撰はれ法
 王の請求する所悉く之を許容したり、此の如きを以て中世
 紀に於ける法王の權力は實に偉大の發達を爲すに至れり、
 Lothar

第七章 十字軍

法王權大に發達す
 王
 五世と法
 王
 ヘンリイ
 五世と法
 王

バグダッドに於けるサラセン國は一時隆盛を極めたれども
 Bagdad
 セルジューク、トルコ族起るに及びて漸く衰頽を來せり、紀
 Seljuk Turks

十字軍の
 原因

元十一世紀の頃セルジューク、トルコ族はアルメニアを略
 Seljuk Turks Armenia
 し酋長マレク・シヤーはシリア、パレスティン等を攻めて之
 Malek Shah
 を取り進んで埃及に至れり、後に此種族は小亞細亞を占領
 し其勢頗る強大なり、是より先き紀元四世紀の頃より耶蘇
 教徒はゼルサレムの聖場に巡禮するの慣習を生じ、コンス
 Jerusalem
 タンチン帝が此地に壯麗なる寺院を建設したる以來殊に
 Constantine
 甚しく法王權の發達に従て一層其隆盛を見るに至れり、從
 來巡禮者は耶蘇教國は更あり異教の國民よりも厚遇を受
 け來りしにセルジューク、トルコ族が一たび聖場を占領し
 てより巡禮者を遇する頗る酷なる者ありしかば巡禮者は
 之を同胞に訴へて大に悲憤の情を起さしめたり、
 耶蘇教諸國の公卿武士を始め下庶民に至るまでセルジュ

法王大に
諸國の民
心を振興
し遂に十
字軍を起
す

一ク、トルコの無道を憤慨するの情漸く熾なるに當て法王
アルバン二世はアミアンの僧ピーター、ゼ、ハーミットをして
Urban II. Amiens Peter the Hermit
伊太利、佛國等を巡遊して聖地救済の大策を勸告せしめ、一
〇九五年アルバン自らクラールモントに僧俗を集め熱誠
Clermont
を奮て沿々辯し盡し、聴く者をして感慨骨髓に徹せしめ、セ
ルジューク、トルコの遠征を賛せん者は須らく立て十字の
章を右肩に附すべしと歎せしかば數千の群集立るに十字
の章を取りて肩に掛け直に出陣せんことを誓へり、是れを
も中世紀の一大現象たる十字軍の發端なりとす、
紀元一〇九六年ローレーン公ゴッドフレイ及び各地の諸侯
Lorraine Godfrey
は第一回十字軍(一〇九六)を率ゐて諸道より進みてトルコ
族を討す、小亞細亞、シリア等に於ける戦闘難無く勝ちて一

第一回十
字軍

ゴッドフ
レイ聖地
の保護者
となる

第二回十
字軍

〇九九年遂にゼルサレムを攻めて之を陥れたり、從軍の諸
侯即ちゴッドフレイに勸めて聖地の王たらしむ、ゴッドフレイ
王號を辭し單に聖地の保護者と稱したり、翌年ゴッドフレイ
死して其弟バルドヴン職を襲き始めてゼルサレム王と稱
し、トルコ族に對して國防を嚴にしたり、而して此新王國の
保護を名こして義俠の氣象に富める所謂中世武士ある者
熾んに此時に起れり、
然るにセルジューク、トルコ復た起りて亞細亞に於ける耶
蘇教領を侵し、聖地附近爲めに危きに瀕せしかばセント、ベ
ルナルド僧正は人民を諭して第二回十字軍(一一四七)を起
さしめ、佛王ルイ七世、獨乙王コンラッド三世共に其指揮官た
り、當時トルコ族にヌールエディンあり勇敢剛毅にして攻略
Louis VII. Conrad III. Nouredin.

ゼルサレム再ヒトルコに歸す

を事とし、尋て英邁なるサラヂン其後を承けて隣邦を掠略せしかば十字軍大に敗れて志を果さず、一一八七年に至りてゼルサレム府再ヒトルコ族の手に歸したり、時に獨乙帝フレデリック一世は大志を懷きて中世武士の先導者となり神聖羅馬帝國の隆盛を圖らん欲して伊太利に遠征を試みたれども果さず、此に於て退きて法王と好を通し第三回十字軍(一一八九)を企てたり、佛王フリッパ二世、英王リチャード共に其舉を援く、フレデリック剛勇能く戦ひしも不幸中途に斃れ、英王リチャード三たびゼルサレムを圍みたれども遂に撃退せられ、トルコの酋長サラヂンと休戦を約して漸く本國に遷るを得たり、
Saladin
Frederick I
Philip II
Richard
Saladin
Innocent III

第三回十字軍

第四回十字軍

ラチン王國

絶し、法王領を中興し佛國の武士を説きて第四回十字軍(一二〇四)を起せり、然るに此軍は中途にして東羅馬皇帝の招きに應じてコンスタンチンブルに向ひ、後遂に皇帝と紛紜を生じてコンスタンチンブルを剽掠し、此にラチン王國を立て、本國に還りしが希臘人との紛争爾後絶へず、一二年ラチン王國は遂に滅ぼされて東羅馬帝國に屬しぬ、紀元一二二八年獨乙帝フレデリック二世第五回十字軍(一二二九)を起す、帝の勇才其効を奏して遂にゼルサレムを陥れ一時其王號を唱へたれども一二四四年又トルコの侵略する所となれり、此に於て佛王ルイ九世は病中を顧みず第六回十字軍(一二五八)を興して埃及を征しダミエタ府を占領したれども翌年大敗して全軍擧て虜となり、重幣を容れて

第五回十字軍

第六回十字軍

第七回十字軍

漸く國に還れり、然るに此一敗に懲りず一二七〇年ルイ九世は第七回十字軍を發しサユーニスに向ひたりしが不幸全軍悉く病死したり、

Tunis

十字軍の結果

爾來復た十字軍の舉無く畢竟ゼルサレムの聖地は遂に耶蘇教徒の手に入らずして止みぬ、然れども十字軍は中世紀の隆盛なる時期を來し歐州社會に尠からぬ影響を與へたり、トルコの異種族に對する念は自ら武士道の發達を促かし、東西の交通頻繁なりし爲めに貿易の勃興を生じ、之に伴ふて科學、美術等大に發達したり、特に寺院僧侶の跋扈、法王の權勢最も甚るきを極むるに至りたるは十字軍の著しき結果なりとす、

第八章 英佛の關係

十字軍時代に於ける英佛の狀況

十字軍時代に英、佛二國は互に特別の發達を爲せり、英國はノルマンディ公ウリアムが王となりしより子孫相承くる殆ど百年、漸次に民權自由の伸張を遂げ、佛國は當時カペリアン王朝之を領して諸侯の鎮壓に力を注ぎ機に乗じて英領ノルマンディの地を併せんこす、十二世紀の中葉アンジ

Normandy

William

Capetian

Anjou

英王ヘンリー二世

ユー家のヘンリー二世英王となりてプランタジネット王朝を創始するや血縁の關係に因りてノルマンディ以外の地

Henry II

Plantagenet

をも領し其勢威將さに佛國を併せんこす、然るに國內の諸侯並に僧正等が常に王に反抗せるの故を以て遂に果さざりき、ヘンリー二世の代にアイルランドは英國の征服する

Ireland

英國のアイルランド征服

所ごありぬ、

英王ジョ
ン無道に
して大に
民望を失
ふ

英國の大
憲法
ヘンリー
三世
英國國會
成る

ヘンリー二世の子リチャード十字軍に従ひ其弟ジョン位に
登るや時の佛王フィリップの爲めに佛國に於ける英領の殆
と全部を奪はれ遂に再ひ之を恢復すること能はざりき加
ふるにジョン無道にして上下の別無く臣民に重税を課した
れば大に民望を失し又法王インノセント三世と争ひ遂に
法王に屈服したり此時に當て諸侯並に僧正等はジョンの無
道を抑制せんを欲し一二一五年王に迫りて英國大憲法を
承認せしめ以て國民の生命財産を保護し主權を制限する
の根據とせり是れ現今英國憲法の淵源にして立憲政体の
基礎既に此時に成れりジョンの子ヘンリー三世其後を繼ぎ
て亦無道の君なりしかば諸侯僧正等は大憲法の實行を確
定し此時より國會は純然たる形ちを備ふるに至りぬ

佛王ルイ
九世
百年戦争

ジャン、
ダーク英
軍の圍を
解く

佛王ルイ九世賢明にむて國內の整頓に注目し諸侯を抑制
して王權擴張の策を執り歴代の諸王之を守りて以てワ
ア家のフィリップ六世に至れり時に英王エドワード三世は
其母佛王フィリップ四世の女に當れるの故を以て佛王の位
を得んことを要求せり然るに佛國民舉て之に對抗せしか
は此に英佛の葛藤を生じ所謂百年戦争ある者起れり一三
三七年戦の始まりしより兩國互に勝敗ありしが佛王リ
ーネス七世の時に至りて佛國は全然英軍の蹂躪する所と
なり一時國運累卵の危きに瀕したり此秋に際してオレ
アン市の女傑ジャンダークは率先して國民の士氣を振興し
遂にオレアン城の敵圍を解き佛王をライムスに迎へて王
旗を翻かへしたりジャンダークは爲めに敵に捕はれ焚殺

177

215

百年戦争の結果

の刑に處せられしと雖も爾來佛國は軍勢振興して屢々英軍を破り一四五三年英軍全く擊退せられて百年戦争此に終れり之に因りて英國は只カレイ城市を佛國領内に有するのことなり佛國は領土の恢復を爲せしに拘らず永年の兵燹は甚く朝野の疲弊を來し國內の荒漠實に悚然たる有様となりぬ

第九章 中世時代社會の狀況

封建制度の起原

中世時代に普く諸王國に行はれたるは封建制度にして素こフランク種族が被征服地を從軍の將士に分配せしより自然に發達したる現象なり其初め極めて簡單なる組織なりしに漸次に進歩して遂に君臣の關係となり諸侯臣庶の

騎士の發達

騎士の教育

連絡を生じ彼我相互の義務を負擔せり此封建制度の間に發生して中世時代を風靡したる者を騎士なりこす騎士は初め封建諸侯と臣民との中間に位せる馬上の兵士にして自然に一階級を組織したりしが後に宗教熱の勃興に伴ふて自ら其影響を受け一層隆盛の狀を呈するに至りぬ故を以て中世時代軍人の標準となれるは即ち所謂騎士にして平常城廓に居住し武事的訓練を施せり當時名門顯貴の子孫は少壯の時より騎士の城内に涵養せられ武器の操縦を習はし乗馬の術を熟練せしめ君侯に對して忠實を盡し誠意服従するを最上の義務と心得しむ加ふるに宗教的の性質を帶ふるに至りて弱を扶け強を挫くを務め寡婦孤兒を恤み義を重んじ利慾を賤み貴女を尊敬

騎士武藝の試合

パレスト
イン騎士

騎士跋扈して王權漸次衰頹せり

するの風騎士一般の義務をなすに至れり、此等の騎士が互に其技量を試みん方便にして武藝の試合なる者熾んに行はれ群衆の面前に於て勝者が其賞を得るは騎士最上の名譽こそせり、さればかの十字軍時代に奮て従軍の先導者たりしは概ね騎士にして十字軍が一たびゼルサレムを占領するや聖地の保護を以てパレストイン地方に三種の騎士相聯合するを見る、後に此等の騎士は歐州に還りて特種の軍隊を組織し、永く歐州武士の氣風を左右したり、騎士は星霜を経るに従て其威風を増長し殆ど獨立の姿を爲して容易に王命をも奉せざるに至れり、爲めに王權は漸次に衰頹の傾きを現はし來りぬ然れども此間に處して隱に發達せるは各國の市府ありとす、市府は其初め極めて微

布府の發達

市府の跋扈

弱たる者なりしも戦争の起るに當て漸次其規模を擴張し殊に十字軍以來著しく發達したり、市府の重きを置くは商業にして中世社會の發達と共に其需用増加し、從て市府の富源を伸張し、遂に市民をして自ら社會に一團隊を組織するに至らしめたり、市府の隆盛を極むるや恰も獨立して城廓を築き以て王侯の干涉を拒むの傾きあり、十三世紀の頃北獨乙に位する數十の市府がハンサ同盟を組織して市府の一致協力を圖るや交通貿易の業一に其命に出でざるは無く一時歐州の商權全く其手に落ちたり、現今獨乙に存するハムブルグ、ルベック、ブレーメンの三自由都府は即ち此ハンサ同盟の遺存せるものなり、宗教權の勃興に伴ふて中世時代に僧坊熾んに起り、又フヲ

僧坊、僧派の發達

大學の起原

シシスカン及びドミニカンの二僧派新たに起りて少壯有爲の士多く之に屬して宗教社會に勢力を得るに至り、又十字軍以來智力の發達は諸處に後世大學の淵源を生ずるに至りぬ、^{Paris}パリ大學は其最も早く起りたる者にして、^{Oxford}オックスフォード大學之に次ぐ云ふ、

第十章 蒙古族の侵入

蒙古族の勃興

蒙古族は元と支那の北方に住せる微弱なる種族なりしが十三世紀の頃酋長也速該の時に隣邦の部落を征服してより勢稍々強大となり、然るに中途にして殺され、種族又分裂したりしに其子鐵木眞長するに及びて英俊剛毅遂に蒙古の勢を再興したり、當時蒙古種族の四隣には塔々兒蔑里

鐵木眞の西征

元の太祖殂す
太宗、拔都を遣はし魯國を征す

吉乃滿畏吾兒吉里吉思等夥多の小部落互に割據せり、鐵木眞此等の部落を悉く征服して自ら成吉思汗(世界大王)と號す、鐵木眞世界一統の大志を起し南下して西夏を滅ぼし、金に寇し、朝鮮半島を蹂躪し、更に西に轉して中央亞細亞に侵入し、當時裏海附近より印度に跨かれる花刺子摸の大領地を服従したり、鐵木眞西征より還り復た南方支那に入らんとせしに中途にして殂す、時に紀元一二二七年にして之を元朝の太祖と爲す、然れども太祖遠征の遺業は子孫代々之を繼ぎ太祖の殂するや第三子阿窩台位を繼ぎて太宗と爲り、都を喀喇和林に奠め兄朮赤の子拔都に命じて魯國の南部を征せしむ、時の魯國諸侯蒙古の勢を恐れ敢て敵するの勇無く到る處の市府を灰燼となし、^{Poland}ポーランド及び^{Hungary}ハンガリ

拔都ヘン
ガリイを
扱涉して
獨乙よ入
らんとす

イに走りて急を告ぐるや歐州の天地忽ち騒然たり時の羅馬法王グレゴリイ九世は耶蘇教國民の義兵を煽動し、佛王ルイ九世は十字軍の準備を整へ、諸國相聯合して蒙古の軍を防く、然るに拔都直にハンガリイに突進し一二四一年シレジア州のリーグニツに歐州の聯合軍を破り、將さに深く獨乙に侵入せんこす、偶々本國に於ける太宗の訃音に接し

欽察王國

拔都は止むなく兵を旋せり、拔都歸途ヴルガ河畔一帯の地に欽察王國を建設し、爾來蒙古族此地を領すること前後百餘年に及びり

旭烈兀の西征

紀元一二五八年太祖の孫旭烈兀西征してバグダッド府を圍みて之を陥れアバシッド家のカリフ(回教領)を滅ほし更にシリアに侵入してダマスカス府を降し直に聖地ゼルサレ

忽必烈元朝を建つ

ムに突進す、然るに憲宗皇帝(旭烈兀)の殂するに當り遂に兵を駐む、尋て元の世祖忽必烈位に即きて遂に支那宋朝を滅ほし新たに都を燕京に奠め始めて國號を元と稱したり、

羅馬法王忽必烈と和を結ぶ

當時蒙古の領地東西に跨り其勢頗る大なるに乗じて羅馬法王は忽必烈と和を結び其力を借りて回々教を滅ぼさんことを圖れり、之が爲めに支那と歐州との間に使節の往復を來し從て幾多の僧侶商賈其機に投して遙かに中央亞細亞を跋涉して支那に往復し始め、かの伊太利ヴェニス府の

東西交通の頻繁

商人マルコ Polo の如きは支那に來りて元朝に奉仕すること二十餘年に及びたり、以て當時東西交通の如何に頻繁にしてろが地理學上並に文化の交換に莫大の便益を與へたるかを知るへし、我日本の所在が歐州人士に聞ゆるに至り

羅馬法王の目的水泡に歸す

蒙古急に衰ふ

東西又遠く離れて交通絶ゆ

たるも又實に此時に存するなり、
羅馬法王の目的は先づ蒙古の大王を耶蘇教に歸依せしめ
然る後回々教を討つに在り、之を以て耶蘇教は此時始めて
支那に輸入せられたり、然れども法王の計畫其効を奏せず
して蒙古の朝忽ち衰頽し、埃及のカリフが外國の捕虜を以
て組織したるマメルク兵が漸次膨脹してカリフに叛し、之
を攻めて埃及を占領し、進んでシリアを侵し、蒙古の軍を破
りて之を滅ほせし以來法王との交通自然に絶へ、東西又遠
く離るゝに至りて一たび支那に創始せられたる耶蘇教も
共に消滅したり、而して回々教は之に反して其氣運を振興
するの傾きあり、

第十一章 中世紀新國民の勃興

中世紀の中葉に當て東方バルカン半嶋附近に新國民の起
れるあり、今其要領を左に摘録せん

魯國民の起原

(一)魯西亞國民 魯西亞民族は元ゴヴルガ、ニール河

畔に一小部落を爲したるスラヴニアン種族にして漸次人

口の繁殖に従て其領土を擴張したり、九世紀の中葉にノル

マン種族がルーリク王朝を創設せし以來明君相繼きて魯

西亞民族の統一に力を盡せしかば國勢忽ち膨脹し、十世紀

キープ

の末頃にはキープを都として其疆域頗る増大したり、然る

に後にルーリク王朝の一族互に各地に割據するに至り、加

モスコウ

ふるに蒙古族の侵入に遭ひてキープは漸次に衰頽し、十四
世紀の初めより全魯國の中心はモスコウ府に遷るに至り

蒙古族魯國に足跡を絶つ

ぬ、蒙古族が欽察王國を建設して魯國內に住するやモスコウ府の王侯は敢て蒙古族に敵せずして却て之と和親を維持したり、然るに蒙古族が一たび瓦解の兆を呈するやモスコウ府の王侯は率先して蒙古排斥の策を講じ、遂に其効を奏して十五世紀の末葉に至りては全く蒙古の足跡を絶つを得たり、

イワン一世

モスコウ府の王侯は近世魯國王室の祖なり、而してモスコウ府をして優に魯國の牛耳を執るに至らしめたるはイワン一世(二三二八)なりとす、其曾孫イワン三世(一四六二)に至りて割據の諸侯悉く滅びて全魯國の統一成り、イワン四世の時に欽察カザン、アストラカシ等、ブルガガ河下流の地を略し、其子に至りてルーリック王朝の正統絶ゆ、

ルーリック王朝の正統絶ゆ

ブルガリア民族の起原發達

(ニ)ブルガリア國民　ブルガリア人は嫖婢なるフィン種族にして七世紀の頃バルカン半島のスラヴニア人を征服して國を建てたり、爾來スラヴニア人と雜混し言語風俗從て變化し、又隣邦希臘帝國と屢々干戈を交へ自ら其文化に接するを得たり、九世紀の頃耶蘇教に歸依し、ブルガリア文字を發明して爲めに文學一時大に發達したり、王シメオン(八九七三)の如きは嘗にブルガリア國を振興して希臘帝國を驚かしたるのみならず、スラヴニア文學を獎勵して其發達に力を盡せること尠からず、王の死後國勢衰へ一時希臘帝國の羈絆を受けたりしが十三世紀の初めに再び興りて遂に獨立國となれり、

セルビア民族

(三)セルビア國民　セルビア人はダニューブ河の北岸に住

スラヴニア文學の勃興

せる蠻族なりしが七世紀の初め希臘帝國の雇兵となりてセルビア地方に國を成すに至れり、資性嫫婢にして酋長の命にあらざるば容易に奉せず、九世紀の半ば頃より耶蘇教に歸依す、酋長ステーパーフエン、ネマニアの時にセルビア種族を統一し、ステーパーフエン、ヅシヤンの時に希臘帝國及びブルガリアの國勢衰頽せるに乗じてバルカン半島を一統せんことを圖りコンスタンナノブル府を攻撃せんことを企てたり然れども中途にして病死し遂に果さざりき、

セルビア
王の企圖

Stephen Nemania
Stephen Dushan
Constantinople

Balkan

第十二章 諸國王權の伸張

十字軍並に宗教熱勃興の結果として中世時代に跋扈を極めたる法王權、騎士の勢力、若くは市府の隆盛は中世の末葉

佛王フヒ
リップ四
世と法王
との争

諸國王權の伸張に伴ふて自然に衰頽に傾きたり、十三世紀の未佛王フリップ四世王權を奮て時の法王ボニフェイス八世と紛争を生せし以來漸く宗教社會の動搖を來し加ふるに明僧高師又多く、此間に出でず、ボニフェイス死してベネヂクト十一世暫らく其職を繼きて宗門と佛王との調和策を執り法王職を佛國の高僧クレメント五世に譲れり、クレメント五世は法王の居を佛國のアヴignonに移し、佛王の命一として奉せざる無きに至れり、爾來アヴignonの地に法王相繼きて立つこと七代、佛王の威風に服すること殆ど七十年に及べり、此間宗教社會に於ては道德の頽廢、租税の重きを歎し法王の無能を鳴らす者頗る甚しかりしが爲めに一三七六年法王グレゴリイ十一世は遂に羅馬に還れり、此に於

アヴignon
の法王

法王羅馬
に還る

Philip IV

Boniface VIII

Clement V

Avignon

Gregory XI

伊太利派
と佛國派
の對立

てか宗門内に伊太利派と佛國派の黨争を生じグレゴリイ十一世の死後兩派各法王を撰みて互に相固執して動かず宗門の權勢是より益々衰へたり、

佛英兩國
に於ける
王權の伸
張

此間に處して佛王は歴代王權の伸張に力を注ぎ、ルイ十一世(二四六三)の時に至り外交の策に長して國內の諸侯を制御し、内政を鞏固にし、以て中央集權の基礎を完ふしたり、又英

國は百年戰爭以後國內王統の争起り

ヨルク家とランカスター家と互に王位を争ひ其局

ローズ戰
争

ヨルク家とランカスター家の間に及べり、然るにランカスター家のヘンリー起りてヨルク家を排して王位を奪ひ、ヨルク家の女を容

デュード
ア家の王
統立つ

れて皇后と爲し、此に新たにデュードア家の王統を開き、國內

獨乙の空
位時代

の統一是より益々鞏固となり王權の増長從て著しきに至りぬ、時に獨乙の神聖羅馬帝國はフレデリック二世の死後國政紊亂甚しく獨伊兩國恰も無政府の状態に陥れり、世に之を獨乙の空位時代と稱し、確然たる帝王の上に立つもの無かりしがハプスブルグ家のルドルフ衆に推されて獨乙帝位に

ハプスブ
ルグ家王
位に登る

登り内政の整頓に力を用るしより國政稍々緒に就くを得たり、然れども諸侯多く臣服せず、チャールズ四世の時にゴ

ルデン、ブルと稱せる憲法を制定し七撰舉公を定めて之に帝王撰舉の全權を附與したり、其後國內再び紊れたりしがシゲスムンド遂に撰はれて帝位に登り、時恰も宗門動搖の機に際しパリ大學を始め世人皆其調停に力を注ぐに當り

コンスタ
ンスの宗
教大會

マキシミ
リアン一
世の治蹟

スウヰツ
ランドの
獨立

帝は一四一四年諸侯、僧侶等を集めてコンスタンスに宗教大會を開き、當時三法王同時に職に在りしを悉く廢して新たに一法王を立つることを議決したり、其後フレデリック三世の久しき治世を経てマキシミリアン一世に至り獨乙帝國の永久平和令を宣言し高等法院を設けて社會の安寧を維持し、又獨乙全國を十區に分ちて施政に便ならしめ、着々王權の鞏固を圖れり、

是より先き獨乙の附庸國たるスヰツランドは十三世紀の頃より漸く興リツリーヒ、バセル、ベルン、フライブルグ、の四府は貿易の中心となりて市府の特權を有したれども山地に位するウリ、シュワイツ、ウンテルワルデン、の三府は依然舊の如し、然るに獨乙の苛政甚しきに堪へずして此三府は同

モルガル
ラン戦

伊太利の
狀況

伊太利五
ヶ國に分
る
メヂシ家

盟を結びて獨乙の羈絆を脱せんことを圖り、モルガルテン(一二三一年)、ゼムバハ(一三八六年)の二大決戦に因りてスヰツランド兵は獨乙軍を破り以て獨立を完ふしたり、爾來他の諸府多く其同盟に加入するに至りぬ、

此頃伊太利に於ける獨帝の權勢は有名無實に歸し、伊太利國內久しく内亂の巷となりしが時運幾度も轉變して十五世紀の中葉に至りては伊太利は五王侯の分轄する所となり、即ちネーブル王國、ミラン公國、フロレンス共和國、ヴェニス共和國及び法王領是なり、特にフロレンスの有力家なるメヂシ家は、大に伊太利の文學技藝を獎勵し、中世の末葉に起りたる文運復興に與て力あり、

更に西方西班牙に於てはサラセン王國漸く衰へて次第に

西班牙の
サラセン
王國遂に
滅はざる

西班牙葡
萄牙兩國
の起原

耶蘇教國民の蠶食する所となり、カステル、アラゴンの二王國此間に勃興してサラセンの領地は僅に南方グラナダ地方に限らるゝに至りしが、一四九二年遂にカステル王イサベラの滅ほす所となりぬ、後にカステル、アラゴンの二王統相合して西班牙王國の基を爲せり、又葡萄牙は初めカステル王國の附庸地なりしにサラセン人討滅に際して獨立し中世の末期に至り頻りに航海を奨励したる結果海上の發見に効を奏し國勢漸次隆盛に向へり、此の如く諸國に於ける王權は中央集權を完ふせんとし、社會の進歩は自ら封建的の諸侯騎士をして其驥足を伸はすの餘裕無からしめ、又交通貿易の發達は市府をして其堅城を解き、王權の下に立ちて國運の進歩に後れざらんことを務めしむるに至れり、

第十三章 トルコ族の勃興

オットマ
ン、トル
コ族小亞
細亞地方
を略す

酋長ム
ラッド一
世

裏海の東部に住せる種族をオットマン、トルコ族とす、此種族十三世紀の末蒙古族に追はれて小亞細亞地方に走り、酋長オスマンの命を奉じて攻戰に従事し、當時セルジク、トルコの勢漸く衰耗せるに乗じて難無く其領土を征略したり、隣邦希臘帝國も今や國力枯衰して外敵の侵入を挫くの勇無く空しく敵の攻略を傍觀するに過ぎざるのみ、之を以てニケーア、ニコメデア等の希臘領は忽ちトルコ族の占領する所となり、酋長ムラッド一世(二三六九)が耶蘇教國民の捕虜中より壯麗剛毅の士を撰みて組織したる歩兵が酋長の指揮

ムーラッ
ド一世ア
ドリアノ
ブルを陥
る
バジャゼ
ント希臘
を滅ぼす

を受けて従軍するに至りてトルコ軍の勢益々強く、ムーラッ
ドは進んでバルカン半島を侵しアドリアノブルを陥る、近
隣の諸市爲めに騒然たり、

ムーラッドの子バジャゼット勇敢父に勝りマセドニア、セッサリ
イ等の地を略し尋て希臘本國の全部を占領したり、時の獨
帝シゲスムンド及び佛國の諸侯等大に之を憂ひ兵を募り
てトルコ族を撃ちたりしが一三九六年ニコポリスの戦に
大敗してシゲスムンドは海路本國に逃れ去れり、コンスタ
ンチノブルの希臘帝國も今やトルコに貢賦して其歡心を

獨佛緋合
軍大敗す

帖木兒の
西侵

迎ふの止むを得ざるに至れり、
是より先き蒙古の一族に帖木兒あり中央亞細亞を席捲し
てサマルカンドに都を奠め、成吉思汗の徹を陥みて西方遙
Sanarcid

バジャゼ
ット蒙古
を撃ちて
敗る

かに歐州に侵入し其勢頗る猖獗なり、トルコの酋長バジャゼッ
ト此に於てか之を防かんと欲し、大軍を率ゐて蒙古の兵を
撃ちしも戦勝たずして潰へ、バジャゼット幾何も無くして卒す、
然るに帖木兒の領土は久しからずして四分五裂せしかば

ムーラッ
ド二世大
に四隣を
略す

バジャゼットの孫ムーラッド二世(一四五一)は再び軍を興して攻戦
に従ひコンスタンチノブルの四隣皆其威風を仰ぐに至れ
り、希臘皇帝ジョン七世は希臘、ラチンの、兩教を合併して羅馬
John III

モハメッ
ド二世

日に危きに瀕せり、ムーラッド二世の子モハメッド二世(一四五二)
Mohammed II
立て都をコンスタンチノブルに奠めんと欲し、一四五三年
大軍を以て城を圍む、城内の防禦頗る嚴なりしも遂に陥り
コンスタンチノブルの古城全くトルコの有に歸したり、東

コンスタ
ンチノブ
ル城陥る

東羅馬帝國滅ぶ

羅馬帝國此に至て滅ぶ、

トルコ族は歐州に其根據を固めしより地勢の形勝自ら國

力の伸張に適し、セーリム二世(一五二〇)の時に波斯を討し、

Selim I

Syria

トルコの基礎成る

リア、埃及、メソポタミア地方を併して領土大に擴張したり、

Mesopotamia

建國の基礎此に確定し、爾來トルコ族は歐州列國の間に對等の勢を保つに至れり、

第十四章 文運復興

文運は漸次進歩し來たる

中世時代には文化の増進絶へて著しき者無きが如し、雖も古代希臘羅馬以來の文明は敢て滅せしにはあらずして徐々として進歩し來りたるなり、只社會の大勢が諸國の盛衰興亡に汲々として意を文化の發揮に專にすること能は

文運復興の氣運

ざりしのみ、然るに中世の末葉に至るや社會の大勢略ほ定まり人智又頗る開發する所ありて文化の發揚を一時に見るに至りぬ、特に文學美術は最も其粹を極めたり、要するに古文學の研究熾んに起り、希臘羅馬隆盛の當時を再現せんこの目的を以て新事物の發展を來せしものなるを以て世に之を文運復興と稱す、

文運伊太利に勃興したる由來

文運復興の根據は實に伊太利に存す、既に十四世紀の頃伊太利の詩人ペトラール^{Petrarch}に類りに文運復興の氣運を唱道し、十五世紀に至りて希臘との交通頻繁なるに乗じてクリソロラス^{Chrysoloras}、ベスサリオン^{Bessarion}の如き希臘の碩學伊太利に來りて古文學を傳播し、加ふるに當時伊太利の王侯互に古器古物の蒐集を競ふの風ありしかば文運の此地に勃興したるは偶然

メヂシ家の保護

にあらざるなり、フロレンスのメヂシ家は之が保護者として其名夙に高く、大學を起し、圖書館を設けて大に古文學の發達に便益を與へたり、されば古代の哲學科學より詩文等に至るまで一として研究の材料に供せられざるは莫し、

獨乙に於ける文運復興の状況

古文學の研究者を當時ユ、マニストと唱へ、獨乙に於ては古來の神學派と新研究派との間に争を生じ互に相拮抗したりしがユ、マニズムの風潮はロイヒリン、エラズマスの二名士に因りて盛々隆盛に赴き、神學派の研究は改革の必要を認め、自由研究の基礎駁々として國內に普及したり、

美術の進歩

古文學の新研究に伴ふて技術の進歩又著しく、千古の名作此時代に出でたる者尠しとせず、建築及彫刻に於てはフロレンスにブルネレスキ出て、羅馬にブラマンテの名匠出て

建築彫刻

Brunelleschi

Bramante

ミカエル、アンジエロ

たり、然も之に次て絶世の大家ミカエル、アンジエロ羅馬に出

Michael Angelo

てたり、彼は建築彫刻、繪畫の三術に秀て又詩に長す、羅馬に於けるモゼス像の彫刻並にフロレンスのメヂシ墳塋の彫

Medici

繪畫

刻は實に精妙を極む、又繪畫に於てはアンジエロはラファエ

Raphael

と共に二大名傑と仰かれ其他ダヴィンシ、コレギオ等の名士

Da Vinci

Coregio

音樂

皆此時代に輩出す、又音樂も著しく發達し非凡の名手パレ

Palestrina

ストリナは實に此時に生れたり、

活版術の發明

古文研究熱は古文の普く衆人の手に入らんことを欲し、其必要に逼られて獨乙マイエンスの人グーテンベルグは活版術を發明して其需要を充たすを得るに至れり、是れ文運復興の著しき結果にして後世活版術の始めなりとす、

Maience

Gutenberg

第十五章 航海發達と新陸地の發見

諸種の發明

西歐諸國航海に着眼せる理由

十四五世紀の文運復興に乗じて人智著しく進歩し、科學上種々の有益なる發明あり、其著しく社會に影響を及ぼしたるは火藥の使用と磁針器の應用及び活版術ありとす、火藥はフライブルグの僧シュワルツの發明なりと唱ふれども恐らく支那印度地方より傳播せしものなるべし、磁針器は伊太利の人フラヴオ、ギオシヤ始めて之を航海に應用したり、火藥の使用は人心を勵まし磁針器の應用は遠洋航海の危険を和くるの基となれり、

歐洲中部の諸國が内憂外患の爲めに國家多事なるに反して比較的久しく平穩を保ちたる西歐諸國が此時に當て

ヴェニス、ゼノア、ピサ貿易の中心たり

トルコの勃興は東西交通の路を杜絶す

航海事業に着眼するに至りたるは抑も其故あり、蓋し十字軍以來東西の交通頻繁となり彼我の貿易は當時未だ海路の開けざりしを以て主として陸路にて運搬し來り、伊太利のヴェニス、ゼノア、ピサ等の市民其媒介を爲して交易の便を圖りしかば此等市府の富裕は頗る大なる者ありて恰も東西貿易の中心たるの有様を呈したり、然るにトルコ族が希臘帝國を滅ぼして歐亞の關門を扼するに至りて彼我の交通忽ち沮喪せられ自ら他に新交通の路を發見するの必要を生じたり、加ふるに曩に支那の元朝と交通盛なりし時マ

ルコ、ポロの如き久しく東洋の事情を觀察し故國に歸りて一たび其東洋紀行なる者を世に公にし、東洋諸國の如何にも豊饒にして金銀珠玉に富めるかを高言するや大に當時

の人士をして好奇心を起さしめたり、西歐國民が遠洋航海の冒險事業に着目したる豈に宜ならずや、

時の葡萄牙の皇子ヘンリー親王大に航海獎勵に力を盡し、

天文臺を設け、海軍學校を興し、船舶を製造し以て航海の實

驗に供したり、親王の企圖は着々其効を奏し、一四二〇年頃

には歐人未聞のマデイラ及びカナリイ群島を發見し、一四

八六年バートロミウ・ディアズは亞弗利加の南端喜望岬に達

し、東洋に通ずるの航路を確定したり、

時にゼノアの人クリストフ・コロムブスは天文地理の學

に熱中し當時東印度の一部と思はれたる我日本に渡航せ

んと欲し、伊太利の天文學者トスカネリの説に憑據して航

路の方向を定め、以て各國の王侯に補助を請願したれども

葡國のヘンリー親王大に航海を獎勵す

喜望岬に達す

コロムブス

マデイラ

Canary

Genoa

Toscanelli

容れられざりしが遂に一四九二年西班牙王イサベラの援助を得三艘の船を裝ひ有志の士を募りて同年八月西班牙のバロス港を發して西方に向ひたり、太西洋を航する二月餘にして十月始めてサン・サルヴドル嶋に到着するやコロムブスは之を以て東印度の一部ありと信し、之に次きてキューバ、ハイナ等の諸島を發見したれども東洋紀行に記せるが如き金銀珠玉は得て求む可らず、然れどもコロムブスは印度交通の業を完ふせり、信し、キューバ島に城壁を築き殖民地を設けて西班牙に歸着したり、其後コロムブスは新陸地に航するこゝ三回、ジャマイカ島、アンタルス群島、カリビヤン群島を發見し、オリノコ河口より於て大陸に觸れたり、此等の新領土今や悉く西班牙に屬するに至れり、

一四九二年西印度に歸着す

コロムブス

ジャマイカ島

Antillas

Caribbean

Orinoco

カボットの發見

一四九七年英人ジョン・カボット印度への北路を發見せんこ企て北米のブレトン岬に觸れ沿岸を南下する數百哩に及び

Breton

John Cabot

て新大陸の所在愈々確然たり、此頃伊太利人アメリゴ・ヴェス

Amerigo Vespucci

アメリカの名稱

プ、ナ西歐諸國に雇はれて南米の沿岸を搜索すること數回、

一五〇四年彼が精細なる紀行を世に公にするや其名に因

りて新陸地をアメリカと總稱したり、此名稱後々全世界に

America

普及するに至れり、新陸地の發見は西歐の形勢を一變する

と共に歐州社會の耳目を一新するの基こはなりぬ、

第三篇 近古史 (紀元一五一七年より一八一五年に

至る)

科學進歩の結果こして歐州と他國との關係擴
まりたる時代

第一章 宗教改革

パレスティンの一寒地より起りて遂に歐州の全局を左右

Palestine

するに至りたる耶蘇教が久しく其教義を民間に布教する

に於ては自ら其間に幾多の弊害を生じ十字軍前後の頃に

當りては頗る甚し、十三世紀に佛國の南部にアルピゲンセ

Albigenses

スの乱起り、十四世紀に英國にワイクリフ黨起りて一時勢

Wycliffe

を逞ふし又獨乙のボヘミア州にフス黨ありて人心を刺激

Bohemia

Huss

宗教改革の先鞭

宗教改革の原動力

したり、此等の紛擾は皆當時の耶蘇教に服せずして教會の改革を唱ふるの餘り事を擧げたる者あれども時運の未だ到らざりし爲め孰れも其業を完ふせずして終りき、然るに中世の末期に起れる文運復興と航海の發達は國民一般をして其思想を自由ならしめ、新進の氣象を勵まし、遂に宗教社會の腐敗を黙する能はざるに至らしめたり、

宗教改革は其端緒を獨乙に開き時のヴッツテンベルグ大學

Wittenberg

の神學教授マルチン、ルーサー實に改革運動の主謀者たり、

Martin Luther

偶々時の羅馬法王レオ十世は羅馬の寺院建築を名として

Leo X

諸國に赦罪狀の販賣を施行し以て國民の義損を貪ほり、ド

ミニカン派の僧テツツェル法王の命を奉して獨乙サクソニー

Tezel

Saxony

に來り熾に其販賣を始めたりしかばルーサー之を見て慨

マルチンルーサー

ルーサー九十五條の意見を公示す

然禁ずること能はず一五一七年直に九十五條の意見を草

してヴッツテンベルグの寺門に公示し、以て赦罪狀販賣の不

Wittenberg

正なるを駁撃したり、此に於てか宗教社會忽ち騷然たるの

有様を呈し、當世不遇の志士概ね蹶起してルーサーに賛し

サクソニー公フレデリック又ルーサーを保護したり、法王レ

Saxony

Frederick

オ十世此變を聞き屢々使者をルーサーの許に遣はして私

SeoX

かに之を鎮制せんことを圖りしが一五一九年羅馬教の僧

ジョン、エックなる者ライプシック府に於て公然ルーサーの説を

John Eck

Leipsic

攻撃したりしかばルーサーは此に意を決して羅馬教會の

弊害を論破し改革の愈々急なるを叫びたり、之が爲めに翌

年法王より破門の嚴命を受けたれども恬として懼るゝの

色無く悠然として破門の令狀を火中に投じたり、此時碩學

破門の令狀を焼く

ルーサー

を駁撃す

エック、ルーサーを駁撃す

ジョン、エック、ルーサーを駁撃す

共々ルーサーを保護す

サクソニー公志士と共々ルーサーを保護す

サクソニー公志士と共々ルーサーを保護す

共々ルーサーを保護す

ルーサー九十五條の意見を公示す

メラシヒトシ及び騎士シッキンゲン、フッテン等の諸士は皆亦
Melancthon Sickingen Hutten
心を捧げてルーサーを輔翼せんことを誓へり、

偶々獨乙皇帝マキシミリアン一世殂して其孫西班牙王ナ
Maximilian I
ヤーレス五世入りて皇位を継ぎ、羅馬法王の請を容れて一

Charles V
五二一年ウオルムス府に國會を開きルーサーを召喚して其

Worms
意見を棄却せんことを勧めたりしにルーサー斷乎として

動く所無かりしかば遂に皇帝より國外追放の宣告を受け
たり、サクソニイ公フレデリック其心情を憫み途潜かにルー

Saxony Frederick
サーを擁してワルトブルグ城内に迎へ之を保護したり、ル

Warburg
ーサー此に留まること一年、孜々として經典の翻譯に従事

Bible
したり、ルーサーがワルトブルグ城に隱遁せるの隙に當り

Sickingen
てシッキンゲン等の騎士は諸侯を抑制せんことを圖りて暴動を

ウオルムス國會

サクソニイ公ルーサーをワルトブルグ城内ニ迎ふ

諸暴動改革に關して起る

ルーサー、諸暴動を鎮定す

獨乙の二大外患

トルコ埃國を侵す

起し、ルーサーの友なるカールスタットはヴッテンベルグに
Carlstadt Wittenberg
於て改革の事業を武力に訴へんことを企て同時に南獨乙

の農民等は自由の權を得んことを名として一揆を起し三

者共にルーサーの宗教改革に應援せんことを目的に出た

れどもルーサーは其却て改革に不利益なるを看破し、百方

之が鎮定に力を盡したり、

當時獨乙國內に二重の外患あり、一は佛王フランシス一世
Francis I
チャーレス五世に敵意を表し、一は東方トルコ族が獨乙方

Charles V
面を侵さんとする是なり、トルコ族は曩に希臘帝國を滅ぼ
Turks
せしより勢に乗じてハンガリーに攻め入り一五二六年ハ
Hungary
ンガリー王を破りて之を占領し將さに埃國に進まんことを
Rerdinand
時の埃帝フェルジナンドはチャーレス五世の弟なるを以て

佛王フラ
ンシス獨
帝と伊太
利に戦ひ
敗る

スパイヤ
ースの國
會
チャーレ
ス新教の
擴張を禁
す

チャーレスは自ら墺國の危難を救ふの義務あり、然るに一
方には佛帝フランシスは曾てチャーレス五世と獨乙皇位
を争ひし以來久しくチャーレスと和せず、兩王共に王權伸
張領土擴張の大志を懷きて伊太利と交戦し、佛王終に敗れ
て和議を結べり、然るに法王クレメント七世はチャーレス
五世に服せず佛王と更に同盟を結びてチャーレスに抗せ
しかばチャーレスは之に向て宗教改革の運動を利用せん
と欲し、一五二六年スパイエルに國會を開きて暗に改革黨
の教理を許容したり、此に於てか漸次國內に勢を振はんこ
せし改革黨の教義は公然其組織を整ふるに至り、後世の所
謂新教なる者の基礎將さに此時に成らんことす、さるをチャ
ーレスは新教の日進月歩の有様なるを目撃して之を快し

アウグス
ブルグの
國會
スマルカ
ルド同盟

こそせず、一五二九年再びスパイエルに國會を催ふして新教
の擴張を禁したり、此時新教黨は大に其議に抵抗したるの
故を以て爾來プロテスタント(反對者)の名稱を得るに至れ
り、尋て翌年アウグスブルグの國會に新教派の諸侯も多く
列席し、新教黨は此時メラントンの草せるアウグスブル
グ信仰條令なる者を皇帝に捧呈せしかども容れられず、却
て國會は新教の成立を否決せしかば新教派は此にスマル
カルド同盟を組織し以て新教を保護せんことを決したり

第二章 新教の成立と諸國に於ける

宗教改革の状況

チャーレス五世は漸く佛王フランシスを屈服して國難の

ヌレムベ
ルグの宗
教會議

トリエン
トの宗教
大會

スマルカ
ルド戦争

一を除くを得たれども東方トルコ族は頻りに帝國の領内を侵さんとするを以て國內の紛紜に汲々たるの暇無く一五三二年ヌレムベルグに宗教會議を開きて一時新教の成立を認可したり、此頃新教は既に到る處に賛同せられ北獨乙諸州概ね新教を奉せざる無きに至れり、然るに皇帝ゲヤールレスは外患の靜まるに當て一五四五年トリエントに宗教大會を催ふして新舊兩教徒を召集したり、新教徒は其法王の意に出るを知りて皇帝の命に應せざりしかば皇帝は兵力に訴へて新教徒の列席を迫り、スマルカルド同盟の領袖サクソニイ公フレデリック並にヘッス公フリップの二人に帝國禁令を命たり、此に於てか新教徒は斷然武器を執て皇帝に逆ふに至れり、是れスマルカルド戦争の發端なり、ルーサ

ルーサー
死す

モーリス
叛して新
教軍大に
敗る

モーリス
急にチャ
ールスを
襲ふ

アウグス
ブルグの
宗教平和
大會
改革運動
全く成効
す

一は此事變の起るに先ちアイスレベンEislebenの故郷に病死したり、戦争の始まるやサクソニイ公の甥なるモーリスは公に對して不和なるに乗じ新教を奉するに拘らずチャールレスに内應せしかば新教軍は大に敗れサクソニイ公は虜とあり悉く其領地を没収せらる、然るにモーリスは又忽ち一變して新教軍に歸順し、佛王ヘンリー二世フランシス二世の子と同盟して急にチャールレスを襲ひしかばチャールレスは不測の計に陥り應急の備へ無く漸く身を脱して伊太利に逃れ、一五五二年パスサウに和を講じ、新教の自由を許し、サクソニイ公の放釋を約したり、一五五五年アウグスブルグの宗教平和大會に於てパスサウの條約愈々確定せられ、爾來新舊兩教共に同權を維持するを得るに至り、ルーサーの改革運動此に

至て全く其効を奏したり、獨乙の宗教改革は忽ち其餘波を歐州各國に傳へたり、今主なる諸國の改革状況を略記せん

スヰイツ
ラントの
宗教改革
ツヰイン
グ

(一) スヰイツランド、
Switzerland
リヒツヰングリなりとす、彼は深く經典を究めルーサーと
Ulrich Zwingli
恰も同時代に羅馬法王の赦罪狀販賣を難し以て身を宗教
改革に委ねたり、當時スヰイツランドは七縣より成りしがツ
ヰングリの力に因りてツリーヒ先つ舊教を脱し、尋てベル
Zurich
ン、及びバセルの二縣之に拗へり、然るに他の四縣は依然と
Basel
して舊教を奉し互に同盟して新教徒に對抗し、遂に兩者の
間に戦端を開きたりしが新教軍大敗してツヰングリ自ら
戦没したり、爲めに新教は一時其勢沮喪したれども全く消

英國の宗
教改革

ヘンリー
八世

滅するに至らざりき、

(二) 英國、
Henry VIII.
當時の英王ヘンリー八世(一五〇九一五四七)は固陋にし

て舊教を保護し自ら筆を執りてルーサーを駁撃せしこと
ありしも王の性淫逸にして屢々其皇后を廢立するや羅馬
法王其行爲を肯んせずして王を破問したり、英國々會は此
に於て英國と法王との關係を絶ち英國の寺院をして全然
王の配下に屬せしめたり、此機に乗して新教は漸次其根據
を英國に固めたれどもヘンリー八世は依然舊教を信奉し
て新教を酷遇したりしが其子エドワード六世の時に至て
Edward VI.
稍々新教に傾き、新教寺院の組織全く此時に成れり、其後女
王メアリーは舊教國ある西班牙の影響を受けて再び舊教を
Mary
復興し爲めに新教徒は概ね難を大陸に避けたり、メアリー殂

メアリー女
王

エドワ
ルド六世

してエリザベス女王位に即きて新教の再興を圖り、英國新教の基礎此に全く動かざるに至りぬ、

スコットランドノ状況

又スコットランドに於てはジョン・ノックス大陸より新教思想を齎らし來りしより漸く國內朝野に傳播し始めたり、
Scotland John Calvin

佛國ノ状況

(三)佛國、此國の新教はジョン・カルヴンの力に因りて漸次に廣まり、其宗派を特にユージュノーと稱す、然れども當時

ジョン、カルヴン

佛國は舊教を固執して新教を排斥せしかばカルヴンを始め其宗徒は難を國外に避け、カルヴンはゼネワ市に逃れた

カルヴン

り、ゼネワ府民はスヴツランドのベルン府より援助を借り舊教を脱して新教を奉するに至りぬ、カルヴンの教義は新

カルヴンの教義

教中最も進化したる者にして後にカルヴン教と稱する一宗派となれり、

歐洲北部の状況

(四)當時歐洲北部のノルウェイ、スウェーデン、デンマルクの三國は共に一王の下に司配せられたりしが政治上の革命起りてグスタワス、ワサ王位に登るに至りて大に新教を保護したり、爲めに新教の傳播頻る速かなりき、
Gustavus Vasa

ゼスイト教の創始

(五)新教の發達は舊教の反動的改革を惹起し西班牙に於てはイグナチアス、ロヨラはゼスイト教(即ち天主)を創始して舊教の基礎を確立し、ゼスイト教會を組織して大に羅馬法王の威嚴を伸張するを務め、遠隔の異邦に熱心なる布教を試み其勢自ら新教に拮抗するに至れり、

第三章 葡西兩國の隆盛

新陸地の發見は其主謀者たる葡西二國をして益々異域の

ワスコダ
ガマ印度
カリカッ
トに達す
アルブケ
ルク印度
殖民の根
據を設ク

ヅニス
人葡人排
斥を企て
こ成らす
ゴア府を
占領ス

殖民に注目せしめ従て兩國の富強を來たせり、一四九八年
葡人ワスコダ、ガマは喜望岬を廻りて印度マラバールの沿
岸なるカリカットに航して印度貿易を開き其初め只に交易
を目的こしたりしが英邁なるアルブケルクが印度貿易を
總轄するに至りて土着の諸侯より領地を押収し以て葡國
殖民の根據を設けたり、從來陸路印度貿易の行はるゝに當
て其中間に立ちて至大の富を致したる伊太利のヴェニス府
は商權の次第に葡人の手に移るを嫉み、アラビア人を誘ふ
て葡人排斥の策を講じたれどもアルブケルクの炯眼能く
其謀を洞察して之を水泡に歸せしめたり、一五一〇年ゴア
府を占領して印度政廳を此地に置き葡國の殖民愈々鞏固
こなれり、尋てマラッカ半島を占領し、又波斯灣口のオルムズ

オルムズ
府を陥る

葡人支那
日本交通
を開ク

リスボン
府の隆盛

府を陥れたり、當時オルムズ府は印度、亞弗利加、アラビア、及
び中央亞細亞間の海陸交通の巷にして市街の繁昌富裕を
極めたる他に其類尠かりき、葡國之を占領したる結果其隆
盛を來したる思ふべきなり、
葡人は印度の殖民に満足せず更に東方に進みて支那沿岸
を侵し、遂に支那帝國と交渉して廣東河口に媽港(本邦人は天川と云ふ)
の港を永代借用して支那貿易を始め、一五四二年(天文十一年)
同國人ピントーなる者我種子島に漂着して銃器を傳へ、始
めて我國との交通を開きたり、葡國の勢此の如きを以て本
國の首府なるリスボン港は一躍して世界貿易の中心とな
り、歐州列國一として需要を此地に仰かざるもの無きに至
りしかば其隆盛を極めたる推して知るべし、

西國の殖民策

マゼランの世界一週

南米の征服

耶蘇教の東洋布教

西國はコロンブスの發見以來頻りに新陸地に航海を試み、一五一三年バルボアは遙かにパナマの地峽に達し、一五二〇年葡國の船師マゼランは西班牙王の命を奉じて米國の南端マゼラン海峽を廻りて太平洋に出て、之を横きりて遠くフィリピン群島に達し、更に西方に航して一五二二年本國に歸航したり、是を世界一週の始めとす、尋てヘルナンド、コルテスはメキシコ遠征を完ふして西班牙領と爲し、フランシスコ、ピザロは南米ペルを征服し米國に於ける西國の殖民地此に成れり、葡、西の遠征は之に附するに耶蘇教の布教を以てし、當時新教に拮抗して起りたるゼスイット教は頻りに東洋に向て其勢力を伸はせり、されば印度のゴア府は啻に殖民政廳の所

フランシス、ザヴェル、エル日本に布教す
マテリオ、リシ支那に布教す

在地たるに止まらずして實に東洋に於ける耶蘇教の根據地たり、かの有名なる高僧フランシス、ザヴェルは久しくゴア府に耶蘇教の管長を奉し、後ち我國に渡來して西教を傳へ、當時の我民心に適遇して一時熾んに擴まれり、又同しくゼスイット派のマテリオ、リシ(利瑪竇)支那に布教し、北京に會堂を設けしより耶蘇教は漸く支那に傳播し始めたり、此の如く葡、西の二國は殖民、遠征に依りて大に其國力を増長し、當時中部歐羅巴の諸國が久しく内憂外患に苦しめられ、國力疲弊せるに比して二國が隆盛を極めたるは全く航海發見の効を奏したるに因る、雖も又二國が比較的治平を維持し來りたるの結果にも依らずんばあらず、

第四章 和蘭の獨立と西班牙の衰運

西王フヒ
リップ二
世

西班牙王ナチャールス五世が久しく獨乙皇位を兼ねるや其間西班牙の強大なること言ふに及はざりき、ナチャールス殂して其子フリップ二世西班牙王國を繼承したる際に於ても其領土は本國以外にネザールランド、ネーブルス、シ、リイの兩王國、ミラン公國、南北アメリカの一部及び東方フ、リ、ピン群島を含有し其富強他に類無かりき、然るにフリップ二世は君主專制を固執して各屬領の風俗習慣に差違あるを顧みず只管舊教に拘泥して新教を壓し施すに同一の政を以てせしかば自ら屬領人民の離叛心を起さしめ遂に之が爲めに本國の衰運を來すに至れり、而して和蘭の獨立は其最も

著しき者と爲す

ネザール
ランド

獨乙の北部低地に位するネザールランドは元々獨乙皇帝に屬し血統上の關係よりフリップ二世に傳はりたる國にして

Philip II

土地概ね不毛あり、雖も人民伶俐にして商工業頗る熾んなり、宗教改革の起るや率先して新教を賛し後ちカルヴン

教を奉するに至り、歴代古來の特性を維持し、固有の風俗習慣を保存したれども、フリップ二世の時に至りて其專横の政に堪へず遂に國民の離叛を招けり

ネザール
ランド國民
漸くフヒ
リップ二
世に背く

フリップ二世はネザールランドを制御せんことを欲し、當時此國の名族にして英名の聞へあるエグモント伯及びオレンジ公

Egmont

Orange

ウリアムの二人を措きて顧みず、異母妹マーガレットをネザ

William

Margaret

ールランドの攝政に任じ、舊教の僧正グランヴェルを其顧問に

Granvelle

マーガレ
ット攝政
とある

テザール
ンド國民
遂に反す

任したり、其處置たる漸く國民の怒りを増長せるにも拘らず、フリップ二世は西班牙軍隊を國內に駐屯せしめ、又舊教の僧侶を増加して附するに寺領を以てし務めて新教を壓抑せしかば國民此に蜂起して畫像破毀の亂を始めたり、フリップ即ち大軍を派遣して軍法會議を開きエグモント伯等を究問して死刑に處し、其他新教徒の刑に處せらるる者多かりしかば國民遂にオレンジ公ウリアムを推して首領と爲し國難救済の策を講じ始めたり、此に於て西班牙王屢々兵を出して之を鎮定せんことを圖りたれども遂に果さず、一五七九年ホルランド、ジールランド、ウトレヒト、ゲルデルラシド、グロニンゲン、フリースランド、オウリスセルの七州はウ
 Holland Zeeland Utrecht Gelderland
 Groningen Friesland Overysse
 トレヒト同盟を結びて西班牙の羈絆を脱し、和蘭聯合共和
 Utrecht

和蘭共和
國成る

エリザベ
ス女王と
メリイ女
王

舊教徒英
王を廢せ
んとして
成らず

國を組織してオレンジ公ウリアムを其盟主に仰けり、和蘭共和國の端緒此に存す、
 當時英國は女王エリザベスの朝にして國運漸く發揚の域に向ひたれども北方スコットランドに女王メリイ位に在り、曾てエリザベスと英王の位を争ふて果さず、性淫逸にして前に佛王と婚し後又西班牙王の皇后となり、舊教を奉じて英國に對抗せしかば英國は爲めに暫らく靜謐を缺きぬ、此頃英國は殆ど全く新教を奉じ舊教の勢日に非なりしかば舊教徒は英國を征略しエリザベスを廢してメリイを立てんことを圖れり、然るに其謀露はれ西班牙並にスコットランドの兩國が其主謀者たること判然せしを以てエリザベスは國內の舊教徒を遇する一層峻嚴なるに至り、折しもネザール

ランドの叛せるに際して兵を出して之を援け、スコットランドの女王メリーを捕へて之を死刑に處したり、此に於て西班牙王フェリッポ二世之が讎を酬るんと欲し、一五八八年百餘隻の戰艦(アルマダ艦隊と號す)を發して英國を征す、然るに英國は恰も海事思想勃興の時にしてホーキン、ラレイ、ドレーキ等の名將風雨の起るに乗じて巧みに戰艦を運轉し以て西班牙艦隊に衝りしかば西軍悉く敗れ過半沈没して漸く本國に逃げ歸れり、從來西班牙が專有したる海上權は此時より英國の手に移り、西班牙の國勢從て又昔日の如くならざるに至りぬ、

第五章 佛國の宗教内亂と王權の發達

新教漸次
佛國に蔓
衍す

貴族王に
抗す

新舊兩教
徒の軋轢

カルヅン教は佛國の上流社會に其根據を固めて國內に傳播し、佛王フランシス一世、ヘンリー二世相繼きて舊教を守り頻りに新教を虐待せしこ雖も新教は漸次蔓衍の兆を現はせり、フランシス二世(ヘンリーの子)幼にして位に即き其母カサリン、Francis II. Catherine de Mediciメヂシ政を攝しガイヌ家を擧げて事を托せしかば舊來の貴族は大に之を憤りて概ね新教に與し隱然王家に對抗し殆めたり、

一五六〇年新教の貴族叛を圖りてガイヌ家の勢力を殺さんこを企てしに事成らず新教徒爲めに此時多く罪せらる、此に於て攝政カサリン一五六二年會議をセント、ジャーマンに開き新教禁止の條令を發布せしかば新教徒は止むなく事を干戈に訴へ、爾來新舊兩教の争は久しく國內の平

穩を妨げたり

一五七二年カサリンは政略上の必要に逼られて其女Marie

ガレットMargaretを新教の貴族なるナワール公Navarreヘンリーに娶はすこ

こを定め、パリ府に盛大なる式典を挙げたり、此時新教徒の

セント、
バーソロ
ミューの

多くパリ府に集るを機とし舊教徒は勅許を得て同年八月

大虐殺

二十四日セント、St. Bartholomewの夜を期して新教徒の大虐

殺を行ひ爲めに數千の新教徒は一夜の中に屍をパリ府に

舊教徒の

曝らせり、同時に地方に於ても新教徒の虐殺せられたる者

暴行は大

其幾千なるを知らず、此事たる大に新教國民の感情を害し

教國民の

佛國の宗教内亂は敢て沈滅するに至らざりき

感情を害

す
ヘンリー三世Henry III（Politique）位に登りてポリチクPolitiqueと稱する新

三世

宗派起りて宗教上の争は依然として止む所無かりしがへ

ナワール
公ヘンリ
イ新王朝
を開く

ンリー王國家經綸の才に乏しくして新舊両教徒共に王を
信用せず、王又定見無く新教に與みするが如くにして動も
すれば舊教同盟に加はり、後ち遂に非命に斃れ、一時王位の
争起りしかNavarreナワール公ヘンリー遂に勝を制して新王朝
を組織しヘンリー四世と號したり、當時佛國は内憂外患の

ヘンリー
四世佛國
の國勢を
復興す

久しく續きしが爲めに國政紊亂し國民窮迫に苦む、ヘンリ
イ四世即ち意を此に用ひ外患を退けて國境の防備を完ふ
し一五九八年Nantesナントの勅令を發して新舊兩教の布教を許
し以て國內の紛擾を解き専ら力を國力復興に用るしかば

社會の狀況日に月に革まり、幾何も無くして國勢舊に復し、
佛國の王權は之より益々確立の氣運に向ふに至りぬ、

第六章 三拾年戦争

獨乙の宗教紛擾は一五五五年の平和條約に因りて靜謐に歸し、皇帝フェルデナンド一世及びマキシミリアン二世相繼きて平和の策を講したるを以て新舊兩教の間暫らく無事なりしにルドルフ二世位に即きて舊教に左祖し新教排斥の傾向を現はせしかば兩教不和の端緒又新たに此に胚胎し、新教徒は保護同盟を組織し以て舊教徒に抗するに至れり、此機に乘し列隣の強國佛蘭西、デンマルク、スウェーデン等は互に獨乙の内情を伺はんことを企てたり、そも是れ三拾年の久しきに亘れる宗教戦争の發端なりとす、

一六一八年ボヘミア州の新教徒叛して皇帝フェルデナンド

の叛
ボヘミア

三十拾年戦争の原
因

ルドルフ
帝舊教に
左祖して
兩教の争
又新たに
生ず

Bohemia
Ferdinand II.
Denmark
Sweden

新教徒大敗す

クリスチ
アン四世
新教徒を
救はんとして敗る
スウェー
デン王立て
獨乙軍を
破る

二世に抗し、フルツ公フレデリック五世を戴きてボヘミア王兼新教同盟の首領とす、皇帝フェルデナンド即ち兵を發して直に之を討ず、新教軍大に敗れ、ボヘミア州の人民此時過半其命を失せしと云ふ、新教軍の首領フレデリックは捕へられて其領地を没収せらる、然るに英國、和蘭、デンマルクの諸國は是を見て大にフレデリックに同情を表し、デンマルク王クリスチアン四世は兵を出してフレデリックを救はんことを圖りたれども獨軍の名將ワールレンスタイン及びチリイの破る所となり故國に追はれて和議を結べり、獨乙皇帝勝に乘して舊教復興の勅令を發して益々國內の新教を壓制したり、此に於てスウェーデン王ガスタラス、アドルフスは當時國力増長に注目するの餘り、新教を救ふを名として兵を起し

Christian IV.
Wallenstein
Tilly
Gustavus Adolphus

新教軍の大勝

ルイ十三世
リシエリ
ユ一宰相
となり兵
を出して
獨乙の新
教軍を援
く

英、蘭二國の後援を得て獨乙に侵入し到る處に獨乙軍を破り進んで南方に攻め入り一六三二年ルツェンの野にワールンスタインの軍を悉く破れり、此戰たるスウェーデン王自ら斃れたり、雖も新教軍の大勝之を以て始め、此より先き佛王ヘンリー四世は獨乙を侵すの志ありしも果さずして殂し其子ルイ十三世幼にして母后メリイ政を攝して一時國政を紊亂したれども大僧正リシエリ一不世出の才を懷きて佛國の大宰相となるに及びて國是一定し、故ヘンリー王の素志を受けて兵を獨乙に出し以て新教軍を援けたり、一六三四年ワールンスタイン叛逆の疑を得て陣中に殺されしより獨乙軍の勢大に沮喪し加ふるに從來獨乙軍に加祖したる西班牙國が内憂外患に苦しみて援兵を

ウエスト
フッリア
の條約

三十年戦争の結果

リシエリ
ユ一佛國
強大の基
を開く

派遣する能はざるに至り、獨乙皇帝は前途の勝算覺束無きを察して遂に休戰を約し、一六四八年に至りてウエストフッリアの和議を締結したり、此條約に依りて新舊兩教は同權を有するに至り、和蘭及びスヴヰランドは各其獨立を承認せられ、佛國及びスウェーデンは戰勝の爲めに莫大の領土を得たり、獨り獨乙は戰後國內の諸侯割據の狀を呈して帝國殆ど瓦解し、國力日に疲弊して朝野の事業全く振はざるに至れり、

第七章 佛國の強大

佛國の大宰相リシエリ一は國內の中央集權を確立して對外政策に全力を注ぐの方針を執り、宗教内亂を蔑視し、貴族の

マザリンの事業

跋扈を制して王權を擴張し海陸の軍備を整ふる等在職十八年の間孜孜として其實行を務めしかば佛國強大の基礎此に成れり、リシュリエー死して大僧正マザリン其遺業を継ぎ

Mazarin

ウエストフリアの條約に依りて領域を増大し、西班牙の内乱

Vesphalia

に干涉してネザールランド領の一部を得、西班牙王の長女マ

Netherland

リア、デレンサを當時の佛王ルイ十四世に嫁せしめたり、

Louis XIV.

ルイ十四世

世

佛國の状況

ルイ十四世英邁豪放長して政を親らし君主專制の策を既に胸中に畫し、佛國の文學技術、風俗習慣をして歐洲諸國の模範たらしめ以て佛國の隆盛を驕らんことを務めたり、故を以て當時ウルサイユの宮殿壯麗華美を極め宮中の儀禮完備したるは素より言を俟たず、貴賤尊卑の等級自ら分れて社會の秩序能く整ひ、國會の如きは單に王命を奉するに

Versaille

佛國文學の隆盛

過ぎざるに至れり、王權の發揚此時の如きは未だ曾て見ざる所なり、されば佛國宮廷の制度は自然に列國君王の摸倣する所となり、之に伴ふて佛國の文物習慣は普く歐洲社會に好迎せらるるに至り、ルイ十四世の希望愈々其實を擧げたり、かの文壇の名士たるコルネーユ、ラシーン、モリエール、ラ

Louis XIV.

Cornelle

Racine

Moliere

La

Fontaine

フン、テーン等出て佛國文學の黄金時代を作爲するに至りたるも實に此時に存す、

ルイ十四世コルネーユと擧げて財務を委ぬ

ルイ十四世は常に表面の華美を驕るを務めたるのみならず財政の才に長せるコルベルトを擧げて國家の財務を一任したり、コルベルト大命を奉して經營二十年、祖税を改良し外國の輸入品を防きて國內の商工業を振興し以て國民一斑の富源を養はしめ、又海外貿易を獎勵して遠く印度亞

國庫増加

ルイ十四世の外征

ルイ十四世和蘭を征す

弗利加諸國へ交易の端緒を開かじめたり、之を以て上下の經濟其宜しきを得て自ら餘裕あるに至り國庫の増加は王をして着々佛國隆盛の策を實行するの効あらじめたり、國家の基礎既に鞏固なるやルイ十四世は外國に其餘力を及ぼさんご欲し、偶々西班牙王Philip IV四世殂するに當り自ら其婿たるの故を以て領土の割讓を請求して容れられざるを名ごして兵を西班牙領Netherlandに出したり、然るに英、蘭、スウェーデンの三國同盟に妨げられて果さず一六六八年エラシヤベルに和を講じて兵を本國に旋したり、此に於てかルイ十四世は大に和蘭の處置を怨み、先づ英、蘭、スウェーデンの三國同盟を解散するの策を講じ、然る後自らコンデConde、ナレンヌ等の名將を隨へて和蘭を征す、和蘭のオレンジ公Orange

ニムエー
ゲンの條
約
ルイ十四世獨乙に出兵す

ウィリアム三世は陸軍を率ひ、De Ruyterルイテル將軍は海軍を指揮して風雨に乗じて奮戦したれども佛軍の爲めに大に敗れ、獨乙ブランデンブルグの撰舉公起ちて和蘭の急を救ひたれども佛軍に妨げられて果さず一六七八年和蘭は遂にニムエーゲンに和議を締結したり、此勢に乗じてルイ十四世は進んで獨乙に干涉し、當時獨乙が諸侯割據の爲め國力疲弊せるを機ごして兵を出したれば、英、蘭、西の三國は獨乙に與みして同盟を結び以てルイ十四世に衝れり、然るに佛軍勝ちてリスウツクの條約を結び、佛王は獨乙の要地を併したり、此の如く佛國は内治外交共に着々ごして其効を奏せしかば、當時佛國の隆盛他に其類を見ざるに至り、列國皆其盛況を傍觀するの有様なりき、

等八章 和蘭の東洋殖民

和蘭の國
是

西班牙大
に和蘭を
妨く
和蘭印度
交通の策
を講ず

西班牙、葡萄牙に次きて東洋殖民に着手したるは和蘭及び英、佛の三國にして就中和蘭は最も其初めに成効したり、和蘭は元々航海貿易を以て國を維持し當時世界貿易の中心たるリスボン府に往復して歐洲各地に貨物の分配を司り以て商利を博したり、然るに其一たび叛して西班牙の羈絆を脱して獨立するや大に本國西班牙の憎む所となれり、偶々葡國が血統上の關係より西班牙王國に併せらるの事起り西班牙は和蘭に復讐せんを欲し直に和蘭船のリスボン入港を禁止大に和蘭の貿易に妨害を與へたり、和蘭は事國家の消長に關するを以て此に直接印度交通の路を開か

リンシユ
ーテン、
ホウトマ
ンの二艦
隊和蘭を
出發す

ジャワ嶋
に蘭人バ
ダツ・ア
市を設く
和蘭東印
度商會の
設立

んことを決し、印度商會なるものを設けて熾んに之が策を講し始めたり、一五九五年リンシユーテン、及びホウトマンの二艦隊和蘭を出發して南北兩路に分れて進みたりしが北路を取りたるリンシユーテンはノワゼムブラ嶋を發見して本國に歸り、南路に進みたるホウトマンは亞弗利加を廻りて印度に至り、モラッカ島を占領して遂にジャバリ島に達し英葡兩國の妨害を排斥して難なく此島にバタヴァ市を創設したり、
Molacca
Java
Batavia
ホウトマン艦隊が其効を完ふして本國に歸着するや和蘭の共和諸州舉て東洋貿易に注目し忽ちにして和蘭東印度商會と號する一大會社の組織成り、政府の保護を受けて屢々艦隊を東印度に派遣したり、此中マヘイ艦隊の一隻は慶